



は  
の  
ち

宮古市立田老第一中学校 津波体験作文集



金曜日  
【FRI】  
④ 2月7日

MARCH  
**11**

平成三十三年  
3月

2019年4月  
2019年5月  
2019年6月  
2019年7月  
2019年8月  
2019年9月  
2019年10月  
2019年11月  
2019年12月

印刷(十二画)  
ひらく  
2019年4月  
2019年5月  
2019年6月  
2019年7月  
2019年8月  
2019年9月  
2019年10月  
2019年11月  
2019年12月

貸切バスのご用命は  
**東日本交通株式会社**

本社 ☎ 0994-22-4751(代) 営業所 岩手、盛岡、宇都宮、東京、宮城、田代、北上

し尿及取、浄化槽清掃、管理、貨物運送、一般、産業ゴミ収集運搬

**中央第一総合有限会社**

盛岡 ☎ 0194-22-3434 盛岡 ☎ 019-663-6678 北上 ☎ 0190-72-6181

あの日 ~校長室のカレンダー~  
額のデザイン制作 安倍 詩織(岩手大学教育学部3年)  
デザインアドバイス 田中 隆充(岩手大学教授)

# 目次

## 出版の趣旨

岩手大学地域防災研究センター センター長

堺 茂樹

## はじめに

宮古市立田老第一中学校 校長

佐々木 力也

## 生徒作文

・ 二学年生徒

・ 三学年生徒

・ 平成二十三年卒業生

・ コンクール応募作文

「私の主張」

「FM岩手家族の絆作文コンクール」

「東北電力中学生作文コンクール」

## 生徒作文の解説

〈中学生の作文から聞こえる復興の足音〉

岩手大学教授 山崎 友子

平成二十三年卒業式式辞

宮古市立田老第一中学校 校長 佐々木 力也

震災後の学校の歩み

・ 平成二十三年入学式歓迎のことば

生徒会長 村井 旬

・ 平成二十四年度学校経営の概要

・ 「田老」果てなき大海原へ」 Tシャツが結ぶ絆

・ 学校日誌より

・ 平成二十四年度版校報「田老第一中学校」

東日本大震災津波関連資料

・ 記録写真

津波の脅威

震災から立ち上がる学校と生徒達

・ 新聞記事

教職員名簿

おわりに

宮古市立田老第一中学校 教諭 暮目 靖子

一	出版の趣旨	一〇一
一	はじめに	一一一
三	生徒作文	一一一
五	・ 二学年生徒	一一一
七	・ 三学年生徒	一一一
七	・ 平成二十三年卒業生	一一一
八	・ コンクール応募作文	一一一
八	「私の主張」	一一一
九	「FM岩手家族の絆作文コンクール」	一一一
九	「東北電力中学生作文コンクール」	一一一
九	生徒作文の解説	一一一
一〇	〈中学生の作文から聞こえる復興の足音〉	一一一
一〇	岩手大学教授 山崎 友子	一一一
一一	平成二十三年卒業式式辞	一一一
一一	宮古市立田老第一中学校 校長 佐々木 力也	一一一
一一	震災後の学校の歩み	一一一
一一	生徒会長 村井 旬	一一一
一一	平成二十三年入学式歓迎のことば	一一一
一一	生徒会長 村井 旬	一一一
一二	平成二十四年度学校経営の概要	一一一
一二	「田老」果てなき大海原へ」 Tシャツが結ぶ絆	一一一
一二	学校日誌より	一一一
一二	平成二十四年度版校報「田老第一中学校」	一一一
一二	東日本大震災津波関連資料	一一一
一二	記録写真	一一一
一二	津波の脅威	一一一
一二	震災から立ち上がる学校と生徒達	一一一
一二	新聞記事	一一一
一二	教職員名簿	一一一
一二	おわりに	一一一
一二	宮古市立田老第一中学校 教諭 暮目 靖子	一一一



# 出版の趣旨

岩手大学地域防災研究センター

センター長

堺

茂樹

# 出版の趣旨

岩手大学地域防災研究センター長 堺 茂 樹

2013年3月11日、宮古市立田老第一中学校が体験した東日本大震災のちょうど2年後のこの日、記録を作文集として出版することができました。国内観測史上最大規模の地震とこれに伴い発生した巨大津波により1万9000人を超える尊い命が失われ、家族や生活の場等何物にも代えがたいものが数多くの人々から奪われました。本書は、犠牲になられた皆様への深い慰霊の思い、復興に向けての強い気持ちで、田老第一中学校が構想したもので、岩手大学地域防災研究センターが作文集として出版するという運びになったものです。

岩手大学では、東日本大震災前に設置されていた工学部附属地域防災研究センターを発展させ、文理融合型の全学的研究センターとして「岩手大学地域防災研究センター」を開設しました。東日本大震災は巨大津波の広域に及ぶ破壊力やそれに伴う原子力発電所の破損による被害の深刻さをまざまざと示しました。さらに、個々人ばかりでなく地域全体の活動が破壊され、復興の道は険しく複雑なものとなり、災害および防災の研究のあり方は再考と深化を迫られました。このような状況で、岩手大学地域防災研究センターは、災害を引き起こす自然現象とともに、地域の地形・産業構造・歴史文化等も併せて研究し、地域住民の視点から地域の防災を捉え、災害に強い 施設づくり まちづくり 地域固有の災害文化の醸成・実践・継承と人づくりを機能的に連携させたボトムアップ型防災システム の提案を目指して設立されました。

2011年3月11日、大地震を学校において体験し、引き続いて発生した大津波から生徒・教職員全員が無事に避難し、壊滅的な被害を受けた地区で学校がどのように立ちあがっているかを、本書は被災者の視点で語っています。地域防災を研究する上で、極めて貴重な資料です。本書の出版により、貴重な資料を後世に残すことができ、長い年月にわたり災害を忘れず、被害から教訓を学び取る機会を提供することができると思います。復興に関わられておられる方々・災害研究者の方々に役立てていただけるよう願っております。

本書の出版を構想し、作文指導の労を取られた田老第一中学校の先生方に感謝し、大津波という厳しい体験をした中学生が希望をもって未来を切り開き、よりよい社会づくりの担い手となられていくことを願ってやみません。

2013年3月11日

# はじめに

宮古市立田老第一中学校  
校長 佐々木 力也

# はじめに

宮古市立田老第一中学校 校長 佐々木 力也

東日本大震災から早くも二年が経過しようとしている。震災翌日、三月十二日早朝の田老は雪に覆われていた。「津波のあとには雪が降る」と言い伝え通りの「無情の雪」となった。被災者の死亡原因のほとんどは溺死である。しかし、瓦礫の中に埋もれ凍えて亡くなっている人がいるとすれば、無常の雪を恨み悲しむ。震災直後、度重なる余震のため一睡もせずに朝を迎え、田老総合事務所三階の窓越しに見える瓦礫に埋もれた風景を見ながらそう思った。

今、生きていることに感謝しながら、これまでに数多くの支援を受け、田老一中の復興教育に取り組んでいる。この中で、小職の強いおもいは、震災の風化を学校として阻止しなければならないということだ。その取り組みの一つとして、震災関連の表現活動を教育活動の一環として実施することで、そのねがいを実現したかった。

そこで、六月の職員会議で、震災関連の表現活動の意義を次のように示した。「震災から一年以上経過し、学校教育の一環として、震災にかかわる様々な表現活動を実施することは、大震災から精神的に回復し、悲しみや不安を常に脇にかかえながらも岩手や田老の復興に向けた意識や意欲を高め、これからの人生を前向きに歩んでいく力を育てていく大きな原動力となる。震災関連の作文を文集にし、生徒の将来の家族や地域の人たちに伝え続けることができれば、震災体験や教訓は風化しないことに加え、田老地区の防災教育や復興に向けた活力を生む貴重な資料ともなり、生徒自らが自他の生命を守り復興に向けた生きる力を育むことができると確信する。」

生徒には、一学期の終業式で、「震災から学んだことを表現することがこれから必要です。風化が再び悲劇を生むとすれば、田老一中の役割は極めて大きい。その中心は、何といつても自分の命をしっかり守ること、そして、他の人の命を支え守ることの大切さを伝えること、そして、田老の未来の姿を語り、復興への夢を描くことだと思います。皆さんにお願いしたいことは、命の大切さや復興へのねがいを、日本はもとより世界中の人たちに伝え、表現する活動を、今から少しずつ準備してほしいことです。」と話した。

そして、二学期から、震災関連の表現活動の一環として、震災に関連する作文に取り組んでもらった。

しかし、表現活動を展開する時、生徒の心の有り様に配慮しなければならない。心の奥底にある悲しみや不安を無理に引き出すことで大きなストレスを生じさせないとも限らないし、何年経とうとも、深い悲しみや記憶を消し去り忘れることはできないからだ。

震災関連の表現活動を進めるにあたり背中を押してくれたのは、荒谷アイさんの言葉だった。荒谷さんは、田老尋常高等小学校五年生の時、昭和八年の三陸大津波に遭っている。そして、六年生の時、担任指導である佐々木耕助先生から「ありのままを作文に書け。」と指導され、「津波」という題で、記録として後世に残る感動的な作文を綴った。今では、その作文を吉村昭氏の著作「三陸海岸大津波」で読むことができる。その荒谷アイさんからの「作文はいつか、誰かの役に立つ。」というメッセージに心が躍動した。（佐々木耕助先生は、小職の父のおじにあたる方で、幼少の頃お会いしたことがある。小説の中では、「短距離の選手で、丹前姿で後から迫る津波と競争して逃げ勝ったのです。」とある。確かに、スポーツ万能の背の高いハンサムな先生であったように記憶している。）

平成二十四年度当初の職員会議で、復興教育の学校経営方針の具体を示した。一つ目は「震災の記録と発信」、二つ目は「命の教育活動の推進」である。今年度は、震災関連行事を数多く行った。四月十日から三泊四日の「返礼の行脚」として実施した修学旅行、九月二十日には二年生が松園中学校で、田畑ヨシさんの紙芝居「つなみ」の朗読披露を行った。十一月には、連合音楽会で、ふるさと田老へのおもいを創作曲「あの日から」に込め、全校合唱で会場を感動させた。十二月には、三年生が、手作りクッキーを仮設住宅に届ける活動を行い、「利他の精神」をかたちにしたボランティア活動を行う等、多種多様な震災関連の教育活動を実施した。

そして、岩手大学の先生方のご指導とご支援を得て、今年度最後の震災の記録と発信、命の教育活動のひとつとして、作文集「いのち」を三月十一日付けで発行するのはこびととなった。

この作文集は、荒谷アイさんがおっしゃる通り、いつか誰かの役に立つと思う。言つなれば、この文集が、生きる震災の記録集としての価値をにわかには持つと思う。そして、震災で得た学びや教訓を後世に伝え、もしも、津波に流され、無常の雪に埋もれ、尊い人を亡くされたならば、その悲しみを胸に刻みつつ、その人のために自分はどう生きるべきかを考え、その人のためにも生き抜く決意を強くし、希望を持って前向きに生きていく指針となる、と確信する。田老第一中学校の生徒は、中学校を卒業しても、次々に新たな「試練や困難」が、相変わらずやってくると思う。しかし、その「試練や困難」を乗り越えた先には、どのような風景が見えるのだろうか。田老の生徒には、時々、文集「いのち」を紐解き、将来の家族に読んでもらい、共に未来の田老や岩手の風景を描くとともに、来べき試練や困難を乗り越え、何事にも負けないしつかりとした自己を確立するため、前を向いて、一歩ずつ、新しい世界へ向かって進んで行くことを心から願ってやまない。





田老一中校舎と春満開の桜の木



女子美術大学により描かれた第3防浪堤の壁画  
(平成4年8月26日完成)



平成24年度 文化祭シンボルパネル  
テーマ「伝えよう～灯そう我らの進む道～」

生徒作文 一学年生徒 (四十三名)

津波が来て感じたこと	大澤 兼人	震災で学んだこと	川村 柊也
津波で変わった田老の町	門屋 英二	東日本大震災をこえて	佐々木 駿
震災が起きてからの一年間	佐々木 龍	校歌と大地震	澤田 雄大
生きなければならぬ	高橋 銀児	地震が起こってから・・・	下山 競馬
震災を振り返ってみると	田村 大輝	震災を振り返って	鈴木 優友
東日本大震災が起こって・・・	向口 瑠架	元氣な田老	福島 祐也
大震災から一年	山本 一慶	震災から今日まで	水沼 毅己
感謝の気持ちを忘れない	山本 光晟	災害に強い田老にしたい	山本 龍雅
絆	山本 大輔	今、感じるこ	吉水 祐太
震災を通して気づいたこと	山本 哲也	復興	和井田 溪
田老の復興をめざして	山本 智哉	東日本大震災を通して	加藤 穂乃佳
復興に向かって一歩ずつ	山本 葉月	復興へ向かって	小林 舞
震災から一年たつて思ったこと	阿部 真生	今の心境	小向 郁絵
三月十一日	下西 彩貴	普通に生きている幸せ	佐々木 呼子
震災を振り返って	飛澤 美月	波が来た時の私	澤口 倫代
東日本大震災から感じたこと	鳥居 奈々子	田老の復興への道	清水川 未知
復興へ	丸山 恭生	震災から経った今	馬場 千尋
震災から一年	安田 ひかる	東日本大震災	平澤 舞
復興に向かって	山崎 ひより	三月十一日	吉水 愛美
震災を受けて	山本 結香	復興への思い	涌田 莉捺
私たちの「ふるさと田老」	山本 李歩		
願い	扇田 尚也		
あの日からの生活	女供 武		

## 津波が来て感じたこと

大澤 兼人

僕は、三月十一日に東日本大震災を体験しました。僕はその時、小学校にいました。まずは、山の方に逃げて津波は、見ることができなかつたので今、何が起きているのかなと思いましたが、体育館に戻るときに町が見えて、町にはガレキしかありませんでした。そして、夜になって避難してきた人たちが泣いている姿をいっぱい見かけました。僕は、心配しながら家族の迎えを待っていました。お母さんが迎えに来てくれました。その時とてもほっとしました。その後北高に避難しました。避難する途中で、他の家族にも会えて本当によかったです。北高に避難してから、二、三日経ってやっと連絡がつながるようになって、僕たちは摂待の親戚の家に行つてやっと落ち着きました。

しばらくして、震災の影響がおさまった時に僕たちは家が元々あった場所に行ってみました。家があった所には、他の家の人の物や家具がありました。僕たちの写真やアルバムはぜんぜん違う場所にありました。なにもかもめちゃくちゃで、どこに何があるのか全然わかりませんでした。結局僕たちの物は四つくらいしか見つかりませんでした。なんだか寂しくなりました。

そして震災から、しばらく経って仮設住宅が

建ちました。仮設住宅は狭く、外の音が聞こえてきて落ち着きませんでした。しかし、自衛隊がガレキを運ぶ姿を見てみると、僕も頑張ろうという気持ちになっていきました。これからも僕は頑張っていきたいと思えます。

僕は、町が復興するときに今度は、津波が来ない平和な町になってほしいと思っています。僕は将来地元で働きたいと考えているのです。

僕も復興のためにできることをやっていきたいと思えます。

## 津波で変わった田老の町

門屋 英一

三月十日の夜から、三月十一日の朝まで、飼っている猫がうるさいくらいに鳴いていました。僕はいつものように小学校に登校しました。午後二時四十六分に震度六強の地震が三回くらい来ました。でも、お母さんがすぐに来てくれて安心しました。お母さんと帰ろうとして、車に乗ろうとした瞬間後ろから、「津波だ、逃げるー。」と声が出たので後ろを見ると、砂煙で何も見えなく、ゴォーという波の音が聞こえてすごく怖かったです。家に帰るのを諦め、体育館で一

泊してから姉を迎えに行きました。

線路から見た景色は、がれきしかありませんでした。物を取りに家に戻ったら、家が全滅でした。とてもがっかりして、どこに行こうか迷っていた時におじちゃんに会いました。これは運が良かったと思えました。それから婆ちゃんの家に行きました。猫も連れて行きました。電気もなかったので毎日、発電機をつけたりしました。大変でしたが、家族全員無事でした。

僕は人間には感じないものを猫が教えてくれたのだと思いました。僕は海が嫌いになりました。津波は、大切なものをつぶっていききました。僕は、今まで驚沢な暮らしをしていたのだなと、あとになってから実感しました。それから二か月後くらいに仮設住宅に入居しました。狭いけど暮らせるならいいと思えました。グリーンピアの仮設住宅は小さな町のようなのでした。暮らせるようになったのは、自衛隊の人たちが支援していただいたおかげです。今は、小さな町がにぎやかです。

僕は、震災から毎日前に進もうという気持ちと、津波が怖いという気持ちを持つようになりました。また、自分の命は自分で守ることと自衛隊に感謝の気持ちを忘れないようにしようと思えました。僕の夢は、早く田老を復興して、活気溢れる町にすることです。大きい店などを

くさん作っているいろいろな県からも、もっと人が来てにぎやかになったらいいなあと思います。

## 震災が起きてからの一年間

佐々木 龍

三月十一日、僕たちは音楽室で卒業式の練習をしていました。二時四十六分、ゴーとすごい音を立て、すごく強い揺れが襲ってきました。キヤーと泣く人もいました。一分…いや、三分。怖かった揺れがおさまり一息つこうとしたとき、

「校庭に避難してください。」

と先生が言いに来ました。そして走って校庭に避難して、ラジオを聞いていました。

「宮古で二十センチの津波を観測しました。二十センチと聞いて少し安心しました。」

でもその数十分後、バキバキバキと町の木がどンドン、倒れていきました。

「逃げろー!」

とつさに、山に逃げました。エーンエーンエーンと泣いている人が大勢いました。その数十分後、校庭に戻ってみました。田老の町がこんなことにな…とても衝撃的な光景でした。

田老の町は破壊され、津波で押し流されたが

れきだけが残っていました。家族は大丈夫だろうかと、とても心配でした。そして、体育館で、恐怖と戦いながら一夜を過ごしました。その夜おじちゃんに来て、

「お母さん、お父さん、妹は違う避難所に避難している。」と言われ、弟と一緒に喜びました。その次の日お父さんが、おじちゃんと一緒に、迎えに来ました。そして線路の上を歩きました。そのとき見た田老の町は…。見たことない光景でした。

そして、しばらく岩泉の肘葛という場所に避難していました。岩泉ではすることがなく、楽しみは、ゴミ捨て、買い物、まき割りなどで、普段とはまったく違う生活でした。

つまらない毎日でした。

一か月後、田老の祖母の家へ移りました。その近くに友達の家があり、友達と遊ぶことができたので、楽しかったです。一か月後仮設住宅ができたとの知らせがあり、入居しました。友達も沢山いたので、とてもとてもうれしかったです。毎日のように友達と遊ぶ、普通のことかとてもうれしかったです。

もう震災から一年が経ちます。町は大分片付きましたが、元に戻るのはまだ先だそうです。元に戻るまで平和に暮らせたらいいなと思います。

## 生きなければならぬ

高橋 銀児

震災から一年。ぼくは今も、当時のことを最初から今日までわすれたことはない。同時に母の死も決して忘れない。

三月十一日、二時四十六分十八秒、僕は初め小さな地響きを感じた。その後、三年ほど前の岩手宮城内陸地震の時のような、とても大きな揺れを感じた。五分もかかる地震だった。その後余震が続いた。そのあと校庭で家の人を守った。たくさんの人が来て、僕の家の人も来た。そして車で学校を出て、百メートルほど行ったその時、横の道からいきなり黒い水の塊が来た。家と同じくらいの高さだった。僕はすぐ車を出て、学校の方へ走った。母も僕の後に車から出て走った。しかし、後ろから来る津波の方が早く、僕は横の道に飛び込んだ。その時、母は波に足を取られ転んでしまったようだった。僕はすぐにその場から走り出したため、よく見えなかった。そのあと、さっきいた道も波の中になったため、僕は挟まれた。そこで僕は、家と家の間に入り学校側へと走り出した。しかし、今度は広い道へ出た時、すぐ横の道から波が追いつき、僕はそこで、どうなっていたかよくわからなかった。でもなんとかまた上がって、また走

り出した。窓ガラスが開いていた家に入り、その中のベッドの上上がって、ベッドごと水に浮かび上がった。あと少いで、天井とベッドに挟まれるところだった。しばらくして、水がさがり、僕はすぐ近くのガラスを割り、消防団員の手も借りて、外に出ることができた。その時見た様子は、今も決して忘れはしない。どこがどこだかわからない。見渡す限り家や車や海底の泥だらけだった。

それから二週間ほどで、母が遺体で見つかった。僕はその時、こうすれば、ああすれば、という後悔ばかり思い出していた。

しかし今は、あまりいやな思いはしないようになった。津波の恐ろしさは体験した人にかわらないこともある。しかも津波は、遙か昔から、現代そして未来にも、ずっと消えないものである。だから僕たち人間は、津波から逃げることができない。一生付き合うものだと思うと、いつまでも落ち込んでいられない。前を向いていかなければならない。そしてそのためにたくさんの人たちがぼくらを様々な形で支援してくれた。

この体験を通して僕は、こんな時こそ協力の力が一番大きな力を発揮するのだと強く感じた。津波はこれからも続いていく。そしてまたその時、人々は協力という力を発揮するだろう。

僕は、母を亡くしたということで、海外にも行くことができた。これも母からのプレゼントだと思っている。これからも、家族に感謝し、顔も知らないぼくたちに、支援してくれた人々への感謝もわすれずに生きていきたいと思っている。

### 震災を振り返ってみると

田村 大輝

あの時は、小学校の音楽室で音楽の授業をしていました。歌おうとした時に地震が来て、余震がおさまるまで待ち、おさまったら外へダッシュで避難しました。全員の無事を確認してから数分後に副校長先生が、

「逃げるー。」

と言ったので、ダッシュで近くの山の奥のほうに走っていきました。何分か待機していて地域の人たちが、

「下りて来い。」

と言ったので降りてきてみると、町がぐちゃぐちゃになっていて、みんなが、

「うわー。」

と言っていました。その日の夜は、体育館に泊まりました。

次の日、お母さんが線路を歩いて迎えに来てくれました。線路を通って帰るためにトンネルに行きましたが、真つ暗だったので転んでしまいました。次のトンネルに着いた時にトンネルの上の山が燃えていて、地域の人たちが、

「行くな。」

と言っていたけど、それでもトンネルをくぐって行きました。給食センターの所を下りてずっと歩いて、おじちゃんの手でグリーンピアに行きました。ホテルの中に入って自分の部屋に荷物を置き、友達がいるか探してみると色々な人がいました。そこでは八時ぐらいに寝る生活が続きました。その後、アリーナに避難することになりました。ある日、いらなくなった漫画が届いたので、それを読んで過ごしました。その後も、支援のイベントやお店が来しました。

徐々に生活が安定してきた頃、小学校の三階を借りて授業を受けることになりました。中学校の校舎が使えるようになると、中学校で使うものを移動したり、その合間に授業をしたり、部活をしたりしました。

アリーナに帰ると、仮設住宅に荷物を移動する手伝いをしました。仮設住宅は少し広くて良かったです。

## 東日本大震災が起こって…

向口 瑠袈

三月十一日、僕たちは卒業式の練習をしていました。

その時、大きな揺れが大きな音とともに僕たちの学校にやってきました。僕はすぐに近くにあったピアノの下にもぐり揺れが小さくなるのを待ちました。揺れが小さくなったときに校庭に出て整列していました。それからも余震は続き恐怖に耐えていました。

その時、町のほうから音とともに砂煙が巻き上がり、電柱や家が倒れているのが見えました。その瓦礫がこっちに押し寄せてきました。そのとき「逃げる。」という声が聞こえたので、一目散に裏山に走りました。初めて感じる怖さと津波が来ているという怖さが同時にきて、本当に怖かったです。それからみんなのところに行き、待機していました。中には泣いている人もいました。それから少し経って灰が飛んできていることに気付き、山にいたら移り火で焼けてしまうということで、小学校の体育館に行きました。

次の日は、朝から机を運び教室にも避難所を作りました。そして昼になり夜から何も食べていなかったなので、お腹が減ってしまいました。

しかし昼飯のおにぎりは、お年寄りが優先だったので、なかなかもらえませんでした。やっともらえたおにぎりは、二人で一つだったので満腹にはなりませんでした。

その後僕は、避難所を総合事務所に替えて過ごしました。その間も余震は続きました。

それから家に戻り家の二階から田老の町を見ました。見たときはあ然としました。家は一軒もなく防浪堤は壊れ、山では火事が起こっていました。その日は家で過ごしました。次の日は、水道も止まっていたので水くみと洗濯に行きました。その洗濯に行く道も壊れた家の上を通ったり、線路を通ったりして行きました。夜になったら明かりはローソク一本で生活していました。

それから食料も尽き始めたので宮古に買い物をして行くことにしました。その行く道も簡単ではありませんでした。壊れた家の上を通り、車とすれすれの道路を歩き加工場の上まで二時間くらいかけて歩きました。それがしんどかったです。

これからはこの教訓を後世に伝えて、自然災害に負けない田老にしていきたいです。

## 大震災から一年

山本 一慶

「行ってきます。」

と、朝学校に行くときいつも言っていました。そしてじいちゃんが、

「行ってらっしゃい。」

と、笑顔で見送ってくれました。それがいつものことでした。その日も、普通に学校へ行き、普通に過ごしました。六校時は、一週間後に控えた卒業式の歌の練習でした。みんなが集まり、歌い出した瞬間、急に揺れ出しました。二日前も地震があり、その余震だろっ、と最初は思っていました。しかし、揺れはおさまらず、むしろ大きくなっていきました。五分後くらいに、揺れはおさまりました。そして、校庭に避難しました。校庭では、ラジオのニュースやサイレンの音など、たくさん音が聞こえてきました。他の人の親は来ているのに、自分の親は来なくて、不安になりました。十分後先生が、

「逃げるー！」

と叫びました。それと同時に、学校の裏山へ逃げました。

その日の夜は、小学校の体育館で寝ました。小学生や先生だけでなく、田老の人たちがたくさんいました。その夜、まだ自分の家の状況や

家族の安否が分からなくて、なかなか眠れませんでした。

次の日の朝、体育館に母と姉とおじさんがいたので、安心しました。それから線路の上から、初めて町の状況を見ました。津波というものを、まだあまり分からなかった僕は、何があつて、町がこのような状況になっているのか分かりませんでした。他の避難所に行くと同学年の友達に会えて安心しました。

その夜、おばさんの家に行きました。そこでは、次の日に電気や水道が回復していました。テレビのニュースで、宮城や福島の様子や津波の映像が流れていて、その時初めて、津波が来たのだな、ということが分かりました。それから数日間、おばさんの家でお世話になって、初めて自分の家の状況を見に行きました。一階は全壊で、二階は少し壊れていたけど、ほとんど物は残っていました。

三月二十四日には、小学校の卒業式が行われました。残念ながら、練習した通りでは行われなかったのですが、このような状況でも、行うことができてよかったです。四月二十五日には、中学校の入学式を行うことができました。しかし、震災の日から何日経つても、父親とじいちゃんが帰ってくることはありませんでした。

田老には今、たくさんの雑草が生えています。

その雑草は、このような大震災があつて、津波が来て瓦礫に埋もれても、簡単に負けずに、強く生えてきた雑草です。自分も、その雑草のように、強く生きてゆきたいです。

### 感謝の気持ちをお忘れな

山本 光晟

三月十一日、僕たちは東日本大震災にあいました。地震発生時、僕たちは音楽室で卒業式の時に歌う練習をしていました。歌おうとした瞬間、大きな地鳴りがしてそのあとに大きな地震がきました。最初は何が起きているか分からず、ただ先生たちの言われた通りにするしかありませんでした。しばらくして地震がおさまり、外に出ると避難してきた人がたくさんいました。その後、海のほうを見ると、水しぶきが見えて、先生が、

「津波だ。逃げる。」

と大きな声で叫んでいたの、山のほうへ走って逃げました。それからしばらくして校舎のほうへ行くと、校門付近まで津波が来た跡がありました。その日、僕は線路を通って家まで歩いて行きました。夜は、余震が来て眠れなかったの、ラジオで情報を聞いていました。

二日目の朝、母の実家へ山の道を通って行きました。意外と時間がかかり、やっとの思いで宮古の市街地から、母の実家につきました。その時、電気がついていて、テレビを見ることができました。テレビの画面には、震災の情報が出ていました。津波の映像や、火災が起こっている映像をみて、心が痛くなりました。

三日目は、家に帰る途中、食品などを買いにスーパーに寄ると、人が多く三十分くらい並んでから、ようやく店の中へ入ることができました。電気は少しだけついていて、食品棚は少ししかありませんでした。田老に戻ってくると、すでに電気はついていたり、道も通れるようになっていて、自衛隊や多くの人が僕たちのために、力を尽くしてくれたと思うとありがたい気持ちでいっぱいになりました。

これからの田老は、人がたくさん集まり、地域に住む人が元気で過ごせるような町にしたいです。そしてみんなで心を一つにし、積極的にボランティアや地域のために一生懸命取り組める町にしたいと思います。これからの田老を復興させるために、自分にできることを考え、努力したいと思います。



## 絆

山本 大輔

東日本大震災からもう一年が過ぎようとしています。しかし、町の風景が変わることとはなく、集められた瓦礫の山が残っています。一年近く経つても、被災三県の瓦礫の処理はたつたの五パーセントしか行われていません。さらに風評被害などが広がり、瓦礫の受け入れも、なかなか進みません。復興までの道のりはまだまだ険しいようです。

どうしてこんな事になったのだろう。最初はただ延々と考えていました。冷静になれたのは、避難して学校の裏山のある程度安全で広い場所に着いた時でした。ひたすら走ったのに、全然疲れを感じませんでした。休んでいる時に家族は無事だろうか、家はもうだめだろうか、これからどうなるのだろうか、ということを考えていました。しばらくしてから一度学校に戻りました。学校は無事で校庭にはたくさんの方がいて、その中から母と祖母を見つけました。母から、家が流されたと聞きました。覚悟はしていたけれど、いざ家が流されたと聞くと涙がこみあげてきて、いったん周りから離れて泣きましました。そして、自分がすっかりしなげばならぬかと思えました。その日は、小学校の体育館で

夜を明かしました。明かりは、蠟燭や懐中電灯

ぐらいで暗く、また、空腹や疲れなどで辛かったけれど、何よりも寒さが一番体にこたえました。夜九時ごろになって、配給のおにぎりが配られました。また、寝ようと思っても寝られませんでした。そのため、深夜に寝て早朝に起きてしまいました。外に出ると、雪が降り積もっていて寒かったです。避難して二日目は、体育館に残った友人と一緒に、支援物資を運んだりして、自分が今できることを精一杯やりました。そして父と二人の姉とも合流して、グリーンピアに行くことになりました。そこで様々な人たちと出会うことができ、他県からのボランティアの方々や特別仲の良いというわけでもない同級生や先輩とも仲良くなっていきました。

今、僕には特に何かこの職業に就きたいとかそういうものはないけれど、こんな人になりたいという目標はある。災害の多い日本ではきつとまた大きな災害が起きることだろうと思えます。そんな時に自分ができることを精一杯やりたいです。ボランティア等にも行って、たくさんの人とつながっていきたいです。一人で無理ならたくさんの人たちと一緒に協力してやれば良いと思います。そして、別の地域だけでなく、田老の復興もみんなと一緒にいけば出来るはずで。そして、いつか前よりも活気のある

田老の街を作り上げます。

## 震災を通して気づいたこと

山本 哲也

僕は三月十一日に東日本大震災を経験しました。三月十一日の震災発生の少し前から、卒業式で歌う歌の練習をしていました。ちょうど、ピアノの伴奏が始まった時に、大きな地震が田老を襲いました。その地震は一分以上続いたので、急いで校庭に避難しました。しばらくすると、校庭にたくさんのお親達が来ていました。そして、五分から十分ぐらいの間に、ドンという音が聞こえました。その音は防浪堤に津波がぶつかったときの音だという事が分かりました。ドンという音が聞こえてから一、二分ぐらいで津波が来ました。その後、三十分以上山にいて、津波が来なかった体育館へ行きました。体育館で少し待っていたら、親が迎えに来たので、その日は、近くの親せきの家に泊まりました。でも、夜にも大津波警報が出ていました。だから、夜もなかなか寝ることができませんでした。それから三日間は津波警報が解除されるまで、なかなか家から出ることができませんでした。

それからは小学校で生活しました。食べ物

配給の物だけで、夜は寒い体育館で寝なければなりませんでした。とてもつらかったです。

四月一日に避難所へ行きました。多くの人がいました。とても狭かったです。

この震災を通して気づいたことは、地域の人や全国のたくさんの方々の支援があったからこそ、僕は今、こうして震災前のような生活が少しずつできるようになったということです。改めて僕は、地域の人、そして全国の方々の優しい心に気付きました。その他には、当たり前前が当たり前でなくなること、不便さや、失われた命の重みなどに気付くことができませんでした。僕も、津波で祖母を亡くしたので、とてもつらいです。でも、震災に決して負けないという田老の強い思いは変わらないと思います。

最後に、僕達の住んでいる田老は、復興し、元の田老に戻ると思っています。そして田老に、たくさんの方々が来て、たくさんの方々が建ち、十メートル以上の防浪堤が建ち、津波に負けない田老になると思います。田老は震災に負けない町になると信じています。

## 田老の復興をめざして

山本 智哉

三月十一日、まだ僕たちは小学六年生の頃でした。あと七日で、卒業式という時でした。

当時は、小学校に避難していました。その夜は、落ち着かない中、体育館で過ごしました。次の日の朝起きてみると、体育館の中にはたくさんの方がいました。その日、宮古にいた父親が帰ってきました。その日のうちに線路を通り、ふれあい荘まで歩いていきました。ふれあい荘にもたくさんの方がいました。ふれあい荘では、落ち着いて寝られました。

次の日の朝は、豪華な朝食が出ました。でも家ごと流されたので、遊ぶものもありませんでした。でも、ちょうどふれあい荘にオセロがあったので借りて遊びました。楽しいなと思いが、兄ちゃんと遊んでいました。

道路が開通したから家のほうまで行ってみました。辺り一面が、歩く幅も出来ていて、いろんなガレキや、車や家などが、撤去されていました。でも自分の家の屋根があり、その屋根の下には、僕の使っていた机、服の入ったタンスなどが濡れずにあったので、よかったです。次の日も通ってみたら、自分のゲームやさいふなどが見つかったので本当に

うれしかったです。

たまに、小学校の先生や中学校の先生がふれあい荘に来ました。一番やさしいと思ったのは、中学校の前の僕たちの担任、杉浦先生でした。僕の兄ちゃんにコーラをかってきてくれたからです。

ふれあい荘生活もいよいよ終わりになってきました。お世話をしてもらったふれあい荘で感謝の手紙を書くことをみんなで計画していました。

そして、お別れの日がきて、みんなはバスに乗り、僕はじいちゃんタクシーに乗っていきました。グリーンピアのアリーナには、たくさんの方がいました。そこで友人と久しぶりに再会して、あえてよかったです。しばらくして卒業式がありました。みんな、全員卒業できたのでよかったです。

グリーンピアに来てから、生活がちょっとよくなりました。それで選ばれてホテルにいききました。唯一、ホテルでは食卓もよく、毎日いい料理でした。そしてやっと仮設に入れるようになりました。僕はわくわくしていました。仮設に入ってから前のような暮らしができました。また、学校に通う日がやってきました。毎日バスに乗っています。

僕が津波を経験して大切だと思ったことは、

大きな揺れがしたら、すぐ高台に逃げることで  
す。これからの生活に、生かしていきたいです。

## 復興に向かって一歩ずつ

山本 葉月

あと少しで震災から一年が経とうとしています。  
ます。

震災があった日は、僕はまだ小学生でした。  
地震がきたときは、音楽室で歌の練習をしてい  
ました。先生の指示で校庭に出ました。校庭に  
しゃがんでいたら、

「逃げる。」

と言つ声が聞こえて山に逃げました。山に避  
難し、しばらくしてから小学校に歩いて戻りま  
した。そして、僕は総合事務所に行きました。  
そこで朝になるまで寝たりしていました。夜は  
特に寒かったです。ご飯は、おにぎり半分でし  
た。少なかったです。でも、震災があった日に  
おにぎりを食べられたのはよかったです。そし  
て、朝になったらトンネルを通って車まで歩い  
て行きました。トンネルの中は暗くて怖かった  
です。そして、車まで行って家に帰りました。  
停電していて電気が使えなかったので、いつも  
生活しているようにできず、部屋が寒かったで

す。寒さしのぎのため毛布をかぶっていました。  
おながすいたので家にあったお菓子を食べま  
した。

一か月経ったら学校に行つて友達と久しぶり  
に会いました。友達に会えたのでうれしかった  
です。小学校で卒業式をして、中学生になりま  
した。

あの震災から約一年が経ちました。がれきな  
どが道路からもなくなりました。田老にも少し  
店が出来ました。学校も今では、普通に行ける  
ようになりました。僕たちのために支援物資な  
どをたくさん送っていただき、感謝をしていま  
す。その支援物資は、これからも大切に使いた  
いと思います。

あの震災があつてから、僕が思う事は今の  
田老が前みたいになつてほしい事です。祭りが  
にぎやかに開かれる事を願っています。僕は、  
就職をしてできれば地元で働きたいと思いま  
す。そして、田老の役に立ちたいと思います。  
これから僕は、一歩ずつ頑張つていきたいと思  
います。

## 震災から一年たつて思つたこと

阿部 真生

震災から一年経つて思つたことは、田老の町  
は寂しいなあつて思いました。理由は家も店も  
ないしポツンって感じだからです。

あの日を振り返ると、私は小学六年生で卒業  
式の歌の練習をしに三階の音楽室にいました。  
その歌っている最中に大きな地震がきました。  
私はピアノの下に逃げました。それでもしばら  
く大きな地震は続き私たちは校庭へ行しまし  
た。校庭に行つても大きい地震、小さい地震が  
しばらく続きました。校庭にはたくさんの避難  
者がきていました。そして、先生達が大きな声  
で、

「津波だー、逃げるー。」

と叫び私達は走つて学校の裏山に逃げまし  
た。でもそのとき私は、黒い波を見てしまいま  
した。たくさんさんの家のみこまれていました。  
それを見たとき、とても怖かったです。

私達が裏山へ行き、先生が人数確認をしまし  
た。その後、もっと高い所まで行きました。す  
ると空から灰が落ちてきました。泣いている人  
もいました。

しばらくして学校の近くにある広い所に行く  
と、先生達が話し合いをしていました。空を見

るとヘリコプターがたくさん飛んでいました。私は、家に帰れるのかなあと思いました。同時に家族の人が心配になりました。

少し暗くなった頃私達は学校の体育館へ行きました。するとたくさん逃げてきた人がいました。薄暗くて寒かったです。中に入ってからはほとんど自由でした。いろんな人と会話をしていました。午後七時半頃私のお父さんが迎えに来てくれました。そのときは嬉しかったです。

私はお父さんと線路を歩いて帰りました。二人だけ歩いていました。しかも外は真っ暗で、手に持っている、懐中電灯だけが道を照らしてくれました。夜八時ぐらいに家について私はすぐ寝ました。

次の日の朝、家にはお姉ちゃん以外のみんながいました。お姉ちゃんは中学校にいと聞き、安心しました。それでも余震は続き揺れている床が普通になりました。

しばらくして田老の町を歩きました。自衛隊もたくさんいました。車の交通整備もしてくれていました。寒い中、私達のために頑張ってくれて本当に感謝しています。

震災から何日か経って私の家にも支援物資のパンが届きました。車にガソリンが少ししかなくて買い物にもあまり行けなかつたので、嬉しかったです。家でパンを食べました。久しぶり

にパンを食べました。おいしかったです。

私はたくさんの方々に支援してもらいました。内容はそれぞれだけれど、とても心温かいものばかりでした。食べ物、生活用品、文房具、それぞれもらいました。

たくさんの人に支援されてきた私達は、早く田老の町、東北が復興するように、これからも努力していきたいと思えます。

三月十一日

下西 彩貴

私の故郷の田老は、三月十一日に大きな津波にあいました。当時私は、小学校六年生でした。その日の朝、毎日群がって飛ぶ鳥が空を飛んでいきました。その時は動物たちの警告に気が付くべきでした。その日の二時四十六分、大きく気味が悪い地震が発生しました。その時、私たちは、音楽室であと何日かにせまった卒業式の練習をしていました。

いきなりの地震に音楽室は悲鳴に溢れました。地震が止まると先生の指示で一勢に外へ向かい走り出しました。中ズックから外ズックにはきかえないで避難する人もいました。私もその中の一人で、怖さのあまり中ズックから外

ズックにはきかえるのも忘れていました。私と数人以外の人は外ズックにはきかえて外に出てきました。一年生から六年生の全生徒は校庭の真ん中に皆で座り、親の人の迎えを待っていました。何人かは親の人が迎えに来て帰りました。「津波が近づいてきたので、裏山に避難しましょう。」

地震が来てから何分か後に先生たちが言いました。皆、個人で裏山に全力で走りました。私は走るのに夢中で気が付きませんでした。同級生達の話によると、

「黒い波と黒いけむりが見えた。」

と言っていました。女子の何人かは泣いていました。私も山に走っている時に不安のあまり泣いてしまいました。恐怖と、家族のことがとても心配で。特に祖父と祖母と姉のことが心配でした。山に登ってから少したって先生が、

「そろそろ山から下りて学校に戻りましょう。」

と言われて、学校に戻ってきました。辺りはもう暗くて戻ってくるのが大変でしたが、戻った時に私はとても嬉しかったです。それは、心配していた姉が体育館の前で辺りをキョロキョロと見ていたことです。私はとても心配していた姉が無事で本当に嬉しかったです。

です。その後、父とも合流でき、後は母と祖父と祖母がとて心配でしたが、後から無事と知りました。その日は姉が学校で支給されていた毛布を二枚持ってきて、その毛布を三人で分けて寝ました。暗くて、何も食べるのがなくて、今何時かも分からない状況でした。

私は、この震災で田老は防浪堤を建てただけで他の防災対策をしていないと思いました。そして、津波がまた来たら田老にはもういたくないです。

津波で学んだことは昔からの教えを忘れてはいけないことです。理由は、昔からの教えを忘れて、車に乗って逃げる人が多くいたため、逃げ遅れた多くの人が死んだからそれをくり返さないために昔からの教えを守るべきだと思ったからです。

### 震災を振り返って

飛澤 美月

私は震災があつた時、小学校の音楽室で卒業式の歌の練習をしていました。ピアノが鳴り始めてすぐに地震がありました。最初はすぐ終わるだろうと思っていました。でも地震はどんどん強くなり、すごく怖かったです。外に出るよ

う指示が出されました。そして外では友達と、

「津波はこないよね。」

と話していました。その時近くにいた大人たち、

「津波が来たぞ。逃げる。」

と言われて、みんなで小学校の裏の山に逃げました。しばらくして小学校の体育館に行き、その日は体育館に泊まりました。とても寒くて暗い静かな夜でした。

次の日、お母さん達が迎えにきました。そして、グリーンピアの途中まで歩いて行きました。グリーンピアでは、電気がついていて、避難している人がたくさんいました。知り合いや身内を探している人もたくさんいました。それから避難生活が始まりました。約四カ月間仮設住宅が出来るまでアリーナというところにいました。そこには友達もいて意外と楽しい避難生活でした。仮設住宅は、となりの迷惑になるので、声を小さくして喋らなきゃいけないので大変でした。でも今では新しい家に住んで家族みんなで楽しく暮らしています。

震災を通じて、家族の大切やこの体験を伝えていかなければならないと感じました。物がなくても家族がいれば楽しく暮らすことができます。家族全員無事でよかったです。この体験を伝える活動をもっと体験してない人に伝える

たいと思います。そして、一人でも多くの人が津波の怖さと命の大切さを感じてくれたらうれしいです。

これからの学校生活の中でこの震災の体験で感じた、伝える事の大切さ、人と人とのつながりの大切さを忘れず一日一日を大切にしていきたいです。そして、今まで以上に楽しく残りの中学校生活を過ごし、悔いがなく楽しい生活にしていきたいです。

### 東日本大震災から感じたこと

鳥居奈々子

大震災が起きたのは、私たちが小学校六年生の時でした。その時は六時間目で、卒業式の歌の練習をしていました。もう少しで卒業式だったのに、大きい地震と津波が私たちを襲いました。すごく怖くて、みんなで走って山のほうへ逃げました。山にいる時も小さい揺れがありました。また波がくるのかなと余震が起こるたびに何度も何度も思いました。一度小学校の体育館に戻り、指示が出るまで待っていました。

家族が迎えに来た人は安心して帰っていきましたが、半分以上の人は、学校に泊まり、寒い中で薄い紅白幕をかけて温まりました。お腹が

空いている時に、おにぎりが届きました。一つを二人で分けて食べました。こんなことは二度と起きなければよいなと思いました。寒くて寝ることができず、私は二時間くらいしか眠れませんでした。その日の夜は、このままどうなるのだろうと不安な気持ちでいっぱいでした。

次の日の朝は、雪が積もっていて、前の日より寒かったことを覚えています。そんな時に母が迎えに来てくれた時は、無事だったのだなと安心しました。卒業式はどうなるのだろうと思いつつ、家まで線路を渡って帰りました。家は何ともなかつたけど、やっぱり寒くて、これまでの生活とはほとんど変わってしまいました。

約一か月経った頃に、卒業式をやるということを知りました。久々にみんなに会えるのだなと楽しみになってきました。当日は、みんなと写真を撮ったり、話しをしたり、本当に思い出に残る一日になりました。でも帰るときには、また会えなくなるのかなと思っていました。

しかし四月下旬、中学校の入学式がありました。でも、中学校の一階が使えないということだったので、小学校の三階を借りて、学校生活を送っていました。全学年が同じ階で、狭くて不便でした。その時は、中学校に戻りたいと思いつつながら毎日生活していました。

九月半ば頃に中学校に戻りました。中学校では、体育祭や学習成果発表会などできないと思っていた行事ができて、とてもうれしかったです。

私たちが襲った東日本大震災からだいぶ月日が経ちました。私は前の田老が好きだったので、また元通りになってほしいです。そして復興した田老にたくさんの観光客を呼んで立派な町を見てほしいです。

## 復興へ

丸山 恭生

防浪堤にあたり、響く大砲のような大きな音、それと同時に町を飲み込む黒い波、壊れて流れてくるたくさんの家々・・・今でも鮮明に思い出すことができます。

あの頃、私たちは小学六年生でした。三月で卒業が近づき、合唱の練習をしていました。ガタガタと揺れる物、パンパンと今にも割れそうな窓・・・聞こえてくるのはたくさんの悲鳴でした。地震も小さくなった頃、私たちはやっと校舎を出て校庭に避難することができました。その後、ばあちゃんが迎えにきました。公民館で働いている家族の所へ行くこととしていまし

た。役場前に行くことと消防の活動をしているお父さんに会うことができました。公民館に行くことを伝えて歩き出そうとしたとき、お父さんに、「ダメだ、上がれ！」

と叫ばれました。そして役場脇の階段を上がり始めると、ドンという大きな音が響き、次の瞬間田老の町は黒い波に飲み込まれていました。お父さんがあの場所にいなかったら今頃私たちはどうなっていたのだろうと考えると、今でも怖くてたまりません。それからお寺に避難しました。お寺に避難したものの、食べ物はなく、暖も取れず、寒さと不安でいっぱいでした。朝になり私は外に出ました。明るかった田老の町とは一変し、瓦礫の山でいっぱいでした。自然災害を目の前に私たちの無力さを思い知らされました。昼頃、宮古のばあちゃん家に行きました。それから三か月くらい宮古に避難してました。

そして六年生だった私達は中学校へと無事入学することができました。中学校は一階に水が入り使えませんでした。中学生は小学校の三階を借りるようになりました。三階に全学年入るのですごく生活しにくい環境でした。十月になり中学校に戻ることができました。六年と半年お世話になった小学校もついに別れました。中学校は小学校より校舎が複雑で最初の頃は迷

いそうだったけど、やっとで中学生になれた気がして嬉しかったです。中学校に戻ってからは、小学校ではできなかった行事をたくさんすることができました。

私達は田老を復興させなければなりません。それは、たくさんの支援があったからです。世界中の人々が支援してくださったのは、私たちに復興してほしいからだと思います。それには、すごく長い時間がかかると思います。だからこそ震災前の町より、明るく活発にしていきたいです。

田老の復興を応援し、支援してくださいました皆様に感謝の気持ちを込めて、一日でも早い復興を目指して生活していきたいです。

## 震災から一年

安田ひかる

私は去年の三月十一日、東日本大震災を経験しました。私は地震がくる前、小学校の音楽室で授業を受けていました。その時、地鳴りがして、大きな地震がきました。みんな、壁ぎわによってしゃがみこみました。今までにないくらい大きな地震だったので、私は津波がくるな、と思いました。地震がおさまり、みんなで校庭

に出ました。何分かって、誰かが、

「波がきた。逃げる！」

と叫びました。その瞬間、校庭にいた人全員が裏山に逃げました。必死に坂を駆け上がりました。ふと、町の方を見ると、砂煙が見えました。山に逃げてクラスで整列しました。その後、五時くらいに小学校に下りていきました。私はお母さんと妹が一緒だったので安心していましたが、他の人は親も兄弟も居場所が分からない状況で、不安で不安で泣いていた子もたくさんいました。私は一晩、小学校で過ごししました。初め、体育館に入ってステージでみんなと話をしていました。そしたら、けが人がタン力で運ばれてきました。私は、そのとき、こんなに恐ろしい津波だったのかということを知りました。晩ごはんは、二人で一つのおにぎりを食べました。私は、「ご飯は食べられないだろうな」と思っていたので、ご飯を食べることができず、嬉しかったです。「ご飯を食べたら、もう八時くらいになっていったと思います。先生に寝ていいよ、と言われましたが、わたしは一時間くらいしか寝られません。次の日、おじいちゃんが迎えにきてくれました。おじいちゃんが、「助かって良かった。」

と、泣いていました。そのあと、お兄ちゃんにも会えてすごくほっとしました。そして、線

路を通って帰りました。その途中、変わり果てた田老の町を見ました。言葉もでませんでした。そのあと、おじいちゃんの家に着いて、私の家族全員が助かった、ということを知って、本当に良かったと思いました。

その何日か後に、自分の家があった場所に行きました。変わり果てたというより、何もありませんでした。その後、みんなで自分たちの物を探しました。私の物は写真と百点のテストが見つかりました。それだけでも、すごく嬉しかったです。今でも大事に持っています。

私は、この東日本大震災を一生忘れず、私に子供ができたら、この経験を伝えたいと思います。

## 復興に向かって

山崎ひより

東日本大震災から一年が経とうとしています。私は中学校生活を充実させています。

三月十一日、その日は特に何もなく、卒業式練習に明け暮れていて、卒業式が楽しみでした。五時間目、卒業式練習をしていたとき急に地震がきました。これまでにないくらい大きくて、長かったし、電気が消えたのでおかしいと思い

ました。その予想がまさかあたるなんて思ってもいませんでした。波を見て田老がなくなつたときうそだと思いました。次の日は生きること  
に気をとられていてそれほど悲しくなかつたです。でも、今気付けばすごく悔しいです。私は、人は自然に勝てないと思いました。

私は田老が少しずつでも復興していると思います。私は、田老に総合運動公園ができればいいなと思います。そうすれば、たくさんの人が運動でき、健康に暮らせると思うし、大会が開催されれば各地からたくさんの人が来て、田老がもつと活性化すると思つたからです。道路などの普及で今よりももつとたくさんの人が来てくれることを願っています。あと、木でいっぱい  
の田老になってほしいです。家が建つのに木は必要です。しかし、前みたいな田老に戻るためには木も大切だと思えます。環境にも優しい田老になってほしいです。

今まで支援してくださつたみなさんありがとうございました。私たちはみなさんのおかげでだんだんと元の生活に戻ることができています。ほかに義援金や花、お菓子、文房具などをいただき元気が出ました。今、中学校は復旧作業でだんだん直つてきました。復興が少しずつ進んでいることが実感できてうれしいです。いろいろなところからたくさん  
の支援をして

いただき本当にありがとございました。

私は十年後の田老を見てみたいです。十年後の田老に期待しています。田老がまた前みたいな楽しくて活気のある美しい田老に戻ることを祈っています。

私は一生津波のことを忘れません。でも後悔はしません。私は一步一步前に進んでいきたいと思えます。

### 震災を受けて

山本 結香

激しい揺れが私たちを襲いました。その時は七日後に控えた卒業式の合唱練習をしている真つ最中でした。激しい揺れで立っていることすらできなくなり、ずっと座っていました。揺れがおさまり、急いで校庭に避難してラジオを聞くと、

「大津波警報発令中。」

という言葉が繰り返し流れていました。でも私は、そんなことはないだろうと思つて、この大津波を軽く見ていました。すると突然

「逃げろー！早く早くー津波だー！」

と、先生や避難してきた近所の人たちがみんなに大声で呼びかけました。その呼びかけ

と共に、学校にいた生徒が次々に裏山に避難しました。

夜は学校の体育館に泊まりました。明かりは口ウソクだけで誰がどこにいるのかも、分かりませんでした。寝るときは、卒業式などで使つた紅白幕や各教室のカーテンを五人でかけて寝ました。しかし私はなかなか眠ることができませんでした。母はどうなつてしまったのか、家族や親戚はみんな無事なのか：頭の中には不安がたくさんよぎっていました。

次の日の朝、友達たちは家族が迎えに来て次々と帰っていく中、私の家族は迎えが来なくて、一度友達の家で避難しました。その時壊滅した町を見て、言葉が出なくなりました。このことが夢であつてほしいと思つていました。お昼くらいになると線路を歩いて母が迎えに来ました。無事に再会できた嬉しさは、とても大きかったです。私たちは母、妹と三人で線路を引き返しました。家に着くと、家の周りには海から流されてきたヒトデや魚の稚魚や、ゴミなどが散乱していました。次にまた津波が来たら、家にいるのはとても危険だったので必要な荷物、食料を持って宮古北高校に避難しました。そしたら祖母と飼っていた犬が座つて待っていました。家族が全員そろいホツとしました。それから約二週間、避難生活を続けていまし



た。家に帰ると、母の会社から段ボールいっぱい、に食料や衣服などが送られてきていました。だから私たちは食料にはあまり困らずに生活できました。しかし、電気も通らず水道も使えず、口ウソク一本で苦しい生活を送っていました。幸い水は、家の後ろを流れる川があったので困りませんでした。

三月二十四日、卒業式。震災があつて卒業式を行うのが危ぶまれていた中、先生方が私たちのためにみんなを集め、卒業式を行ってくれました。震災後から友達に一人も会っていないだったので、会えた時は声が裏返るほど嬉しかったです。

あの日を境に、普通のことや普通でなくなり今までにない過酷な毎日でした。しかし、私が震災から学んだことは数えきれなくらいあります。どんなにつらい時でもお互い助け合っていれば乗り越えられる素晴らしさ。どんなときも私たちのために頑張ってくれている人がいること……。暑い夏の中、懸命に遺体を探していた自衛隊の方々には本当にすごいと思います。私だったら、遺体を探しても自分のためにはならないし、むしろつらい思いをするだけだから絶対にできないと思います。それだけではなく、被災者を勇気づけるイベントやコンサートには感動しました。あと、支援物資を送って

くれた方々にも感謝でいっぱいです。震災から一年以上経つた今でも物資が送られてきて胸がいっぱいになります。

私は助けてくださった人全員にこの思いを伝えたいです。

「ありがとうございます」と。

### 私たちの「ふるさと田老」

山本 李歩

三月十一日、あの日私たちはまだ小学六年生だったので、卒業式の歌の練習をしていました。ピアノの前奏が終わり歌っている時に、小さな揺れが起こりました。誰かが、

「地震だ。」

と言ったときに、突然大きな揺れに変わりました。立っていることも大変になって、私は友達と音楽室の真ん中で固まっていました。とても長くて強い地震で怖かったです。校庭に避難してから揺れは収まらず体育館の窓が、

「ガタガタッ。」

と揺れていました。空もだんだん曇ってきてジメジメしてきました。お母さんも小学校に来ていて三年生だった弟と校庭にいました。しばらくしたら裏山の方で、

「何しているんだ。津波が来たぞ。早く逃げろ。」

と声がしたので、全校生徒で逃げました。町の方を見たら砂埃が見えました。あれは、津波が家を壊した時にできたものだ、あとになつて分かりました。

裏山にみんなで必死に逃げ、怖くて泣いている人もたくさんいました。あまり奥に行き過ぎると今度は山火事が危ない、という話を聞き、どうすればいいのかわからないで泣いていました。

しばらくしてから、体育館に戻るとたくさん避難者がいました。私は家族といましたが、泣いている友達とも一緒にいました。夜は寒くて学校中のカーテンを足にかけました。一枚のカーテンを五人以上でかけました。とても長くて寒い不安な夜を過ごしました。

朝になって外に出たら想像を絶する光景が目の前にありました。がれきの山が積み重なっていて自分たちが今まで住んでいた町だとは思えませんでした。

あの日から一年が経とうとしています。以前よりはがれきも少なくなり、高台にある仮設住宅からスクールバスで毎日登下校しています。最近になって、あの日より私の周りに以前いた祖父や親せきの人たちの存在を強く思い出す

ようになりました。震災を経て、人と人とのつながりを強く感じるようになりました。私は本当に自衛隊の方々や支援物資を届けてくれた全国の方々に感謝しています。私はまだ中学一年生なので大きな恩返しはできませんが、今は勉強や部活動を精一杯頑張つて、応援してくれた方々に感謝の気持ちを伝えたいです。

そして、これからも幾度となく田老を津波は襲うと思います。今回の津波は油断して逃げなかつた人たちもたくさんいるので、この経験を永遠に忘れてほしくないです。それから、津波は人や物、建物だけを奪っていくものではありません。いろいろな人たちを悲しみでいっぱいにしてしまいます。

この経験を忘れず、田老が一步一步、復興していくことを願います。そして、私自身も頑張り、「ふるさと田老」を応援していきたいと思えます。

願 い

扇田 尚也

あの大震災から一年が経とうとしています。

あの時は、まだ小学六年生で卒業式の中で歌う歌の練習をしていました。一曲歌って、改

善点などについて話し、また歌を歌おうとしてピアノが鳴った途端、あの大震災が来ました。最初は小さい揺れからどんどん大きくなり、立っていると転びそうになるくらいの地震が来ました。僕はピアノの下に隠れじつとしていました。先生が、

「校庭に避難してください。」

と言ったので校庭に避難しました。そしてラジオを聞いていました。ラジオでは、6メートルの津波が来ると予想している情報などが流れていました。すると、大きな飛行機が学校の周りを飛んでいてそれを見た校長先生が、

「津波が来たから逃げる。」

と叫んだので僕たちは山へ全力で走りました。後ろを振り返ると茶色い煙が上がっていて、どんだん木が倒れていきました。津波が来たんだなと思いました。それから僕たちは、山の方の平らな場所に集まって先生の話を聞いていました。たびたび自分たちの飛行機が飛んでいました。三十分位はその場所にいました。先生方が安全かどうかを見に行き、安全だと分かったので僕たちは、また学校に戻りました。校門から見える田老の町は瓦礫の海に変わり果てていました。今度は体育館に避難しました。僕は、ここで一泊するのかと思っていました。でも僕の祖母が来たので寺に行くことになりました。

た。またここでも一泊するのか思っていたけれど、今度は父が宮古から迎えに来ました。僕はそのまま父と宮古に行くことにし、人生で初めて線路を歩きました。その時は夜だったので、とても暗かったです。山の方を見ると赤く光っていました。僕は火事が起こっているのだなと気づきました。それから、一か月位ここで生活しました。それから、アパートに引っ越して、宮古から田老の中学校に通っています。

こんな生活を送ってきて、あの大震災から一年が経とうとしています。約一年が経つて思う僕の願いは、早くこの田老の町が元の田老に戻るといいということです。

あの日からの生活

女児 武

三月十一日はいつものように時間が過ぎていき、まだ小学生だった僕たちは、いつものように授業を受けていました。するといきなり地震が起きました。最初いつも通りの地震だと思っていました。いつもと違う揺れでした。どんな揺れが強くなっていました。

数分経ち、揺れがおさまりました。すぐに避難が始まりました。校庭に全校の人たちが集ま

り、情報を集めていました。サイレンが鳴ったり、地域の人達が避難してきたりしました。そして数分後いきなり、

「津波だー。逃げろー。」

と誰かが叫びました。それで街の方を見てみると、家が動いていたり、砂ぼこりらしきものが出ていたりしました。それを見て裏の山の方へ一生懸命走りました。空にはヘリコプター三機飛んでいました。

それから二時間後ぐらいでした。体育館に戻ると、体育館にはたくさんの人達が避難してました。余震がずっと続き、みんなびくびくしながら過していました。自分の家族は大丈夫だろうかと心配しているときに父さんがやって来て、姉がいる総合事務所に行くことになりました。普通の道が通れないため、線路を通って向かう途中、数人の友達と会い、話をしました。そして数時間後、母とも合流して避難所に向かい、そこで三日間ぐらい過しました。その後、宮古のばあちゃんの家に行き十日過ごし、家に帰ると、まだ電気はなく、暗かったです。電気がついたのは震災十三日後でした。

このような震災直後の不便な状況から、一年が経とうとしています。この一年間はいつもと違う一年でした。世界各国や、全国のみなさんからコンサートをしていただいたり、文房具

部活で使う物など、様々な種類の支援をいただきました。支援していただいた物のおかげで今生活できています。

未来の復興した田老は前のように、活気があふれる、港町になってほしいです。まずみなさんには地震が起きたら、冷静になって行動してほしいです。津波が来るときは一回逃げたら戻らないでほしいです。

この一年は本当にいろいろなことがありました。自衛隊のみなさんを始め、いろいろな人に感謝したいです。

普通に生活できる幸せをかみしめて、生きていきたいです。

### 震災で学んだこと

川村 柊也

震災からもう一年経つ頃ですが、今でもあの時の出来事が頭から離れません。

津波で建物が崩れ流される様子などに、すごく心が痛みました。僕は、震災の日に小学校の体育館に、避難しようとしてました。そのため、母は犬がいるとほかの人たちに、迷惑がかかるという、体育館の近くの兄の同級生の家に、預けに行っていました。

「赤沼さんが、来てもいいよといったからおいで。」

と言いました。僕や家族のみんなは、本当に泊まってもいいのだろうかという気持ちでした。しかし、赤沼さんは快く、

「入って、入って。」

と、言ってくれました。僕は、この震災で悲しくなった気持ちから初めて明るい気持ちになりました。家には、こたつがあり外は雪も降っていたのですごく暖かくなりました。でも、赤沼さんの家族の方々は、すごく寒いのにこたつにも入らず僕たちに譲ってくれたのだと思い、申し訳ないという気持ちになりました。夜中の十二時くらいになると、いとこの人たちが集まってきて少し安心しました。僕は父の居場所が分からず心配していましたが、

「船で沖に逃げたから、大丈夫だろう。」

と言ってくれました。でも、まだ不安は消えませんでした。三日か、四日後あたりに、僕は、姉とおばあちゃんと一緒に河南の関川さんという親戚の家にお世話になることになりました。関川さんの家では、水をバケツにくんで家まで運ばなければならず、大変でした。

七日間お世話になったあと、もう一度田老に戻ってきたりして大変でした。赤沼さんの家に二泊ほど泊まらせてもらいました。田老の道路

には、もう瓦礫はほぼ撤去されてなくなっていました。僕は、いとこの高校生の人と田老の町を歩いたりしました。震災後初めて歩いてみたけど、田老の町はもう僕たちの知っている田老ではないと改めて実感しました。

やれるかどうかからなかった卒業式ができず、すごく嬉しかったです。

澤田さんの家にも二十日間程お世話になりました。雄大君とは、いとこだったので一緒にいて楽しかったです。

僕はこの震災を通して、家族や仲間と団結する力が付いたのではないかと思いました。そして、震災に絶対に負けないという強い気持ちが大事だと思いました。

## 東日本大震災をこえて

佐々木 駿

僕は、三月十一日、地震が来る前は学校の教室で一人で卒業アルバムを作っていて、ほかの人は体育館で卒業式の練習をしていました。作っている時に先生に、卒業式の練習をするから体育館に行こうと言われました。この時呼ばれないあの地震が来たら、僕はどうなったのか想像しただけで怖くなります。そして、

練習していたときに地震が来てとても怖かったです。その後、お墓に避難して津波を見たときはとても怖かったです。みんな泣いていて僕も泣きそうになりました。そして、お墓よりもっと上のほうに上がって様子を見てみたら海側のほうの住宅地は何もなく、初めてそこで津波がどれだけのものだったのかを知りました。同時に沖に行っていた父と祖父のことが心配になって、無事だった家に戻るときも避難所にいる時もずっと心配していました。でも、父と祖父は沖にいた他の船に助けられて無事だと聞いた時にはとても安心しました。

震災後、みんな海に行きましたが僕はその時は怖くて行けませんでしたが、少しして父が連れて行ってくれるというのでついていきました。行ったらもうそこは、僕の知っている海ではなくて、何もなかったの更地のようになっています。なぜ父は、僕にこんなところを見せたのかを考えてみました。たぶん父は、映像とかで見るとは全く実際に見て肌で感じて津波の恐ろしさというものを身をもって知ってほしかったのだと思います。僕はこれを見て、もう漁業はできないと感じました。でも帰る前に、自分の家の船を運ぶ台車を見つけました。父がそれを見て、また漁ができるかもしれないという言葉聞いたとき、僕はまだできないわ

けじゃないんだと希望を持ちました。

そして今、津波の時に父が乗っていた船が使えるようになり、漁業ができそうになっています。僕は海が好きなので、養殖ができるようになったら家族みんなと一緒に養殖の仕事を頑張りたいです。そして、大人になったら父の後を継いで立派な漁師になりたいです。

## 校歌と大地震

澤田 雄大

三月十一日楽しく過ごしていたあの日、体育の時間バスケットをし、初めてゴールをいれました。そして、六時間目のはじまりのとき、大きな揺れが僕らを襲いました。グラングランと大きな揺れが襲いました。やっと収まったと思ったら、まだ揺れていました。校舎に移動した時にはもう多くの人たちが集まっていました。その時、津波が襲ってきました。実際に経験しないと信じない、どんなものより怖い、想像を超えた恐ろしさ、自分の悪さ、それを考えても、あの光景が頭の中で恐ろしく広がります。正直言ってい出したくありませんでした。

しかし、これから町を復興した後にも、恐ろしい津波、大地震が来るとすれば、まだ僕らに

は子孫を助けるチャンスがあると思います。できるだけこの教訓を伝えるために、僕はそういう運動をしていきたいです。

小学校で一夜過ごすときは、つらい現実がありました。一つの小さなせんべいを半分に分けておにぎりも半分に分けて食べました。このときは十分に食料が来ませんでした。余震も何回もありました。僕は寝られなく、余震におびえながら過ごしました。そして母さんは無事かなと思いつつ過ごしました。

一夜過ごした僕は、母さんに会いました。その時のうれしかった気持ちばかりしれませんが、しかし、町を見ていると恐ろしさが広がります。

ここまで悲しく、つらかった震災を受け入れるしかないのです。しかし、中学校の校歌には、試練の津波いくたびぞ  
乗り越えたいし

我が郷土

とあります。僕は、この津波を乗り越えれば、新しい未来が来ると思っています。

## 地震が起こってから・・・

下山 競馬

地震が起こった時僕たちは校庭に避難してました。その何分か後に黒い煙をあげながら電柱を倒して、津波が来るのが目に見えました。僕たちは高い所に逃げて何分間か留まっていた。

それから体育館に避難しました。トイレは水が出ないのでただ消毒液をつけて除菌してました。一時間が何時間にも感じたり、余震が続いたりしてとても怖かったです。電気も点かなくてろうそくで明かりを補っていました。それからしばらく経つとおにぎりが届き、僕たちは一つのおにぎりを二人分に分けて食べました。

次の日、昨日の津波が来る前の田老とは、全然違う風景がそこにありました。僕は、和野のおばあちゃんの所で二日間お世話になりました。最初のうちは食べる物が少なかったけれど、何日か経つと水や電気も復旧して食べる物も多くなりました。それから温泉にも入浴でき、友達とも遊べて楽しかったです。でも田老に戻ると、街には何もなくて悲しくなりました。

それから小学校の卒業式がありました。僕はセリフや歌の歌詞を少し忘れていました。本番では歌だけ歌い、セリフは言わないで卒業証書

をもらい終わりました。

その後中学校に入り、仮設住宅にも入れて、今ではほとんど普通の暮らしに戻れたので良かったです。けっこう早く電気や水、食事やがれきの撤去ができたのは支援して下さった自衛隊の人や県外の人、国外の人のおかげだと思います。たるちゃんハウスも建ち、お菓子なども買えたりしてとても充実しています。これも全て支援して下さいました人々に感謝して学校生活を送りたいと思います。

## 震災を振り返って

鈴木 優友

僕は震災当時、学校で授業をしていました。最初は小さい揺れだけだったけど、時間が経つにつれて揺れが大きくなり、揺れている時間がとても長かったです。揺れが収まった後外に出て、校庭の中央に全学年が集まりました。時間が経つにつれ、生徒達の親が迎えにきました。僕の家の人も迎えに来ました。

僕は、帰ってもいいという許可が出たので帰ることにしました。帰りは、友達のお車に乗せてもらって帰りました。帰る途中、野球場のほうから高いしびきが上がりました。なんだ？

と思って、最初は目を疑いましたが、よく見ると、防浪堤を越えて水がやってきました。正体は津波でした。慌てて車のスピードを上げて逃げました。僕は、駅の近くに家があるのですが、スピードを上げて逃げているときに、家を見たのが最後でした。大平という地区のおばあちゃんの家のお近くでおおろしてもらい、高台に逃げました。逃げたところには、人がいっぱいいて、自分でもすごく混乱していました。僕の家はどうだったのかなあ、友達は大丈夫かなあ、と思っていました。大平まで小さい津波が来ました。僕のおばあちゃんの家は、床下浸水でした。津波が引いてから家に帰り、寒さに耐えながら一日を過ごしました。

次の日は、避難所である宮古北高校に行きました。銀児君や毅己君もいたので、すくうれしかつたです。避難所で過ごして五日間過ぎた頃から、盛岡に行くことになりました。行く途中に、田老の町並みが見たくて見に行きました。僕の家は無く、周りの家も無く、あるのは、壊れた車やがれきだけがありました。僕はびつくりして言葉が出ませんでした。

盛岡ではお風呂に入ることができ、ご飯でも肉などが食べられて、とても満足していました。だけど、たまに田老の方に余震などが起こり、テレビで見ると大丈夫かなあと思っていま

した。僕は、電気が復旧するまで盛岡にいました。盛岡から久しぶりに帰ると、電気も使えるし、水も出るようになっていたので、すくうれしかったです。

日々の生活のなかで、電気と水がないと何もできないということを改めて学びました。震災により、僕のひいおばあちゃんといいおじいさんが亡くなりました。とても悲しすぎて涙も出ず、何も言葉が出ませんでした。

この震災を受けて、僕はとても悲しい思いをしました。だから次の時代の人達にこういう思いをさせないよう、地震が来たらすぐに高台へ逃げるなどを、伝えていくことが大切だと思います。

## 元気な町田老

福島 祐也

僕は震災前の田老と海が好きで、毎日友達と泳いだりしていました。

三月十一日の大震災が来なかつたら、僕のおばちゃんと、高校生の優しいとこが亡くならなかつたのと思うとすごく悔しいです。おじいちゃんは、船を流されて、しばらく海に行けませんでした。僕は、おじいちゃんの後を継ぎ

たいと思っていました。しかし、僕は助けに来てくれた自衛隊員と警察官に憧れました。

震災直後は、高い山にあるおじいちゃんの家に行きました。おじいちゃんの家では、ご飯とみそ汁を食べたけど、いつもは普通に食べる物が、凄くおいしく感じました。

次の日からはがれきの中をいごと、おばあちゃんを探したけど、見つかりませんでした。その十七日後の三月二十八日に、自衛隊員さんのおかげで、二人は無事に見つかりました。僕の家族や親戚などを、見つけてくれた自衛隊員さんの一人一人に、すごく感謝しています。

そしてあつという間に一年が経ち短いと感じました。僕にとって三月十一日は、とても嫌な日、嫌な思い出になりました。

これからは、僕自身もいろいろな事を教えてもらって災害から自分の身体を守って行きたいと思えました。

それと、募金してくれた人達に感謝しないといけないと思いました。優しい日本人の所に生まれてすごく良かったなと思っただけど、がれきを受け入れてくれないと、復興できないから早くがれきを受け入れてもらい、すべての場所が元通りになればいいなと思いました。

田老は何もないけど、前と変わらず僕は、今の田老が大好きです。

## 震災から今日まで

水沼 毅己

震災からもう一年が経とうとしています。町にあった家のほとんどが流されて、町はずいぶんと殺風景になりました。町のがれきは、片付けられました。

震災があつた日、僕は小学校の音楽室にいました。大きな地震があつて、みんなで校庭に行きました。小学校は避難所になっていたので地域の人が避難してきました。家の人が迎えに来た人は違う避難所に行き、家が残つた人は自分の家に帰りました。電気は点かず、水も出ませんでした。朝起きたら裏山が、火事になっていて、僕は避難所にいきました。三日間避難所において、裏山の火事が消えたので家に帰りました。自分の家の二階は、物が落ちて散らばっていました。家族で片付けて、山に水をくみに行つたりしました。町ではがれきの撤去が始まり、最初に国道のがれきが片付けられ、僕の家に通じる道路も通れるようになりました。町のがれきも片付けられていく中、外国人の支援団体が支援物資を届けに来てくれました。僕の地域は電気の復旧が遅く、小学校の卒業式の日に電気がつきました。余震は多く、不安もまだありました。そして、何日か後にまた大きな地震

があつて停電になりました。そのあとは電気も点いて、水も出るようになり、余震も少なくなりがれきも少なくなりました。今は、街灯のない町にボランティアでライトを付けています。いくつかお店もできてきました。夏には、プールに行つたりして遊びました。でも、町で家が残つた人は少なく仮設に住んでいる人がたくさんいます。

道路が通れるようになったり、がれきが片付いて電気が点いて水も出たり、全部自衛隊や工事の人や支援をしてくれた人のおかげです。その人たちに感謝して、普段の生活を送つていきたいです。

## 災害に強い田老にしたい

山本 龍雅

僕たちは、小学六年生の卒業式練習中の六時間目に東日本大震災に襲われました。その時は、二日前も津波注意報が出て、何も起きなかつたので安心していましたが、外に出ると大津波警報だったので二日前とは違う状況だということに分かりました。その数分後にまた大きな揺れが来て、その後、ドンツという大きな音がしました。その数分後、街にあつたたくさんさんの家や、

砂埃みたいなものが上に舞い上がるのが見ええました。その後、小学校の裏の山に避難しました。山の中は、何も起こっていないように静かでした。しばらくすると、自衛隊らしきヘリなどが行つたり来たりしました。小学校へ戻ると、母や父が迎えに来て、線路を通つて帰る人もいました。

僕は、一日小学校に泊まりました。夜は、紅白の布や教室のカーテン、ステージの暗幕などを何枚も重ねて何重にもして寝ました。でも、そんなにゆつたりとは眠れませんでした。眠れたのは、二、三十分ぐらいだったと思います。あとは起きたり、階段に座つたりしていました。そして、夜中に夜ご飯としておにぎりが届きました。半分にするということだったので、腹も減つてないので、朝に食べることにしました。そんなことをしている間に朝になって、日が出てきました。夜残しておいたおにぎりの半分を食べました。その後、寝ていたものを片付けて、教室のものを外に運んでいる間に、姉と父が迎えに来ていました。外に出て、町を見ると家は崩れ、がれきが重なり合い、町を走っている車も歩いている人もなにもかも全て昔の田老とはほど遠く、夢をみているかのように思えてきました。田老をもつと災害に強い町にしたいと思います。なぜかという、もう何も無い姿に

される田老を見たくないし、何も悪いことをしていない人、誰にでも親切に優しく接していた人が亡くなっていく姿、昨日までいた人が、今日から、行方不明などということになるのは、もう嫌だからです。

### 今、感じること

吉水 祐太

僕は、震災から一年半以上経って感じる事が二つある。

一つ目は、地域の強さだ。震災直後、どこにも笑顔はなかった。しかし今は、いたるところに笑顔がある。これは地域の人が震災を受け止め、復興へと歩みだしている証拠だと思う。震災前はあまり付き合っていない色々な人とも話をした。そして、優しく接してくれた。僕はうれしかった。そして、この人は、「気持ち強い人だ。」と僕は感じた。このような時、僕は、地域の強さを感じた。

二つ目は、復興のイメージがわいてきたことだ。一年前に比べ、がれきは片付き、国道も補装され、街灯もついた。でも、道具だけがそろって、元通りになっただけでは、僕は復興したとはいえないと思う。被災した人全員が笑顔にな

り、感謝をしてからが復興だと思う。復興が早くなるのが遅くなるのが、それは、地域の人の気持ち次第だと思う。昨年と比べ、ボランティア活動は多くなったような気がする。でもぼくはできる限り参加している。それは、笑顔などを見ると、嬉しくなるからだ。「ありがとう」という言葉は、自分の心を温めてくれる言葉である。すべての人の心が温まり、笑顔であふれる日が来た時に僕ははじめて復興したと言おうと思う。

僕は将来、医師か、教師としてこの地に戻ってきたい。人を導き、生きる希望を与えられる人になって戻ってきたい。だから僕は、これからを大切に生きる。この地が希望であふれる日が来ることを願って……。

### 復興

和井田 溪

三月十八日が当時の小学校の卒業式の予定日でした。三月の初めの頃から、小学六年生の卒業式の練習が始まっていました。僕にとっては、卒業式と誕生日が重なって大イベントになるはずでした。でもその時は刻一刻とせまって来ました。二時四十六分に音楽室で六年生は大きな

揺れに遭いました。その時間に六年生はもう少して来るはずだった卒業式の練習をしていました。二、三人はすぐにピアノの下に駆け込みました。僕もその一人でした。ピアノの下から周りにはよく見えなかったと思います。見えるとしても、見る余裕はなかったと思います。一緒にいた友達と一緒に、ずっと話していましたその中で、ヤバイという言葉をよく使ったと思います。そしてその八日前に避難訓練があり、避難している最中、やはり皆は動揺が隠せず、うるさい人もいました。そんな時に担任の先生が、「静かにしろ、何のための避難訓練だったんだ。」

と大声で言ったのを覚えています。みんな冷静さを失いかけていた時にあんな事が言えるのは、皆より少しは冷静だった事が分かりました。そして、校庭の真ん中に生徒が集まって来ました。すると、近くに住んでいる人達が避難してきました。何人かの生徒は親が迎えにきて帰っていききました。そして四、五回余震があつて体育館の窓ガラスが揺れるのを皆、立ったり、座ったりして見ていました。待機の仕方に違いがあつても多分皆の心境は同じ恐怖だったと思います。そして校長先生の

「津波だー逃げるー。」  
という声で、一斉にみんな近くの山に逃げま



した。そして帰ってきて、一夜を過ごしました。

そして、一夜を過ごして家の迎えが来て家へ帰りました。帰ってからは、ラジオの放送で、津波の恐ろしい被害を聞いていました。そして、停電が回復してテレビをつけることやはり、「東日本大震災」と名付けられた大地震のニュースばかりやっていました。そして今も、ほとんどが「東日本大震災」の事ばかりです。でも最近のニュースは絶望ではなくて、希望を感じさせるニュースがほとんどです。

震災から一年経った今も、津波、地震の爪痕は大きく残っています。でも今は、復興に大きく近付いたと思います。

## 東日本大震災を通して

加藤穂乃佳

二〇一一年三月十一日、私は東日本大震災によって、被災しました。

その頃私は小学六年生で、同級生や先生方と一週間後に控えていた卒業式の練習をしていました。合唱をしていて、歌の二番にはいった直後に、大きな揺れが私たちを襲いました。あまりにも大きく、突然すぎて、私はとっさにしゃがみました。その時のことは、怖かったという

ことしか頭にありません。

先生の指示でみんなが校庭へ出ました。外へ出た後も大きめの地震が続き、私は不安と恐怖で胸が締め付けられるようでした。

周りがざわざわしてきて、立ち上がる人もいました。そのとき誰かの

「逃げろー！」

という大きな声で、座っていた人も、立っていた人も、その場にいた人が一斉に裏山の方へ走り出しました。必死に走っても思うように足が上がりず、悔しくて、自分の足の遅さに、苛立ちました。知っている人たちがどんどん離れていって、もうダメなのかと泣きそうになっていたときに、近くにいた友達が私に手を差し出してくれました。悔しくて泣きそうだったのが、嬉しくて泣きそうになりました。私はその友達と手を繋いで一緒に山の奥へ逃げました。

逃げてきてからしばらくして、学校へ戻ることになり、途中までしか整備されていない道を下りました。来るときは必死で分かりませんでした。結構長い距離を逃げてきたのだと歩いていて思いました。

学校へ戻ってくると、校庭には避難してきた人たちの車がたくさん停まっています。先生に体育館へ入るよう言われ、私は体育館の中へ入りました。そこは、行事の時以上の人で埋め

尽くされていました。私たち生徒が集まっていたところからは窓が遠く、外の様子が見えなかったのも不安でした。でも、みんなが集まって暖をとって、話をしていたら安心してきました。そのうちお腹が空いてきて、その日の給食をもう少し食べておけばよかったと後悔しました。この日は、津波の被害が無かったご家庭の方々に作っていたおにぎりを食べました。夜中は寒く、余震が続いてぐっすり眠れませんでした。

次の日の朝、伯母と伯父が学校に迎えに来てくれました。いつもなら三陸鉄道が通っている線路を三人で歩いて、祖母の家に向かいました。歩いている途中、田老の町が見えました。元の町がどんなだったか分からないくらいにぐちゃぐちゃになっていて、言葉が出ませんでした。

祖母の家に着き、私は「生還！」と言いながら玄関の戸を開けました。玄関には何度も見ている靴があり、私はそれが母と姉のものだとすぐにわかりました。廊下をわくわくしながらダッシュして居間に入ると姉が、

「おあー！」

とびつくりしていました。その直後、母に抱き締められました。体が潰れそうなほど強く抱き締められました。母は声を上げて泣いていましたが、私はぐっところらえて涙をとめました。

泣いている姿をあまり見せたくなかったのですが、こんな時にまで意地を張ってどうするのだとも思いました。

その日は祖母の家に泊まりましたが、次の日から避難所になっているグリーンピアという施設へ行きました。今も祖母の家で生活しているので、高い場所に祖母の家があつてよかつたな、と思います。

私の住む地域はほぼ全てのライフラインが復旧して、特に困っていることもありません。今まで支援や応援をしてくださった全国の皆様、本当にありがとうございました。これからは私達が元の町に戻して盛り上げていきます。

私はこの東日本大震災を通して学んだことがあります。それは私の好きな曲の歌詞の中にありました。

絶望とは未来を知る人が陥るもの  
だけど未来なんてだれもわからないもの  
絶望なんてありえない

人間が未来を知らない以上  
希望は常にあるのだから

この歌詞は、私が好きな『GRANDRODEO』さんの「HAPPYLIFE」という曲の中にあります。震災直後は希望が何も無いようであるが、日本だけでなく海外の方々からも応援していただいたことを思い出し、

希望はいつもあるということを学びました。

これは震災があつたからこそ学べたことです。これから何が起るかわかりませんが、その時しか学べないことを見つけて将来に活かしていきたいです。

### 復興へ向かつて

小林 舞

私が、東日本大震災を体験したのは、小学六年生の時でした。三月だったので、卒業式の練習を音楽室でやっていました。そしたら、最初は小さい地震だったので、すぐおさまるかなと思つたら、地面からドドドドッというよつな、怖い揺れでした。私はとっさにピアノの下に隠れました。でもなかなか揺れがおさまらなくてすごく不安になりました。

学校の校庭に避難しました。普段は外にいても感じたのでこの日はすごい地震だなと思つていました。近所の人たちもぞろぞろと避難してきました。ふと、町のほうを見たら、煙でもない、土ほこりのようなものが上がり、また視線を変えたら、津波が跳ね返つたのが見えたので、先生が

「逃げる。」

という前に私は、走って山のほうに向かいま

した。家は学校の裏にあるけれど、大丈夫かなって心配になりました。最初は家族も大丈夫だろうなって思っていたけど、時間が経つにつれて、心配になってきました。でも山についた後に、お母さんが来たので安心しました。

小学校の体育館に戻つたら、ケガをして手当を受けている人もいました。まだ五時にもなっていないのに、もう暗くて、夜だと思つていました。そして、またお母さんが来て、一度家に帰りました。水も電気も止まつていて、大変でした。おばあちゃんとおにぎりを作つたけど、何も食べる気がなくて、食べませんでした。ずっと余震が続いていたので、怖くて少ししか眠れませんでした。次の日、朝起きて、外に出たら、雪が少し積もつていて寒かつたです。高い場所から町を見たら、がれきがすぐそこまであつて、どこにも行けない状態でした。

次の日は火事で大変でした。大津波警報も出されて、山は火事でその時は本当にダメかも思っていました。みんなは、もっと安全な避難場所に行つて、残されてしまいました。もう家も焼けるんじゃないかと思つて、すごく怖かつたです。家に戻つても何もすることが

ありませんでした。その日はずっと家でボーっとしていました。

震災から三日後、お父さんとおじいちゃんが、がんばって宮古に買い物に行きました。午前に行つたのに、帰ってきたのは午後の五時ごろでした。品物も高かったと言っていました。でもアイスが無料で配られたみたいで、アイスをいっぱい持ってきてくれました。でも、電気も止まっているので、冷凍庫もなくて、ほとんど溶けてしまいました。

その次の日は、今度はおじいちゃんとおばあちゃんが宮古に行つて、薪ストーブを買ってきました。木は毎日私たちが、瓦礫の木を拾つてきて、それを切つて燃やしました。洗濯もお母さんと川に行つて洗いました。すごく冷たくて、手が痛かったです。それを水が出るまで繰り返ししました。

震災から十日か二週間後に電気がつきました。水は一か月くらいかかりました。でも水も汚れていたりして、飲めませんでした。食べ物もなくなつてしまいました。震災から何日か後に、米軍が小学校の校庭に降りてきて、いっぱい物資をもつてきてくれたけど、それは全部被災している人にしか配られませんでした。でも一か月後くらいにボランティアの人がいっぱい来て、物資をくれました。その時はすごくうれ

しかったです。その時だけで十分だったのに、いろいろな人たちが何回も来てくれて本当にうれしかったです、助かりました。

中学校の入学式も三週間くらい遅れました。中学校の校舎も一階まで浸水して使えなかったのが九月の中旬頃まで、小学校の三階を貸してもらつて勉強しました。窮屈だったけど、勉強できる場所があるだけ有難いなと思って生活していました。中学校の体育館は掃除して使えるようになってので、部活動は中学校まで歩いてきてやっています。

学校にも服や靴、スポーツ用品なども物資でいただいで使わせてもらっています。遠くから来て、ミニコンサートももらいました。私たちに元気をくれました。

震災から一年がたとうとしている今でも、中学校の一階は工事中であり、まだ使えません。でも、まだ支援してくださる人はいっぱいいます。瓦礫は片付いたけど、町は寂しいです。でもみんな復興へ向かつて進んでいます。ここまて来られたのは日本中、世界中の皆さんが支援、応援してくれたからです。一番うれしかったのは、早稲田大学の人が来て、体育祭を一緒にやってくれたことです。有難うございました。

皆様のおかげです。心から感謝しています。本当に有難うございました。

## 今の心境

小向 郁絵

東日本大震災から、一年半が過ぎました。今でもあのことを思い出すと胸が苦しくなります。震災直後は、何が起きたのか、町がどうなったのかも分かりませんでした。次の日に見た田老の光景を今でも思い出します。田老の町は、ガレキや車、家などであふれ、いつも見ていた田老ではありませんでした。私は、家に帰り、連絡を待っていました。久しぶりに田老に来たのは、三月の後半でした。三月十二日に見た景色とは変わっていました。でも、町は、ガレキや壊れた家などが沢山ありました。自衛隊の方々やお巡りさんたちには、今でも感謝しています。それから学校に着き、卒業式を行い、帰りました。

四月になり、学校が始まって、ガレキは少ししか撤去されませんでした。でも、五月ぐらいになると、一定の場所に決まり、町からガレキが少しずつ移動されて行きました。だんだんガレキが撤去されるのを見て、寂しい気持ちになります。今、思うと、町のガレキが撤去されるにつれ、私たちの思い出の物もあの瞬間で、ガレキになってしまうと思うと悲しくなりました。ガレキを見るたび、震災が起きる前の

田老を思い出します。

月日が経つにつれ、前の田老の姿を忘れていってしまいそうで、寂しいですが、少しずつ前の田老に戻ってきていることに私は、嬉しく思います。前の田老に戻ることは出来ないけれど、今度は新しい田老を創ってあげたいのではないのでしょうか。少しずつでも、明るい田老になっていく事を願っていききたいし、私も積極的にいろいろな事に参加していききたいです。でも、一番に感謝しなくてはいけないことがあります。それは、物資などを支援してくださった方々です。本当に感謝しています。物資を支援してくださった方々に感謝の気持ちを伝えることに頑張っていきたいです。

### 普通に生きている幸せ

佐々木呼子

私はいつも通り、普通に布団から起きて、温かいご飯を食べて、いつもの通学路を友達と何気なく登校し、普通に生活していました。

三月十一日。この日も何気なく普通に登校し、温かい給食を食べ、音楽室にいました。すると、大きな揺れと恐怖に襲われ、外に出ました。

「津波だぁ。逃げるー」

という声で学校の裏に必死で逃げました。校

庭に戻り、町を見ると、二十分くらい前までであったいつもの町。は変わり果てていました……。その夜は体育館で寝ました。この時、今までの「普通の暮らし」はとて「幸せ」なことだったのだと気がきました。お腹が減った。寒い。家族に会いたい。戻りたい。今まで普通だったことが何一つ出来なくて、自分の無力さにいらだつこともありました。

次の日、家族が来ました。再会できた安心とこれからの生活への不安で一杯になりました。私と兄は親戚の家にお世話になりました。しかし、食べ物も少なく、店も開いていない。それでも心の中では生きていてよかった、と思えました。

その後、高台にある家に行きました。ご近所さんから布団や大根、白菜などをもらいました。そのありがたみは、一生忘れません。

あれからもつづく一年が経ちます。町はがれきを回収し、だいが復興しました。家族とも毎日顔を合わせています。布団で寝ています。ご飯をお腹いっぱい食べています。友達と話せています。元気に笑っていられます。これは普通なんかじゃなくて、とてつもない幸せだと感じる事が出来ます。これからは、生きている幸せと、感謝の気持ちを忘れないようにしていきます。

### 波が来た時の私

澤口 倫代

三月十一日。その日、私たちは卒業式の歌の練習を、三階の音楽室でしていました。歌を歌っている時、大きな地震が発生しました。私たちは体験したことのない揺れに驚き、揺れが収まるまでの数分間、しゃがんでじっと耐えていました。揺れが収まるとすぐに私たちは、校庭に避難しました。

外に出たころには、津波注意報だったのがいつの間にか津波警報に変わっていました。注意報と警報の違いが分からずに友達に聞くと、

「注意報だと津波が来る『かも』だけど、警報だと絶対津波が来るんだよ！田老に津波が来るんだよ、今日！」

と、言われました。それを聞いた時、とても不安になりました。ちょっと前まで笑いながら話していたのに……。本当に津波が来るのかなと、とても怖かったです。

早く家に帰りたいなぁと思っていると、ちょうどよく、お母さんが迎えに来てくれました。

「あ、お母さんだ！迎えに来てくれないかと思ってた！」

などと話しながら、近くの公園の前に停めていた車へ向かいました。すると、お母さんがい

きなり悲鳴を上げました。

「あれ見て！」

お母さんの指の先を見ると、黒くて渦を巻いた大きな波が、堤防を乗り越えて家やお店を飲み込んでいました。私はお母さんに手を引かれ、車に乗り込みました。お母さんは、

「落ち着け…落ち着け…」

と、自分に言い聞かせてから、近くのお寺へ向かいました。お寺の入り口の坂を上り、車が進んで、私は（助かったあ…）と安心したのですが、坂が急カーブになっています。左に曲がろうとしても、お母さんは焦っているため、なかなか曲がる事ができませんでした。すぐ後ろまで波やガレキが迫っていて、私は怖くて、怖くてたまらず、

「お母さん急いで！」

と騒ぎました。でも、これではお母さんを焦らせるだけなので、思い直し今度は、

「大丈夫、大丈夫。」

と、何度も言っておち着かせようと頑張りました。お母さんは一度、深呼吸をして、心が落ち着いたのか、すんなり曲がる事ができました。今度こそ本当に安心する事ができ、お寺の本堂の前に車を停めて、車から降りました。

私とお母さんは、お寺から田老の町を見えました。家や車が押し流されているのが見えま

した。さっきまで普通に建っていた家が、今は壊れながら流れているなんて、悪い夢にしか思えませんでした。本当にここはあの平和な田老なのだろうか、とポーツとしたまま立ち尽くしていました。私はお寺へ着くのが数秒遅れていたら、命はなかったと今でも思います。

あのような体験はもう二度とたくありません。でも、もしもまた大きな地震や津波が来た時は、すぐに近くに高台へ避難しようと思っています。でも、小さい子供やお年寄りが困っていたら、助けて一緒に逃げたいと思います。

今では、たくさんの支援物資のおかげで、田老に元気が戻ってきています。いつか、田老が完全に元通りになって、みんなが安心して暮らせる町にしていきたいです。

## 田老の復興への道

清水川未知

あの苦しい出来事を忘れ去る時が来るのでしょうか。ずっと忘れ去れないでしょう。苦しみが生まれた三月十一日の日付を…。

あれからもう一年。あの日は大切なものをたくさん失ってしまいました。普通に過ごしていたあの日。大きな揺れが私たちを襲い、私たち

の知らない大きな津波が私たちの町、田老を襲いました。その次の日、私は残酷なほど悲しすぎる現実を突き付けられました。母は今起こっていることをゆっくり話してくれました。家が流されたこと。父の安否がわからないこと。そして最後に震えた声で、

「じいちゃん、ばあちゃん流されたって…。」

と伝えてくれました。昭和の津波を体験していた祖父母、遊びに行くときよく、その話をしてくれました。祖父母も高いところに逃げたらしい。しかし津波はそこまで来ませんでした。教訓を覚えてくれた二人の想定を超えていました。悔しくて線路の上に立ったまま、静かに涙を流しました。今もまだ見つからず震災から三か月後に死亡届が出されました。

そんな苦しく、悲しい思いをしてから一年。田老の町には仮設の店が点々と建ってきました。でも、私の知っている町にはほど遠いです。今の町は、知っているけど知らない町。漁業の活発だった町はどこに行ったのでしょうか。

私は田老復興の道を支える大勢の中の一人です。海の近くの公園。田老の町を守る日本一の防波堤。田老の人たちの笑顔。ほかにもたくさんあるけれど、絶対に前のように戻ってほしいです。

田老復興への道。苦しいこともあるでしょう。大変なこともあるでしょう。長い月日が必要でしょう。でも必ず朝は来る。田老復興への道は、確かに短くなっています。長くて暗い道でもみんな歩けば小さな光がみえます。その光に入ったとき、私たちはまた、心の底から笑えるでしょう。みんなで今も歩き続ける田老復興への道。あきらめないで歩いて行こう。本当の喜びを感じるための……。

### 震災から経った今

馬場 千尋

東日本大震災から経った今私たちは、中学校生活を楽しく過ごしています。

三月十一日は、卒業式の練習で歌を歌っていたら急に地震がきて、最初は、大丈夫と思った時……大きな地震がきて、すごくビックリしました。そして、みんなで避難をしようとした時、大津波がきて田老を飲み込んでしまい、私はすごく悔しかったです。次の日家に帰るうと思つた時、田老の町を見たら何もなく、ただ雪が降っていただけでした。こんなに悲しい田老の姿を見るのは、初めてでした。

私は今、田老が復興に近づいていると思いま

す。私たちは、支援物資でノートや学校に必要な物をいただきました。他にも、きれいなリンドウもいただきました。私は、そのリンドウを家に持って帰り部屋に飾りました。リンドウをいただいて部屋が前より明るくなり、みんなも明るく元気になりました。支援していただきありがとうございます。

私の夢は、早く前の田老に戻ってほしいことです。がれきは、少しずつ減っています。でも、家を建てるには、まだ時間がかかるので寒さなどに負けないで頑張りたいです。

今まで支援してくださった皆さん本当にありがとうございました。私たちは、支援してくれた皆さんのおかげで今は、前の生活のように過ごしています。他にも、おかしなどいろいろな物をもたらえてうれしかったです。おかしは本当においしかったです。支援していただきありがとうございます。

私は、田老が早く前のような町に戻ってほしいです。元気で輝く田老に戻ることを祈っています。

私たちは、一生津波のことを忘れずに前を向いて、一步一步進んでいきたいと思っています。

### 東日本大震災

平澤 舞

東日本大震災のときは、小学校の音楽室にいました。小学校の卒業式の歌の練習しているときに、地震が来ました。地震が来た時、校庭に逃げました。校庭に、いるときに何回も小さい地震が来ました。そして少し時間が経ってから、津波が来ました。土などが煙になって学校に向かってきました。そして学校の先生が、

「逃げてください。」

と言ったので、学校の裏のほうの山に逃げました。逃げて一時間くらいしてから、小学校の体育館に行きました。その日の夜は小学校の体育館で寝ました

次の日になって母さんと父さんが迎えに来ました。そのあと線路を渡って、車があるところに行きました。私と妹とお父さんは住田のおばあちゃんの家に行きました。津波で学んだことは、津波は何回も繰り返してくることが分かりました。あと、思っていたより早く波が来るのと、家などに波がぶつかる音がすごく強いこと、土の煙もいっぱい来ることが分かりました。復興したなあと思うことは、津波が来てすぐのときは、瓦礫とか壊れてない家があったりしたけど、今は瓦礫とかもなくなつたし、壊れた

家もなくなったから、復興したなあと思いましたが。あと、津波が来る前はお店もいっぱいあったけど、津波が来たあとは、お店も流されてしまっていたけど、今は仮設のお店があつてすこいなあと思えました。

私は引つ越したけども、田老の町がいいなあと思いました。

二月十一日

吉水 愛美

「津波だー。逃げるー。」

という、近所の人の声とともに土煙を上げながら、すごい勢いで津波が押し寄せてきました。

三月十一日、あの日私たちは卒業式の歌の練習をしようとしていたときでした。二時四十分、大きな揺れが私たちを襲いました。揺れがほとんどなくなり、校庭に避難しました。その三十分後、津波は田老を襲いました。私たちは、小学校の裏山へ走って避難しました。何も考えずに、無我夢中で走り続けました。

山へ逃げて、一、二時間ぐらいしてから、近所の消防団の人と線路を歩き、家に帰りました。家に帰る途中、怪我をしている人を何人も見かけました。また、暗い中歩く線路は凄く怖かつ

たです。線路を歩いていると、近くの山で火事が起きていると聞き、どうしていいか分からないくらい不安になりました。消防団の人は、とりあえずいこう。というので、進むことになりました。線路を抜けると広い範囲で火事が起きていました。私たちは、ハンカチで口をおさえながら移動することになりました。少し歩き、坂を登ると津波に襲われた田老がそこにありました。声も出ませんでした。

三月十一日から、一年と七カ月たった今でも防浪堤は壊れたままですが、がれきも町からは少なくなりました。少しずつ復興してきていると思えます。

### 復興への思い

涌田 莉捺

私は、当時小学校の音楽室で卒業式の練習をしていました。その時、小さい揺れが大きな地震へ変わりました。みんな騒ぎ始め、混乱していました。先生の指示で校庭に避難していましたが、海の方からドーンという波しぶきが聞こえ先生の、

「上へ上へ！」

という声とともに一斉に駆け上がりました。

私は、泣いていた友達を励ましながら上へ登りました。しばらく経って、学校の体育館へ戻り、続く余震に脅えながらみんな身を寄せ合っていました。私は、夜にお父さんが迎えに来てくれて、いつもと違う暗くて静かな町を眺めながら線路を歩いて行きました。

家に帰っても電気は点かず暗い家で、何もする気になれませんでした。電気が点くようになってからは、近所のセンターで人を集め、避難所におにぎりを配るうと、私も手伝いに行きました。少しでも誰かの役に立とうと思いましたが。

しばらくは小学校の校舎を借りていましたが、三階だけで中学生全校が生活するのは、不自由でした。中学校に行ける事になったときは、嬉しくてやっと中学生になった気分でした。でも、三階から町を眺めても家はなく、寂しげな田老になっていました。

だからこそ、人が集まり活気のある町にしたいと思いました。そして、その復興のために田老一中が中心になり、町のために出来ることを少しでもしていけたらいいと思います。

今後、また、大津波が来たとしても誰もが逃れられるように、三月十一日に遭った事を心に秘め、暮らしていきたいです。

生徒作文

三学年生徒

(三十九名)



当たり前のこと	赤沼 勁	一年間を振り返って	蓬田 竜星
母の顔	遠藤 京介	三月十一日	内 館 ともえ
忘れられない雪景色	大下 海輝	今、心から思うこと	加藤 まみ
あの日、あの時	加倉 侑輝	震災の辛さを乗り越えて	小池 紗恵
漁師	影田久保 樹	考えることと悩むこと	坂本 桃香
忘れない	加藤 諒太	未来の田老	佐々木 茜峰
夜更かし	川上 諒也	ありがとう、今なら言える	佐々木 あずさ
僕が過ごした一年	木村 優樹	今思うこと、そしてこれからの未来	佐々木 茉凜
じいちゃん	佐々木 俊介	いろんな体験	佐々木 みく
震災が起きて分かったこと	佐々木 翔太郎	あの時心に誓ったこと	佐々木 優衣
震災が起きて分かったこと	佐々木 大	震災を通して	外山 彩香
三月十一日	佐々木 竜	東日本大震災から	畠山 愛美
津波に負けない田老の人々	田川 尚樹	震災を体験して	堀本 果鈴
三月十一日の体験	中島 良	震災	山本 紗瑛
震災経験、あれから・・・	腹子 脩斗	東日本大震災	山本 真華
誰かのために	松本 一真	三月十一日	山本 七海
自分の将来と復興に向けて	松本 雄大	三月十一日	山本 理乃
三月十一日	皆川 拓紀	三月十一日、東日本大震災	畠山 紗莉奈
復興元年	山本 翔太		
つながり	山本 拓実		
二〇一一年三月十一日	吉田 孝浩		

## 当たり前のこと

赤沼 勁

三月十一日、僕たちは体育館で卒業式の練習をしていた時、大きな地震がきて校庭に逃げました。それから数分後に大きな津波が来て、慌てて山の方に向かって夢中で逃げました。母が迎えに来るまで、役場で過ごしました。家が流されたので宮古北高校で、避難所生活をしました。

一か月くらい経ってから僕の家がどこへ流されてしまったのかを見に行きました。海側の道路の上であり、家はそのままの形で移動していました。大丈夫な物もあつたし、つぶされた物もありました。ゲームは使えなくなっていました。特にショックはなかったです。宮古北高校での避難所生活では、パンや靴などの支援物資が届きました。本当にありがたいと思います。

その後、僕は北高校からグリーンピアのアリーナに移転しました。アリーナでの生活は家族五人で、とても窮屈でした。しかし、毎食あたたかい食事がとれること、あたたかく過ごせること、毎日風呂に入れたこと、テレビが見られたこと、友達と遊べたこと、普段当たり前にできていたことが避難所でもできたのは、たく

さんの支援をしてくださった人のおかげだと思いました。その人たちに今も感謝しています。

## 母の顔

遠藤 京介

震災の前日、僕は夜更かしをした。その時のことは、今でも覚えている。いや、忘れる事ができない。なぜなら、次の日になるまでは、いつも通り楽しく暮らしていたからである。

三月十一日、午後一時過ぎ、悪夢は始まった。地震で揺れ始めた頃、僕たちは体育館で、卒業式で歌う歌の練習をしていた。最初は、たいした揺れではないと思つたが、次第に揺れは大きくなり、その揺れは約十分続いた。その揺れは、これまで生きてきた中で一番大きく長かった。とても不安だった。死ぬまでには、津波を体験すると思つていたが、それは大人になってからのことだと思つていた。勝手に思つていただけだが、現実はそのはいかなかった。そして三月十一日、一番恐れていたことが起きた。ドーンという大きな音とともに、大きな黒い壁が中学校に押し寄せて来た。僕はびっくりした。自分の中では、勝手な予想を立てていた。それは、堤防があれば津波は来ないだろうという予想

だ。この予想も、やはり予想でしかなかったのだ。そんな自分の中の予想を打ち砕いた。目の前の現実には、波が止まることなく民家をなぎ倒しながら向かってきた。それに気がついた先生が、

「逃げる。」

と叫んだ。その声でみな一斉に高台へ走り出した。逃げた道は二方向に分かれたが、のちに役場で合流し一夜を過ごした。とてつもなく寒かった。

次の日、みんなの家族が迎えに来た。自分は、家の人が生きているとは、正直思つてもいなかった。だが、母さんが迎えに来た。母さんは嬉しそうにしていた。それを見た自分は、心のどこかの不安が少し晴れたような気がした。

今学校の目の前は、何もありませんが、これから少しずつ復興していけたらいいなあと思います。今後、復興に携わる活動をし、少しでも田老の町が、明るく元気な町になっていけたらいいなあと思います。

## 忘れられない雪景色

大下 海輝

三月十一日金曜日十四時四十六分。その日は三年生の卒業式に歌う合唱の練習をしていた。すると、突然大きな揺れが襲ってきた。最初は体育館の端にみんなで寄っていたが、先生の指示で三十分程度外で待機していた。町の方を見ると土煙が舞っていて、地割れかな?と違っていたら、土煙の中から白いしぶきが出てきて津波だと思いながら走り出した。みんなが逃げに行った体育館裏に行ったが、先生に「こっちは来るな。」と言われ、逆方向の赤沼山へと走った。赤沼山を登りきると、黒い波が町中を埋めていた。それから、数十分待機していたら、体育館裏に逃げに行った人たちと合流し、総合事務所に移動した。

その日は、やけに時間の流れが遅く夜が長く感じ、友達と気晴らしにちよつとした遊びをして時間をつぶした。さすがに飽きてきた頃、炊き出しのおにぎりが届いた。一個のおにぎりを三人で分け合い食べた。ほんのちよつとだったけど、すごくおいしかった。おにぎりを食べたら眠くなってきたので、制服を枕にして一夜を明かした。

次の日の朝は、外で雪が降っていたせいか、やけに寒くて目を覚ました。辺り一面に広がる雪化粧、寒くて当然と言えた。津波が来たあととは思えないほど、その降り積もった雪は美しくかった。

田老観光ホテルに勤めていた母が、津波に遭遇してしまったのではないかとという最悪の事を考えていたせいか、親が迎えに来た時何も感じなかった。家が流されたと聞き、今まで築き上げてきた多くの本の事を考えると、怒りが込み上げてきた。しかし、自然相手ではどうしようもなく、それらの本は諦めた。

今、部屋には六十冊以上の本がある。少しずつ生活が戻りつつある。

## あの日、あの時

加倉 侑輝

卒業式前日、体育館で歌の練習をしていた時、大きな揺れを感じ、揺れている最中に校庭に逃げた。校庭には園児や住民、母が避難してきた。琴畑さんの、

「逃げる。」

と同時に、一斉に山へと向かって走った。途中、技術室の裏に親子がいた。俺は下に降りて

子供を上げて、その次にお母さんを上げた。親子と一緒に山まで上がった。山に行くとき、おばあさんが倒れていた。家の間で危なかった為、おんぶして少し安全なところに運んだ。葉っぱや枝、土がついていた。這ってきたんだと思う。琴畑さんがそこに来て、

「毛布を。」

と言われたので、水に浸かった校舎裏に行っただが、毛布はとれなかった。おばあさんを後から来た琴畑さんの奥さんにお願ひした。それから避難してくる人の誘導、園児、老人をおぶったりした。

数十分それをした。

「おい。」

その声で振り向くと父の姿がいた。

「寺さ行け。」

ただ一言。そう言われ、寺に向かった。そこには、田老一中生全員と家族がいた。寺には、何人いたか分からなかった。何百人もの人がいたと思う。その後田老一中生は、役場の会議室を避難所とした。三人で一個のおにぎり、五人で一枚の毛布、コップ半分のお茶。たったそれだけでも、ありがたく感じた。寒くて長い夜を過ごした。夜が明け、まわりは雪が降っていた。あの日の時みたいに……。時間が経つにつれ、少なくなっていく。結局最後に残ったのは、

## 漁 師

影田久保樹

自分も含め十人ほど。それからは常に緊張の糸が張りつめた状態が続いた。収まらない余震、解除されない警報。大きな揺れがある度に、役場から裏山に逃げた。

そんな日常が続く中、俺たちのボランティアが始まった。大人は復旧作業が搜索、消火などにあたっていて人が少なかつた。そこで中学生は、自分たちのできる最大限のことをした。

毛布や水、食料などを運び、役場に集めそこから背負いかごに入れて、小学校や北高などの各避難所に届けた。

そんな生活を送っている中、やっと家に帰ることができた。水は出ず、電気もなく、いつなくなるかわからないガスと食料で過ごした。まさに太陽とともに生きる生活だったと思う。

太陽があがると同時に起きて、田ノ沢の川までその日の分の水を汲みに行き、八時になったら役場に行き名簿にサインをして、水汲みや荷物運びや掃除などをした。十八時には家に帰り、二十時にはふとんに入って眠った。

その日を生きる事に一生懸命だった。たくさんの事を経験した。嬉しい事だつてあつた。けど悲しい事もあつた。遺体を見たり、遺体安置所も作ったりした。自分を一回り大きく変えたのかも知れない。

やがて避難者をグリーンピアへとまとめ、そ

こでのボランティアが始まった。津波を受けてない分、このような事で力になろうとした。大君と一緒にいつも四十分程かけて自転車で行った。掃除や配膳などをした。お風呂も頂けた。そこで仕事をしている中でたくさん支援をお願いした。山本市長さんには、野球部が使っているユニフォームや帽子、岩手県野球協会には野球道具を支援して頂いた。たった一言の呼びかけで、たくさんの方がつながってくれた。ありがたかつた。

ボランティアは震災から春休みが終わるまで活動した。約二か月間、少しは田老の力になれただろうか。少しは誰かの為になつただろうか。

震災からは一年と半年が経ち、あの日のようなガレキはなくなり、町にも少しずつ店が建ち、道路には街灯が並べられ、一歩ずつ元に戻ろうとしている。

今はグリーンピア中心の生活が進んでいる。いつまでも被災したからと言って、甘えているのもどうかと思う。俺が被災したわけではないが、被災しないほうが被災者だと思ふときもある。

「宮古市は必ずや復興いたします。」市長の声が胸に響く。

俺の家は、漁業をしていた。三月十一日、あの震災が起きた。俺の家では、次の日から、わかめをとるといふときだった。あの日とつぜん、大きな地震が俺たちをおそつた。そして二十五分くらい校庭にいた。そして二十五分すぎたとき、バリバリという音がして、津波だとわかつた。俺たちは逃げた。みんなが逃げる中、俺は人を上に上げてから、一目散に下におりた。そして、保育所の子供を上に乗せた後、また下におりた。そしておはあちゃんをひっぱつた。

漁業にも被害が出た。でも、俺は、漁師をやりたいと思つた。どうしようと思つた。海の仕事をしたかつた。漁師をやると決めた。漁師は負けない。ただ、船もなにもかも流された。

俺は、シヨックを隠しきれなかつた。でも俺は、海の男として働きたかつた。ただただ思ふことがあつた。これからも苦勞をかけることになると思つた。俺は、定置網漁船、赤島丸に乗ることにした。大人の中に混じつて働くことになる。俺は一人前になりたいと考えている。その中で、赤島丸のかじ取りをしている人は、俺のおじちゃんだ。その姿を見て、定置網に乗りたいたいと思ふようになった。定置網のみなさん

は、とてもやさしくて、心が広い人ばかりだ。海では、危険なこともある。船の上で、ロープが顔に飛んできたり、船のスクリューにまかれたりする。危険なこともあるが、楽しいこともある。それは養殖をしたり、アワビやウニをとったりすることだ。口開けには、一人で出ているが、初めて口開けに出たのは、小学二年生の時だった。俺は、小学三年生で一人で始め、はじめのころは、全然とれなかった。でも、小学五年生になると、たくさんとれるようになった。小学六年生でやっと大量にとれるようになった。そして俺は、田老の町で漁師として働くという気持ちも強くなった。たくましく田老の男、そして海の男になりたいと思う。

### 忘れない

加藤 諒太

誰もが、あんな恐ろしい日々がこれから始まるとは、誰も予想していなかっただろう。

あの日は、曇っていた。卒業式にむけて、最後のリハーサルをしていた二時四十六分。床から、何かがつきぬけてきそうなほどの、大きな揺れが、僕たちをおそった。何もすることができないくらいの揺れで、壁によるしかなかった。

揺れが小さくなり、先生の声で校庭に避難した。そこから僕たちの避難生活が始まった。教室一つ分あるかないかの広さに約百三十人の生徒が集まった。夜になると町はくらやみにつつまれていた。避難場所は、蓄電施設があり、電気はついていた。十一時頃炊き出しのおにぎりが三人で一つという状況で炊き出しを食べていた。今かんがえれば、最高のものだった。夜が明け、外を見ると、雪が積もっていた。自衛隊や色々な支援隊が田老に救援に来ていた。ものすごい数の人々が世界中から声をくれていた。僕は今回の震災から色々なことを学んだ。僕が一番感動したことは、世界の中の小さな国が困っていると、世界中のどこの国も心配してくれている。一人が困っているとみんなが心配してくれているってこういうことなんだと思った。震災は僕たちの周りのたくさんの方を取っていったが、逆にたくさんの方を学ばせてくれたと思う。

### 夜更かし

川上 諒也

震災を受けた日の前夜、僕は夜更かしをした。その夜の事は今でも覚えている。いや、忘れられないのかもしれない。

その日もいつも通りの朝だった。まだ寒い通学路、卒業模様の体育館、生徒の合唱中だった。十四時四十六分、僕らを大地震が襲った。校庭に避難した僕たちは、津波がくるなんて思ってもみなかった。突然の出来事だった。大きな衝撃音、舞い上がる砂埃、

「逃げる。」

の一言。

どうやって山を登ったか覚えていない。分かるのは、生きている事、津波がきた事、町が消えた事。

中学生は先生方を含め、全員助かった。山に逃げた人と、寺に逃げた人がいたようだ。今は墓で、もとの町を眺めている。田老は夜を迎えようとしていた。

僕らは、一時避難場所の総合事務所に來ていた。一つの部屋に全校生徒が集まっていた。遅い夕食は、一つのおにぎりを三人で分けて食べた。水分はお茶を少量だけだった。寝る時は一つの毛布を四、五人で使って寝た。家のベッド

では味わえない固い感触だった。余震は大きく、寝ていても起きてしまう。安全のため、電気もつけている。僕は制服を顔にかけ、眠りについた。

朝になった。肌寒さを感じて、外を見てみると雪が積もっていた。避難できず、野宿していたら凍死していたらろう。新雪の上を迷彩服の人が歩いていく。あれは、僕の家の近くだ。自分の家は：見当たらなかった。やっと悟った。昨日までの普通の生活に戻れない事を。今までと同じ生活が出来ない事を。思い出せる中で最後の日の夜、僕は夜更かしをした。

## 僕が過ごした一年

木村 優樹

東北が悲しみに包まれてから、もう一年が経ってしまった。今思うと、みんなが生きる事に必死だったと思う。そんな中、田老一中生はボランティア活動などを頑張った。その活動は世界中に届けられ、改めて日本人のよさ、田老の子どものよさが伝わったと思う。僕は、あの日から全てがどうでもよくなってしまう。幸い家族は無事だったが、家を流され、まともな生活が困難になっていくという現実が

ら、目を背けたいという気持ちがあったのかも。しれない。僕はあの日からなにに対しても興味を持ってなくなり、ただ楽しければいいと思っていた。そうして2か月遅れで学校が始まった。みんな元気そうだったのが一番うれしかった。一時期田老を離れ、母さんの実家近くの学校に転校するかという話があったが、結局行かないことになった。

学校生活は、田老第一小学校の三階を使って授業をしていた。自由とはいえないが、学校に行けるだけでもありがたかった。ただ毎日毎日が楽しかったが、家に帰ると何もすることがなく、つまらなかった。そして、夏休みも終わり、僕たちは中学校に戻った。先輩たちはこの夏休み、学校見学に行き、どの高校に行くか見えてきたらしい。そこで、やっと先輩たちは受験生で、来年自分もあなるのだと実感した。これがきっかけでどんな高校があるのか調べてみた。調べるほどおもしろく、高校での文化祭や体育祭は中学校より迫力があり、見ていて楽しかった。自分も早く高校生になりたいと初めて思った。前にも思った事はあるが、こつも心から思った事はなかった。しかし当たり前事なのだが、高校に入るには入試というものがある。それに合格しなければ入れない。そこで、僕は今まで本気で勉強したことがなかったので、本

気でやってみようかと思った。その日から僕は生まれ変わった気がした。

勉強をやり始めてから半月、ある高校を見つけた。それは愛知県にある高校だった。もともと都会に憧れていた自分は、すぐにこの高校に行きたいと思った。いや、行ってやると誓った。この日からますます勉強に力が入り、テストではいい点数が取れるようになり、自己最高点を出せた。合格が難しいと言われる県外への受験しかし、入れないという要素はどこにもないのだ。そう思い、日々努力を惜しまなかった。学年でもテストで一位を取るようになり、みんなによくすごいと言われるが、これはやろうと思えばできること、ただやらないだけである。僕自身たしかに努力はしているが、勝てない相手はいる。姉である。僕が一位を取っても、姉の点数にはかなわない。これだけはどうにもならなかった。しかし、いずれ勝つてやるという思いで頑張っている。最後に、今僕は、僕自身の一年からみんなに努力というのは、すばらしく美しく、楽しく、人を成長させるものだと思いたい。

## じいちゃん

佐々木俊介

僕のじいちゃんは漁師でした。口開けの時は一人で海に行つて、大量のうにやあわびなどを捕つてきていました。たまに僕を連れて行つて、うにやあわびを捕るところを見せてくれました。じいちゃんが僕を海に連れて行つてくれて、僕はじいちゃんと一緒に海に出るようになりました。

中学生になってからは、うに・あわび・たこなどの口開けに一緒に行くことになりました。最初の頃は、眠いし寒いし、どつちかという口開けの日に船に乗るのは嫌でした。そして、いざ船に乗ると船酔いはするし、最悪の気分でした。家に帰つて少し寝てから学校に行くのですが、なんだかふらふらで大変でした。それでも、口開けになると父さんは僕を連れて行きたいらしく、父さんの船と一緒に乗せられました。父さんもうにやあわびをもちろん捕りますが、じいちゃんにはかないません。そして、僕が思うには、水めがねをのぞき、長い長い竹を器用に操つて、うにやあわびを捕る姿は、断然父さんよりじいちゃんのほうがかっこいいと思います。本当にじいちゃんがかっこいいのです。かっこいいじいちゃんは、山や畑でもやっ

ぱりかっこよかったです。それはいろいろなことを知っているからです。山菜の名前やそれらがどこに生えているのかなど、僕が知らないことを身近で教えてくれました。じいちゃんが作った畑のブルーベリーはとってもおいしかったです。

そんなじいちゃんが僕たち兄弟に言っていたことは、

「おまえらの仕事は勉強だ。」

です。まだ僕たちが青森に住んでいた頃から、夏・冬の休みに帰省するとよく言われた言葉です。今、僕はじいちゃんの言葉のようにできていない気がします。

僕のかっこいいじいちゃんは三月十一日の東日本大震災の大津波で亡くなりました。今もまだおじいちゃんは行方不明です。だけど、きつと見つかると思は信じて、毎日笑顔で暮らしたいと思います。

## 震災が起きて分かったこと

佐々木翔太郎

東日本大震災でたくさんの方が亡くなり、また思い出などを奪つてしまうような、大変な出来事でした。逃げる時には山を登つて、生徒の半数ぐらいが避難していきました。みんなが山に登るのに高いはしこを上がったたり、待ちきれない人たちは、道のない林を登つたりしました。山頂に着いた時にはびっくりしました。目覚ましのような大きな音のサイレンと津波が町を飲み込むのが目に入りました。すごく衝撃的でした。津波は知っているし、シミュレーションとか映像では見たことがあったけど、口が開いてしまつような瞬間でした。もう一つの衝撃は、津波の二次災害です。一度にたくさんの方が起きました。火事やその火事の灰が降つてくる事などとてもつらかったです。逃げ終わった後は、三陸鉄道のトンネルを通して総合事務所に行ったのですが、トンネルはとも大変でした。ところどころに穴があったり、線路があったり、なにより真っ暗で何も見えないのが大変でした。

総合事務所でみんなに会えたうれしさとは反対に、お墓からよく見える海と町が、海によってすべて埋もれていました。

総合事務所では、田老一中の生徒の安否を確認するために、親の方が絶え間なくやってきました。自分の親はまだかと考えていました。もしかしたら死んでいるのではないかと考えましたが、無事に迎えに来てくれました。

家に帰ってからは、カロリーメイトを食べたり、見たこともないような缶詰を食べたりしました。今振り返ると、あのころの支援がとてもうれしかったですし、あのころどうだったかを鮮明に覚えているので、自分の子どもや色々な人に教えていきたいです。

### 震災が起きて分かったこと

佐々木 大

三月十一日は多くの生命、思い出、家族、友達、財産を奪いました。大きく深い爪痕を残しました。しかし、震災が起こって、大事なことや、大切なことが見つかったと思います。

私が見つけた大事なことと大切なことを二つ見つけました。

一つ目は、命の大切さです。

津波が押し寄せて来た時は、「死ぬかもしれない。」と、心のどこかで思っていました。ですが、今はこうやって生きています。死んだら

何もかも終わりです。これからは、命あるものはすべて尊いものだと思つて過ごしたいと思えます。

二つ目は、夢や目標を見つucker事です。生きていて夢や目標がなかったら、なんのために生きているのか分からなくなつてしまふ、と感じたからです。私はせめて親孝行だけはしたいです。ちいさい事でもいいから、もっともつと見つけたいと思います。

最後に、私はこの学年のみんなと一緒にの一年は、最後の最後まで怒られていたけど、充実していました。本当にありがとうございました。

三月十一日

佐々木 竜

三月十一日、僕は少しだけ熱を出して、学校を休んでいました。ゲームをしていた時に、大地震が来ました。停電してテレビが消えて、情報を得る手段がありませんでした。大津波警報の放送が流れたけど、家が高いところにあるし、防浪堤もあるから避難しなくていいかと思つて家にいました。何十分経つた頃、お父さんが、

「町がねーぞ。」

と言つてきました。本当に来たのかとびつくりして、どのくらい大ききだろつと思ひ、山に登つて町を見てみました。これからどうなる中から出ている状態でした。これからどうなるんだろつと思ひました。その後、津波が来たところまで見に行つてみました。ガレキばかりで水は全然見えませんでした。僕の家は無事だったけど、電気がなく、寒くて大変でした。そして何日かして、へりが物資を運んできてほつとしました。家を流されたおばさんが、僕の家に住むことになりました。親戚も家族も無事で良かったです。もうあんな体験はしたくありません。この事を活かして、大きな地震が来たら避難したいと思ひます。

### 津波に負けない田老の人々

田川 尚樹

まだその時は、田老第三中学校が田老第一中学校と統合する前でした。

三中の最後が近かつたので、その日は掃除をしていました。先生が、

「なんでジャンプしているの。」  
と僕に言つてきました。最初は、そのくらい



小さな震動でした。それが急に大きな揺れに変わって、ホールの電気が天井にぶつかりそうになっていました。

図書室の本は落ちてきたり、長時計はころびそうになったり、今まで感じたことのない揺れでした。

僕たちは揺れがおさまると、すぐ外へ出て小生と同じ所に集まっている間にも、何回も揺れていました。先生たちは避難についての話をいろいろとされていて、僕は何を言っているんだろう、今までの練習はなんだったんだ、今逃げなくていつ逃げるんだよ、と思いながら判断を待っていました。

摂待のお墓に避難すると決まり、みんな走りで行きました。お墓に避難すると、何人かともう集まっていました。何分後か、海の方に土煙が上がっていました。大きな波が家の何軒分なんだろうか、巻き込んで迫ってきました。今までの優しい海ではありませんでした。でも僕は、その波を見て怖いと思いませんでした。この海に勝たなければならぬ、という気持ちでなぜか心に響きました。

僕は、海が大好きで小さい時から海に行っていました。だから、津波は来たけれども海が怖い、とは全く思いませんでした。必ず海は、もともどどってくれると思っていました。震災後

一年くらい経ってから、海に出る事ができました。震災前と変わらない海がそこにあって、とてもうれしかったです。

僕は、将来漁師になりたいと思っています。この田老の海を復活、復興するように今から少しずつ、何か出来る事があればやっていきたいと思えます。この田老には海がなければダメだから、この宝の海をずっとずっと守り続けたいし、次の人たちにもちゃんと伝えたいです。

海の仕事を誰もやらぬかもしれないけれど、僕はたとえ一人でも、この海で養殖をしたり、魚をとったり、みんなのために働きたいと思えます。

これからも津波が来ないとは言えないので、常に津波の事を忘れず、地震が来たら人は高台へ、船は沖へ行つて、なるべく亡くなる人を少なくしてほしいです。

この田老を、必ずもとの町、みんなが笑顔で毎日を過ごしていけるような楽しい町にしていきたいと思えます。

## 三月十一日の体験

中島 良

あの日は終業式が終わり、次の日の卒業式の練習をやっていました。最初の地震の時は最近多いなあ〜というくらいにしかかえていませんでした。でも、いつまで経っても地震はおさまらず、泣き出す生徒さえ、出てきました。そして津波が来ました。多くの生徒は体育館の裏から山を登り、線路まで行きました。でも一部の生徒は墓の方に逃げました。山へははしごを使って登りました。しばらく山の上で様子を見ていると爆発音がしました。そして、その爆発で近くの山に火がついてしまい、その山から下りることになりました。

線路まで下り、田老第一小学校の方は津波が来ていないからそっちに行こうということになり、線路を歩きました。途中のトンネルは真っ暗で、ほとんど何も見えませんでした。途中の墓で、いなくなった生徒も見つけて、とりあえず全員無事な事がわかりました。そこで先生たちが話し合つて、その日は総合事務所で寝る事になりました。五人に一枚ずつ毛布が配られ、飲み物は自販機を壊してお茶を飲みました。そして、午後十一時ごろにおにぎりが届き、一つのおにぎりを三人で分けて食べました。その夜は

雪が降り、寒い中眠りました。

次の日目が覚めると、みんなのほとんどが起きていました。とりあえず近くで寝ている勤君を起こし、話をしたりしました。その日は震災から一夜明けて、いろいろな人の親が迎えに来ていました。そして僕にも迎えが来ました。大平までは線路を歩き、そこからは消防車に乗って帰りました。帰る途中に町を見たけど、ガレキだらけでした。家に着くと、ガスも水も使えました。電気もその日の夜につくようになりました。

僕は田老がちゃんと復興できるか心配になりました。でも、ちゃんと進んでいるみたいなので安心しました。

## 震災経験、あれから・・・

腹子 脩斗

時間が経つのも早いもので、あれから一年以上が過ぎた。いろいろなことがあったが、疲れたり我慢しなければいけないことがたくさんあった。不便だし、ちょっとしたことでもイライラしたりする日が続いたが、どうにか乗り越えた気がする。

大好きな部活動も十分できない。時間も、や

れる場所もない。そんな状況の中、僕たちにとって大切な試合がやってきた。本来の力を出し切れず、惜しくも負けてしまった。僕も足を引っぱった場面があり、悔しさを感じた。ごめんね。

ある日、震災の特別番組を見ていた時、ふと思いついた。田老の動画を作ろう。そして出来たのが「消えた田老」田老の被災前と被災後の画像を使ったスライドショー形式の動画である。この動画をアップロードすると、ある人たちと出会った。その人たちは、個人でお金を集めて被災地に支援したり、実際に被災地に来たりしている人だった。出会ってからたくさん支援や人とのつながりが増えた。夏には一緒に田老でイベントをした。田老夢灯籠コンサートである。僕以外にも田老一中から何人かがボランティアとして参加してくれた。そこでもたくさんの人たちと出会った。多くの人たちと出会えたおかげで、いろいろなことに関わり、たくさんの人と出会い、普通に生活していたら学べなかったことも学べた。

被災当時から今まで、ずっと思い続けている事が一つある。それは、いい経験だと思つこと。別れがあるから出会いがあり、失うものがあるて得られるものがある。少しでも良いほうに捉えれば、未来はきつと変わると思う。

## 誰かのために

松本 一真

三月十一日十四時四十六分。その日はちょうど修了式で、明日の卒業式の合唱練習をしていた。初めて感じる揺れに驚きながらも、津波など来るはずがないと思いつながら校庭に避難した。津波警報が放送される中、寒い校庭ですつと待っていた。その時、

「逃げる。」

の声が聞こえた。何が起こったのか分からぬまま、急いで裏の山まで走った。気付いた時には田老はもう前の田老ではなくなっていた。その日の夜は心配でいっぱいだった。今思い出すだけでドキドキしてくる。二十三時に三人で一つのおにぎりを食べ、五人で一枚の毛布をかぶって寝た。次の日は、みんな自分の家や親戚の家に帰っていった。数日経って避難所でのボランティア活動を始めた。ボランティア活動の主な仕事は、道路が通っていない間支援物資を運ぶことだった。一日に何十キロも運んだ時もあった。でも、つらい気持ちよりも楽しい気持ちのほうが多かった。たぶん人の役に立つことが嬉しかったのだと思う。日が経って、避難所が何か所にまとまった時、朝昼晩のご飯を全て自衛隊の人が作ってくれていた。自分には何か

出来ることはないかと考えたけれど、なにもできない自分が悔しかった。今、自分には具体的な夢はないけれど、将来自衛隊の人たちみたい  
に人の役に立てる仕事に就きたいと思った。

### 自分の将来と復興に向けて

松本 雄大

自分の将来について、思うことが二つあります。  
まず一つ目は、二十歳になるまでの約六年間

についてです。  
二十歳になるまでにやる事は、中学生や高校生として出来ることを何でも積極的に言うこと  
です。おそらく、復興に向けてやっていること  
の中に、ボランティア活動などがあると思  
います。その時は、自ら進んで「ボラン  
ティア魂」をもち、積極的に活動に参加して  
いきたいと思います。今回の震災で、ボ  
ランティア活動を何回かやらせてもらっ  
ているので、自分ができる限界までや  
りたいと思います。

二つ目にやりたい事は、自分が成人を  
迎えて大人の仲間入りをした時に、どう  
すれば復興の手助けになるかを考える  
事です。

そして、自分の力がどこまで通じる  
かを試し

てみたいです。その力で一つひとつの  
復興をサポートしていく事が自分の目  
標です。まだ将来の仕事についてはど  
んな仕事をするか、できるかが分か  
らないのですが、仕事を決めたら、そ  
の仕事の中で復興をどうサポートで  
きるのかを考えながらやっていき  
たいです。

次に田老の復興に向けて考えまし  
た。できる事は少ないと思いますが、  
僕自身の中では二つやりたい事があ  
ります。

まず一つ目は、すぐスケールは大  
きいですが、昭和八年の津波の時に  
村長だった関口村長さんが、住民  
と行ったように防浪堤の強化をし  
て、再度作りたいたいです。何年か  
かってもいいので、皆で協力して頑  
張って作り上げたいです。

二つ目は、他の被災地に行き、他  
の被災者の方と交流をすることです。  
そして、被災当日の事やその後の  
一年後、二年後などの話を聞いて  
旅をしたいです。そこで知った情  
報も田老の復興に役立てていき  
たいと思います。

三月十一日

皆川 拓紀

あの日僕たちは、体育館で卒業式  
の歌の練習をしていた。その時、  
僕たちの未来が変わってしまった。

すごく大きい地震が僕たちを襲  
った。急いでみんな外に出た。地  
震がずっと続いていた。怖くて泣  
いている生徒がいた。そして大津  
波警報も発令していた。

何分か経ちいきなり、  
「逃げる。」

という先生の声が聞こえた。僕  
は海の方を見た。その時僕は、す  
ごい光景を目にした。防浪堤を越  
えて黒い波が押し寄せてきたのだ。  
慌てて僕は、山の方へ逃げた。

山を登り、町を見た。町を見て  
僕は驚いてしまった。家が津波で  
壊れてしまい、ガレキとなっ  
てしまった。僕はそれを呆然と  
見ていた。

僕たちはその後、田老総合事務  
所に行つて一日を過ごした。その  
夜、一つのおにぎりを三人で分  
けて食べた。また、一枚の毛布  
を6人でかけて寝た。

次の日、外を見た。ガレキだら  
けだった。自衛隊が来たりして、  
びっくりした。

その日、僕は家に帰ることが  
出来た。この日

のことは、絶対に忘れないようにしたい。

## 復興元年

山本 翔太

昨年三月十一日。大地震、大津波が田老を襲った。あの日みんなは裏山に逃げて無事だった。その日から今まで、津波を忘れたことは一度もなかった。僕の親戚の人が津波で亡くなったからである。そんな日から一年がたった。その間にはその間には学校生活でたくさんの出来事があった。

まず津波後の初行事は縮小した卒業式だった。会場は一中多目的室であった。とても狭く大変だったのを今でも覚えてる。

卒業式から何日かたった日、ついに授業を再開した。場所は一小の音楽室だった。その教室は三十九人にはとても狭く感じた。さらにロッカーもないので、長机をロッカーのかわりにした。その時の中学校は一階と体育館が津波の被害にあっていたので一小で授業ということになった。その時はたくさん大変なことがあった。先生たちとのけんかなどとても落ち着きがなかった。そんなことが続くなか、ついに中学校にもどって行くことができるようになった。七

月の半ばに帰ってきて、とてもうれしかった。そして中学校の生活がはじまった。

中学校にきてから、最初の行事は体育祭であった。津波があつたけれどもできてよかったと思う。田老の方々がたくさん見に来てくれてとてもうれしかった。

次の行事は文化祭だった。縮小して学習成果発表会となったが、団結してできた。この行事にもたくさんの方々が来てくれた。

いろいろなことがあつた一年だったけど、たくさんのことが分かった一年だったと思う。復興元年と言われた二〇一二年は田老一中も少しではあると思うが協力できたと思う。

震災から一年がたち気持ちも新たに、三年生になるので、田老一中を引っ張って、田老の復興に協力していきたいと思う。

## つながり

山本 拓美

二〇一一年三月十一日地震発生前、僕たちは体育館で卒業式前最後の合唱練習をしていた。すると、大きな地震が発生し、みんなで校庭へ避難した。しかし、地震は止んだり起きたり繰り返り続いた。しばらくすると、「逃げるー！」

という用務員さんの声で、山をめぐってみんな走った。何がだかわからないまま上へと山を登った。もう大丈夫じゃないかという事で山を下りた。線路から見限りだとさっきまでみんなが集まっていた校庭は、家やがれきや車などがれきの山と化していた。

お墓で、またみんなと会うことができた。その夜は、田老総合事務所で一夜を明かした。数少ないおにぎりをみんなで分け合い、自販機から取ったお茶を紙コップ一杯分飲み、毛布は五人で一枚、それでは足りなかったので、段ボールなどで代用した。こんなに寝られない夜は初めてだった。

夜が明け、窓から見たがれきの上には、雪が積もっていた。僕の家族は全員無事だった。僕たち家族は、父の知り合いのいる水沢に行くことにした。水沢の集会所には、摂待の方々が避難していて、おばあちゃんやいとこの無事を確認できた。この日の夜は、父の知り合いの家に話になった。暗い中で、あるものを食べた。寝るのもぎゅうぎゅうになりながら、灯り一つもない、こんな生活がいつまで続くんだろうと思っていた。

明くる日、いとこ達と近くを見に行った。山から海を見下ろすと、家のがれきなどがたくさんあるのが分かった。すごい被害だったのだと

改めて感じた。

ある日、僕たち家族は摂待のおばあちゃんの家にお世話になる事になった。夜はろつそくの灯りで一夜を過ごした。情報はラジオで仕入れた。寝る時は、一つの部屋に七人が固まって寝た。こんな夜がしばらく続いた。ある日、つくはずのない電気のひもを引っばつてみた。そして電気がついた。

「電気がついたよ。」

と、慌ててみんなに言った。テレビも無事につき、ちょっとはよくなったかなと思った。改めて電気の大切さを実感した。

今回の震災で、僕は人と人のつながりを感じた。自衛隊をはじめとする、支援して下さった世界中のみなさんへの感謝の気持ちでいっぱいだ。そして、今後は震災前の田老に戻るよう復興への道を歩みたい。そして、二〇一一年三月十一日を忘れてはいけない。

二〇一一年三月十一日

吉田 孝浩

僕は三月十一日の地震があった時、田老第一中学校の体育館にいました。その時は、たまにあるくらい地震だろうと思っていました。でも、だんだん今までに感じたことのないくらいの揺れになって、先生たちに指示され外に出ました。最初はその後どうなるかと心配だったけど、だんだん時間が経つにつれて、そのうちいつもよりは少し高い津波が来るくらいで済むのではないかと思うようになりました。その後、僕は家の人が迎えに来て帰りました。でも、帰ろうと少し車で走ったら、防浪堤の向こう側に黒い煙のようなものが見えました。最初は何か分からなかったけど、外にいる人が、

「津波だ、逃げろ！」

と言ったので、僕たちは車を降りて熊野神社に走って逃げました。頂上まで駆け上がったあとに田老の町を見たら、全部水につかっています。僕は何が起こったのかよく分かりませんでした。でも、周りの人の話を聞いてなにか起こったのか分かりました。そして、そこではらく休んでいると、消防団の人が来て、「山の後ろから火が出ているから山を下りなさい。」

と言われました。消防団の人が道をつくって順番に一人ずつ下りました。全員が下りたら、中学校の後ろを通って山のほうへ行き、線路上がりしました。そこには中学校の人たちがいました。僕は、中学校の人たちについていき、トンネルをくぐって曇のほうへ行きました。そこにも中学校の人たちがいました。先生たちの指示に従ってしばらくそこで待機していました。そのうち話がまとまってあと少ししたら田老総合事務所の三階に行くと言われました。総合事務所に行くとき、みんなは少しは落ち着き、しばらくして毛布が配られて寝ました。毛布は五人で一枚を使いました。夜中に先生たちを起こされて、二、三人でつくりたてのおにぎりを食べました。食べ終わったらそれぞれみんな寝ました。

朝になってみんなが起きて遊んでいると、親の方が迎えに来ていました。僕のお母さんも来て、またトンネルをくぐり線路を歩いて家に帰りました。それから二、三日で電気や水道が通り、いつもどおりとはいかないけど、春休みに入りました。

今回の東日本大震災は体験したくなかったけど、体験してしまったので、未来の人たちや世界の人たちにこのことを伝えていきたいと思えます。

一年間を振り返って

蓬田 竜星

三月十一日

内館ともえ

震災から一年が経ち、一年生も終わりそうです。

震災が起きた後は、学校もまだ始まらないとか、校庭もあんなにガレキがあったから、もうサッカーもできないと思っていました。でも色々な方々の支援などがあって、ここまで来れたのだからしっかりと感謝したいです。

もう二年生は終わるけど、三年生になるという感じがしません。三年生になればすぐ修学旅行があるけど、修学旅行に行くという感じもありません。でも三年生になれば受験もあるし、一つひとつの行事が最後になるので、悔いの残らない学校生活を送りたいと思います。

今年が良い部分もあったけど、良くない部分が目立ったので、来年は良い部分が目立つような生活が出来れば良いと思います。

あの日、私たちは学校の体育館で卒業式の練習をしていました。その時練習していた曲が「時の旅人」でした。みんなが一生懸命歌っている時に地震が発生しました。最初は何かおこっているのかわからなかったのですが、揺れが大きくなるにつれてそれが地震だとわかりました。

今までに体験したことのない大きさで、バスケットゴールとライトが落ちてきそうで、すごく涙が出てきました。校庭にでる時、足に力が入らなくて友達に支えられながら行ききました。校庭に行くのと地面にひびが入っていて、ますます怖くなりました。全校が校庭で待機をしている時に、琴畑さんが、

「逃げるー！」

と叫ぶ声が聞こえました。何が何だかわからないまま走りました。山を登っている途中後ろを振り返るとすごい土煙が見え、そこで津波が来たんだとわかりました。校庭の方を見た時、がれきが流れてきたのが見え、死ぬかと思いました。山に登り町を見ると、もうがれきしかありませんでした。周りを見ると同じ学年の人がほとんどいなくて不安になり、少し止まっていた涙がまたこみ上げてきました。泣いていたと

き一人の先輩が抱きしめてくれたのでうれしかったです。その後、別の場所に逃げていた生徒がやってきて、総合事務所に行きました。その夜私は具合が悪くて下の階で寝ました。寝たくてもたびたびおきる地震がとて怖くて、あまり寝られませんでした。

次の日、外を見たら雪が積もっていました。なんかとても悲しかったです。私は「時の旅人」があまり好きじゃありません。その曲を歌ったり聞いたりするとまた地震がきそうで怖いからです。もうあんな体験はしたくありません。

今、心から思うこと

加藤 まみ

もしも、三月十一日にあの津波が田老に押し寄せてこなかったら、今自分は何をしているのかなって考える事がある。そしてこの津波は、私たちに大切な事を教えたかったのかなとも考える。私はあの震災が起きた頃は、変わり果てた田老の町を見ては、もう見るこののできない田老の景色を思い浮かべて、ただただ悲しくて、悔しくて、自然と涙が流れてきた。逃げていた時は、夢なんじゃないかって思った。

「上にあがれ、どんどん行け。」

後ろを振り返る余裕もなく、フェンスを這い上がり、線路の上のはしごを登り、またさらに山の中をどんどん進んだ。もう無我夢中だった。すごく怖かった。同じ場所に全員いたわけではなかった。

「 ちゃんがない。」

と言つ声や、

「 家の人逃げたかな、大丈夫かな。」

とみんな思っている事は同じだった。私が逃げた時、前にはお兄ちゃんがいた。そして火事がすぐ近くであったようで、いったん線路の上に戻る事になった。そこで私は、お父さんに会う事ができた。私は少し安心した。そして、お寺で私たちはみんなと合流できた。みんなを抱き合って泣いた、変わり果てた田老を見下ろしながら。

総合事務所に着いてから、私は家族六人全員無事な事が分かった。すごくほっとした。だれど周りの友達も、まだ会っていない人がほとんどで、心配になって泣き出す人もいた。私は、

「 絶対大丈夫だよ。ちゃんと逃がっているよ。」

としか言つ事が出来なかった。三人で一つのおにぎりを食べ、毛布は何人かで使った。毛布が足りなかったため、ビニール袋の人もいた。私は続く余震の度に怖さが増して友達にしがみついた。

「 大丈夫だよ。」

と言つてくれて気持ちがその度に落ち着いた。その夜は、怖さでなかなか寝られなかった。その日だけではなかった。次の日も、また次の日も怖かった。

私たちは当時中学一年生で、重すぎるほどのつらい体験をした。でもだからこそ気付かされたこともたくさんある。私たちが今の三年生が、三十九人全員でいられることの大切さ。家族がいつもそばにいること、学べる学校があること、帰る場所があること、その他にもたくさんあるけれど、どれも今まであつて当たり前だったけれど、あの時から私は、田老に住むことが出来ている今をすごく幸せな事だなんて思うようになった。「大切な物はすぐそばにある」というのはこういう事だと思つた。言い方は悪いかもしれないけど、この津波でたくさん物を失ったからこそ気付けた。みんなに知ってほしいのは、自分の町や家、家族、友達、地域の人みんな、そして自分を大切にしてほしいということです。

## 震災の辛さを乗り越えて

小池 紗恵

三月十一日、卒業式を明日に控え、在校生の私たちは体育館で合唱練習をしていた。すると突然揺れを感じた。いつものような地震だと思つたが、揺れはおさまることはなく、強さを増していくばかりだった。先生の指示で校庭へ避難をする。地面を見渡すと大きく地割れをし、波のように揺れているのが目に見えて分かった。これはいつもと違う地震だとそこで初めて分かった。田老一中は避難所所になっていたため、先生、全校生徒のほか近所の保育所の園児やおさまる、の繰り返しだった。怖くて泣いている人もいた。しばらく待機していると、

「 逃げる。」

という大人の声と共にみんなが裏山へ向かって走り出した。私は状況が把握できないまま走り出し、山を駆け上がった。山を登り終え、周りを見渡したが、みんながそろっているわけではなかった。二手に分かれたのだ。他のみんなは無事なのかと心配で、友達と泣きながら励まし合った。

しばらくすると、違う道に分かれた人たちと会うことができ、中学生全員の無事が確認され

た。そして総合事務所に避難することになり、その一室で一夜を過ごすことになった。大人の人たちが自動販売機を壊し、持ってきてくださったお茶をみんなで分けて飲み、津波の被害を免れた地区で炊き出しをし、線路を歩いて持ってきてくださった真っ白な塩おにぎり一つを二、三人で分け合ったりした。すごくすごくおいしかった。今でもその味を覚えている。

震災から一夜明けると、親戚や家族などが次々と迎えに来て、生徒たちが帰っていった。人数が減っていくにつれて不安が募る。家や物なんてどうでもいい、ただ家族さえ無事であることだけ願った。しかし、そんな願いは叶うことができなかった。

震災直後から、高台にある祖父の家に避難することになった。停電のため明かりは、ロウソクや懐中電灯、体を温めるために反射式ストーブを使った。それに加え、水が出ないため、祖父たちが近くの川に水を汲みに行っていた。大変そうの手伝いだったが、力不足で私にはできなかった。

その後食べ物も飲み物、全ての物を数えきれないほど世界中から支援していただいた。お礼もたくさんしてきたが、これから生活していく中で、さらにお礼をしていかなければならない。私に今できることは、つらい事にも負けず、笑

顔で生きていくことがお礼につながると思うている。

### 考えることと悩むこと

坂本 桃香

春は卒業と桜の季節です。でも、田老第一中学校で見られる桜は数本になってしまいました。震災前は、花びらの雨が降るくらい桜の木がありました。私の中学校卒業と高校入学の頃には、春らしい桜が見られるでしょう。

二〇一一年三月のあの頃は、「最近地震がよくあるなあ。」と思っていました。しかし、三月十一日に学校で、千年に一度の地震を体験すると思ってもいず、予想外でした。誰も津波が来るとは、思ってもいませんでした。

「どうなってしまうのか」ということではなく、「ただただ生きるために」山を登りました。もちろん山道は舗装されておらず、学校の中ばきで登りました。私たちの背後に、えぐり取られる家の音と津波の気配を感じながら、泣きじゃくる友達の手を引いて必死で山まで走ったことは忘れられません。津波の水の流れは、私たちの目の前で家を流れに巻き込んでいました。あの家々には多くの思いがある

のだろう、人々の大切なものがあつたのだろうと思います。

震災後の学校生活は大変でしたが、なんとかか過ぎていきました。そんな頃、ふと校舎から窓の外を見たら、枯れた桜の木が目に入りました。それまでは余裕がなかったので気づきませんでした。窓の外は何も無くて、ガレキと雑草があるだけでした。「色」のあるものがあります。桜の木もこれから生きていけるのか分かりません。これから入学する生徒も卒業していく生徒も、桜にその姿を見てもらえないと思うと、とても悲しくなりました。それは、私が何歳になっても思うでしょう。起きてしまった事はどうしようもないけれど、それをどう捉え、考えるのは自分自身だと思う。私には何が出来るのか、いつか田老に「色」が増えるように、また桜の花が見えるように、これから考えていきたいと思えます。



## 未来の田老

佐々木茜峰

田老は津波の被害を受け、町が暗くなりました。だからこそ今後の田老の未来は、前よりもっと明るく、みんなとの絆を大事にしてほしいです。そのためにはまず、私たち若者が動き出さないといけないと思います。まずは津波が来たところには家を建てず、家はみんな高台へ。でもそつすると田老の町に何もなくなってしまうので、店は何軒か作ったほうがいいと思います。それで万が一、津波が来ても逃げられるように、いろんな所にハザードマップを設置し、高台へ逃げられるよう、お年寄りでも大丈夫なゆるやかな避難路を作ってほしいと思います。それでもやっぱりお年寄りにはつらいと思うから、周りにいる人たちの手助けが必要だと思います。そうすれば被害は少なくなると思います。町を明るくするには、いろんな行事をしてみんなに参加してもらおうことです。交通手段がない人のために、バスの送迎もします。そしてその行事の中にも子供から大人まで楽しめるような企画をして、みんなが触れ合えるように行事を増やしていければ、自然と絆ができると思います。絆が深まれば津波の時などに、自然と助け合うことができると思います。そして、何十年

か後には家も建って、前よりにぎやかな町になると思います。そのためにも私は大人になって何年か経ったとき、田老の復興を手助けできるような人になりたいと思います。

ありがとう、今なら言える

佐々木あずさ

「ドン」聞いたことがないような音が体の中に鳴り響いた。その日私は風邪をひいていたので、学校を欠席し自分の家の中いました。強い地震が起き、おじいちゃんに

「外に出ろ。」

と言われ、わけもわからずに外に出ました。私の頭の中には「地震」机の下にかくれる」ということしかなく、「地震」が「津波」に直結しなかったのです。けたたましいサイレンが響きわたり、それだけで私は不安に駆られ、怖くなりました。

近所の人達が高台へ避難しはじめ、私もお母さんと一緒に高台へ向かいました。海のある方から男の人が

「にげるー。」

と叫ぶものですから、私の心臓は一気に高鳴り頭で何も考えられなくなってしまいました。

そんな時でも母は私の手を離さず導いてくれました。高台には「こんなに人がいたのか」と思うほど人であふれかえっていました。そして、全員が自分の家を見つめ、かすれた声でうめき声をあげていました。

何分そこにいたかはわかりません。そのうちにおじいちゃんが高台まで迎えにきて車に乗せてもらいました。夜になるのがとても早かった。窓の外を見ても電気が全くついていないのが余計私の心を不安にさせた。避難所となっていたグリーンピアでその夜は過ごすことになった。翌日も、翌々日も家に帰れなかった。風邪をぶりがえしてしまった私はその何日間のことを良く覚えていない。知らない人達に囲まれていたストレスもあつたからだったのだろう。その時の私は、目を開けたくなかった。ご飯もいらないから、ただ何も見たくなかった。そんな私を心配する人はいたけれど、一人にしてほしかった。

家に帰ってきた日はよく眠れた。無音の世界で安心した。

今なら言えます。ありがとう。お母さん手をひっぱってくれて、心配してくれてありがとう。私を助けてくれた人、心配してくれた人ありがとう。人の力ってすごいと思う。

## 今思うこと、そしてこれからの未来

佐々木茉凜

私は三月十一日の震災を体験した。あの日にこんな事になるとは思わず、いつもの通り学校に来ていつも通りに過ごしていた。

しかし二時四十六分。急に大きな揺れを感じた。私はどうせすぐ止まるだろうと思っていたがそれは一向に止まることはなかった。ぐらぐらと今までに体験したことのない揺れだった。周りの人はとても焦っていて私自身も何が何だかわからなかった。それから外に出た私達は校庭の真ん中に身を寄せ合うように座っていた。いつまでも揺れ続ける地震。しまいには泣いてしまう人もいた。しかしなぜか私は冷静だった。そのあとトイレに行きたくなり体育館のトイレに行った帰りだった。

「にげるー」  
と大きな声があった。町は砂埃が立ち、バキバキ、ゴオオオと何かが押し寄せてくる。私は必死になって裏山へ逃げた。上へ上へととにかく登った。息を切らしてどんなに険しい道でもみんな手足にキズを作りながら登っていった。すると、

「せつあがれませんー」  
と先輩の声が聞こえた。私達は気づかないう

ちに一番上へと登っていたようだった。私はふと町を見た。そこには言葉では表すことのできないくらいひどい景色だった。つい数分前にいた校庭には家が押し寄せ、様々なところから車のクラクションが鳴り、どこかで爆発音が…。しかしなぜか私はひどく冷静で、あー、そういうえば部屋にあったマンガは大丈夫かなあ。テレビの前かつたのになあ、録画した番組見てなかった、なんてどうでもいいことばかり考えていた。それにどこから自信がわいているのかわからないが確実に家族は無事だろうという確信があった。

それから私達は役場に行つて一晩過ごした。その夜は寒いし、お腹は空くし、環境はお世辞にも良いとは言えなかった。その後私はお母さんに迎えに来てもらい早く帰った。

その体験をして私は人を助けるような仕事に就きたいと思った。たくさん人の良いところを見つけたりたくさんの人に出会ったり震災は全てが悪いものではないと感じた。

## いろんな体験

佐々木みく

現実だと思えなくて、いろいろ考えることができたのが、避難した総合事務所でした。まさか自分が生きている時に、津波なんか来るなんて思っていなかったから。総合事務所からは、何もなくなりガレキでいっぱい町しか見えませんでした。総合事務所のテレビに映っているのは、日本が映り、沿岸の所だけ真っ赤になっている場面だけでした。

避難した夜に食べたおにぎり、三人で一つ食べました。たつた一口だけだったのに、すっごくおいしく感じました。寝る時は五人で毛布一枚にくるまって寝ました。みんなでいたから、何かと心強くて少し寝られました。

私の家族は全員無事でした。私は二日目の朝、お父さんが迎えに来てくれました。お父さんは宮古から山道を通って来ました。まだ迎えが来ていない友達と別れてお父さんとお母さんと妹とお兄ちゃんと一緒に線路を歩いて、そこで初めて、田老の町並みを見ました。山は火事が起り、道路は家が流れてきていて通れなくなっていました。ゆっくりとそんな田老を見ながら車に乗りこみました。

家に帰ると電気はついていなく、テレビもつ

いていなくて、暗い部屋でした。家に帰ってからの一、二週間はろうそくに火をつけて電気代わりしていました。まだ、お風呂は入れたし、山の水も出だし、薪ストーブだったので良かったです。いつもの慣れで、電気のスイッチを押しちゃったりして、すぐにはろうそくの生活には慣れませんでした。

そんな生活が一、二週間続いたころ、田老のおばちゃんの家の荷物を取りに行った帰り、道の駅の自動販売機の灯りがついているのに気がつきました。お父さんと私はすぐに家に帰りテレビと電気をつけました。ついた瞬間、電気ってこんなに明るいつけか？などと思いながらだんだん生活が、ちょっとずつだったけれど戻っていったのを嬉しく思っていました。

テレビで最初に見たものは津波が来た瞬間の映像と地震で大きく揺れている映像でした。二つの同じのが繰り返し返して流れているだけでした。それでも、いろんな県の情報が入ってきました。本当にこんなことが起こるのか、と思いつながら見ていました。

あれから一年半経ってみんなは仮設に入り、学校に通えるようになり、少しずつだけれども明るくなりました。ここまで復興できたのだから、もっともつと町を変えていけると思います。まだまだ問題はありますが、もっともつと元通り

の町にできるように頑張っていきたいです。

### あの時心に誓ったこと

佐々木優衣

あの時、私はまた田老第三中学校の生徒でした。その日は学校の大掃除で、私は図書室を掃除していました。掃除をしているとカタカタと小さな揺れがありました。地震だと思った瞬間、ドドドツという音とともに大きな揺れへと変わりました。図書室では、本が落ちてきたり本棚が倒れたりしました。揺れが小さくなった時、私たちは外に避難しました。津波の危険があるため、お墓に走って避難しました。お墓には、まだ誰も避難してきませんでした。先生が持っていたラジオをつけてみたら、ラジオから大津波警報が発表され、とても怖かったです。たくさんの人が避難してくる中、私は家族の姿を探しました。お母さんたちの姿を見つけ安心してると、お母さんが車に戻り、海の方へ走って行きました。海にいるお父さんとおじいちゃんを心配して見に行つたのです。その時、私は津波を見ました。土ぼこりをあげ、家を飲み込む津波を。私はお母さんが津波に飲まれたのではないかと怖くて泣いていた時、お母

さんが戻ってきました。後から話を聞いたら、家に行つた時にはもう津波が襲つた後で、あと少し行くのが早ければ津波に飲まれていたかもしれない、と言っていました。その日の夜、私たちはお父さんたちの安全が確認できないまま、水沢の避難所で一夜を過ごしました。

次の日の朝、余震で目が覚めました。起きてご飯を食べて外で遊びました。午後になって、避難所に戻つてお昼を食べ、また遊ぼうと思つていた時、避難所に一人の男の人がやってきました。なんとお父さんでした。そこでおじいちゃんも無事だと聞いて、私たちは安心しました。次の日、家に帰って片づけをしている時、おじいちゃんが帰ってきました。そして、地震が来たときの話を教えてもらいました。沖にいたお父さんたちは津波で船が転覆したそうです。そこにたまたま別の船が通り、助けてくれたと言っていました。田老病院に入院していたひいおばあちゃんも無事に家に帰ってきました。家に着いた日の夜、電気が点きました。その時すぐくうれしかったのを今でも覚えています。早速テレビをつけて見ました。テレビには他の市町村や宮城・福島などの被害の様子が映っていました。その中には、医師不足や薬不足の問題も取り上げられていました。私はただただその映像を見ていることしかできませんでした。

次の日の夜、寝ようとしていると、一階からおばあちゃんの泣き叫ぶ声が聞こえてきました。何があつたのか分からずにいると、お母さんが私たちに下に来るように言いました。行ってみると、ひいおばあちゃんが亡くなったのです。原因は通っていた病院が被災したため、薬が届かなくなってしまったからです。私は一月に宮古のおじいちゃんが亡くなってしまったばかりで、たつた三か月で二人も大切な人が亡くなってしまって、ひいおばあちゃんが亡くなった時、すごく悲しくて、涙が止まりませんでした。でも、その時私は泣きながら、心に誓ったことがあります。絶対看護師になる。もし、ひいおばあちゃんが家に帰ってきた時、お世話をしてあげることができたらもつと生きていられたんじゃないか、おじいちゃんだって長生きできたんじゃないか、とすごく思いました。看護師になるためには、まず高校への進学が必要です。私は勉強が得意とは言えませんが、一生懸命頑張ります。そして看護師になって、たくさんのお世話をし、患者さんに「ありがとう」と言われるようになりたいです。

## 震災を通して

外山 彩香

突然大きな地震が起きて、体育館や校舎から出てきた生徒たちは、ゼリーのようには波打つ校庭に、不安な気持ちで待機していました。少し時間が経ち、いきなり大声が聞こえ、その途端、皆一斉に焦った様子で山に向かって走り出しました。空は砂煙で灰色になっていました。驚きと不安がたくさんあつたし、波も見たのにこんな事が現実には起きるわけがないと思い、必死に走っているのに避難訓練と同じような感覚で、緊張感が持てませんでした。

生徒は逃げる時に二手に分かれてしまいました。私は体育館の裏を通り、線路まで出て、そこから山に登りました。山火事が起きているらしく、空から灰が降ってきました。波も収まってきた頃、山を降り線路のトンネルの中を通過して、他の生徒や先生たちがいるお墓の所に行きました。先生が号泣していて、見た途端に皆も一緒に泣いていました。お墓の上から見た田老は、見渡す限りの瓦礫で埋まっています。この時やつと現実なんだ、と思い、恐くなりました。夜は総合事務所に泊まらせて頂けることになりました。食べ物紙コップ一杯のお茶と三人で一つのおにぎりでした。みんなで持ってきて

てくれた人に感謝しながら食べました。何人か一つの毛布に包まって寝ました。なかなか寝付けられなかった人が多かったと思います。次の日の朝、窓から見た景色は、いつ降ったのか、雪で覆われていました。雪のおかげであまりにひどい瓦礫を見ずすみました。

学校が始まって、二年生の一学期、二学期は何に対してもやる気が出ず、そんな自分にとっても困っていました。でも時間が経つにつれてだんだんと落ち着いてきて、勉強も部活もやる気が出せるようになり、そのおかげでいろいろな事が改善されて良かったです。これからもやる気を無くさないように、日々過ごしていきたいです。



## 東日本大震災から

畠山 愛美

すさまじい「地震」いつ来るか分からない「津波」恐怖におびえながら、経験したこともないような経験をしました。

卒業式の練習をしている最中、すごく大きな揺れを感じました。体育館の床が波打つようなとても大きな揺れでした。校庭に避難しても揺れをまだ感じていました。外に出ればサイレンが鳴っていて、頭の中は何がなんだかよく分からなく混乱していました。自分は死ぬのかな、津波ってどんなものだろう、田老はどうなるのかな、家族は大丈夫かな、とただただ疑問だけしかありませんでした。

「逃げる。」

と言われた時は無我夢中で走り、一瞬振り返った時、そこには見たことのない田老がありました。現実ではないかと思いつながら道がない山を走り、着いたときに見た光景は、やっぱり現実でした。逃げた場所は二つに分かれたみたいで、いない友達もいました。その後、私たちが逃げた山の近くでは火事があり、一旦山から下りてお寺のほうに避難しました。全校揃い、友達とも再会してなんだかほっとして号泣してしまいました。そして一晩、総合事務所まで過

しました。余震はずっと続き、全然眠れませんでした。飲み物も尿検査の紙コップにほんの少しだけでした。ご飯は遅い時間におにぎりが届き、三人で一つだけでした。つらかったけど、こんなときこそみんなで協力しなきゃって思いました。次の日、外を見たとき言葉が見つかりませんでした。本当に田老？って思うほどびっくりました。朝になると、それぞれの親が迎えに来て帰って行きました。私の家は残っていたけど、家の中は泥だらけで、物が散乱していたり、窓が割れたりしていました。総合事務所にはいとこの親が迎えに来て、二日くらいいとこの家で過ごしました。自分の親とも再会して、いとこの家からおあちゃんの家でしばらく過ごしました。

震災はつらかったけど、それを乗り越えて復興まで頑張ってきたいです。



## 震災を体験して

堀本 果鈴

三月十一日二時四十六分、田老の町は一瞬にしてかわってしまいました。

この日は、体育館で卒業式の練習をしていました。そして、練習の途中で大きな地震が起きました。私たちは、慌てて外に逃げました。びっくりすぎて、心臓がドキドキしてました。学校の外のナイター用の照明が、大きく揺れるくらいの大きな地震でした。私は、今まで体験した地震より大きかったので、びっくりしてました。何分か余震が続きました。その後、誰かの

「逃げるー！」

の声で、みんな一斉に逃げました。私は、何が起こつたのか分からないまま、学校の裏山に必死に逃げました。途中まで登って後ろを見てみると、黒い物があがつていて、校舎には車や家が出てきていました。私は一番上まで登って安心したのか、涙が出てきました。みんながいる所に行くけど、私たちのクラスの人々が七人くらいいませんでした。先生に聞くと、

「反対側にいる。」

と言われ、みんなが無事なことが分かったので、すごく安心しました。その後、反対側にい

たみんなが集まってきて、総合事務所に避難しました。総合事務所には、たくさんの人が避難していました。私たちは、大きな部屋に入りました。地震がおさまったと思ったら、余震が多く続きました。夜になって、宮古の被害がないところからおにぎり届き、一つのおにぎりを三人ずつに分けて食べました。飲み物は、総合事務所の人たちが自動販売機を壊して飲み物を分けてくださり、紙コップで少しずつ飲みました。そして、私たちは寝ました。だけど寝られるはずもなく、ほとんど起きていました。その夜は、地震が多くありました。気が付くと朝になっていました。外は雪が降ったらしく、雪が少し積もっていました。家やお店があつたあの町はなくなっていました。校舎にもたくさんのがれきがあり、校舎の中にも泥などが流れていました。私はすぐがっかりしました。もう学校に通えないのか、などと考えていました。

長い春休みも終わり、二年生としての新学期が始まりました。中学校はまだ使えないので、小学校の一部を借りて新学期を迎えました。学校生活には変わりはないけど、この大震災で大切なものをなくしたりした人は、たくさんいるけど、このことを引きずってもいけないし、忘れてもいけない。だから、このことを色々な人に伝えていきたいです。

今の田老は、震災前より不便だけど、必ず前みたいに戻ってほしいです。

## 震災

山本 紗瑛

三月十一日二時四十六分、世界が一瞬で変わった東日本大震災。

校庭に一旦避難した私たちは恐怖でいつぱいだった。空はきれいな青空だった。警報がぶつぶつときれながらなっていた。そのときにはもう津波の一回目が来ていた。そして、「逃げる!」

その一言でみんなが山に向かって走った。後ろを振り向くと、がれきと共に津波が押し寄せてきた。山に登り町を見ると、前の田老はもうそこにはなかった。言葉が出なかった。一緒に逃げた人を見ると三年生は一人もいなかった。先生も一人だけ。となりの山は燃えていたため、山を下りた。総合事務所に向かうところで仲間と合流し、全員が助かっていたのが分かった。その後、総合事務所に行った。毛布は五人で一枚、おにぎりは三人で一つ、お茶は紙コップにちよつとだけ。みんなが不安でいっぱいな一日を過ごした。

次の日、外は真っ白な雪があり、がれきの上を自衛隊が歩いていて。そのとき私は不覚にも思ってしまった。このがれきの下に何人も遺体が眠っているのだろうか……。どれだけの人が亡くなった人か。泣くのだろうか……。そんなことを思ってしまった。だが不安な夜は今日もやってきて、親が迎えに来ない生徒は悲しい顔だった。そして月日は過ぎていった。

その後、田老は復興に向けて頑張った。仮設住宅もでき、家が被災した人たちが仮設に入った。

あの時のすさまじい光景は忘れることはできないが、これからも前を向いて生きていこうと思う。仲間もみんな助かって本当によかった。震災があつて気付いたこと、震災がなかったならば学べなかつたことはたくさんある。そんなふうにポジティブに考え、生きよつと思つた。



## 東日本大震災

山本 真華

三月十一日、あの日から私たちの生活は大きく変わりました。

あの日私たちは、卒業式の練習をしていました。午後二時四十六分、大きな揺れとともに私たちは体育館から校庭に逃げました。揺れが収まることはなく、ただただ怯えていました。泣いている人もいました。そして3時二十分頃、「逃げるー。」

という声がして、無我夢中になって山へ駆け上がりました。私は何がなんだか分からないままひたすら走りました。しばらくして山から下りて町の方を見ると、信じたくもない光景が町を包んでいました。この時、ようやく津波が来たことを知りました。

それからは総合事務所へ行って、長い一夜を過ごしました。ご飯は三人で一つのおにぎりとお紙コップ半分のお茶だけ。でも私はそれだけでも満足でした。そして、とてもおいしく感じました。収まることのない余震で夜はなかなか寝る事ができませんでした。私は、両親が無事なのか不安で不安で仕方がなかったです。次の日の朝、友達の親が迎えに来ていて、私の親はまだなのかとそればかり考えていました。ようや

く迎えが来て、私は安心しました。

これから震災後の生活がスタート。水もなく、電気もつかなく、風呂も入れない、そんな日々でした。しかし、数日後にはほとんどが復旧して、やっと前の生活へ近づけました。だけど避難場所へと行ってみると、私が思っていた想像以上に窮屈な生活をしている人がたくさんいました。自分は家もあってどれだけ恵まれているのか、思い知らされました。

あの日、大きな地震・津波を体験して私たちの生活は大きく変わりましたが、逆に体験した私たちにしかできない事があります。それはこの事を次の世代まで語り継ぐ事です。私はあの出来事を忘れずに生きていきたいです。

三月十一日

山本 七海

震災当日、私たちは卒業式の練習をしていました。

そして、午後二時四十六分に大きな地震がありました。みんな外に避難して、地震がおさまるのを待っていました。とても不安でした。すると、逃げると聞こえてきたので、私は校舎の裏から山へ逃げました。山に登ってみると、

田老の町はほとんど海でした。となりの山が火事だったので、お寺の近くの山に線路を渡って行きました。そこから見た景色は、がれきでいっぱいでした。それを見たら、なんだか悲しくなりました。その日は、役場に泊まりました。三人で一つのおにぎりは、とてもおいしかったです。三人で一つでも、誰も文句を言わなかった。三人で一つでも、誰も文句を言わなかった。次は朝、田老を見てみると、がれきでいっぱい、その上には雪が積もっていて何とも言えない気持ちになりました。その風景を見て、私の家はなくなつたのかなと思いました。そして、親戚の方が迎えに来てくれて、家族がいるグリーンピアに行きました。行ってみると、多くの人たちが避難していて、びっくりしました。でも、家族が全員無事でよかったです。その後の生活はかなり厳しかったです。グリーンピアにはちょっとした食料しかなくて、とても不安でした。水道も出なくて不安でした。でも、何日かすると、自衛隊の人たちが来てくれて、その時は安心しました。四月下旬には学校に行けるようになりました。友達にも会えたのでよかったです。仮設住宅での暮らしは最初は慣れないことばかりだったけど、今は慣れてきたのでよかったです。

あの日のみんなはすこかったと思いました。役場に泊まる時は、誰も文句を言っていないくて、

すごいと思つたし、あとから聞いた話では、高齢者の方や保育所の子どもたちを助けてあげたと聞いて、とてもすごいと思いました。

田老は今少しずつですが、復興していると思います。いろいろな人たちが仮設住宅から出ていくのを見てみると、みんながバラバラになつてしまつので、少しさびしいです。私たちは田老一中にいたときに被災した最後の学年になるので、これからもあの日のことを語りついで行きたいと思います。

三月十一日

山本 理乃

三月十一日、卒業式の合唱練習をしていたときに大きな地震がありました。みんな中ズックのまま、とにかく急いで校庭に出ました。校庭では余震が続いて怖かつたです。少しすると、

「逃げる。」

と言われ、わけもわからず、とにかく山を登りました。山を登りながら振り返ると、真っ黒い煙がもくもくと広がり、波が防浪堤を越えてきました。恐怖だったけど、とにかく上まで登りました。みんなの無事が確認されるまで心配と不安でした。そして、みんなの無事が確認さ

れたところで、総合事務所へ行きました。おにぎり一つを三人で分け、毛布は五、六人で一枚使いました。その日の夜はあまり眠れませんでした。次の日になると、男子は手伝つたりしていました。寒い中、とてもがんばつていたと思います。上着を貸したり、仕事を手伝つたりして優しさをたくさん見ることができました。家族と再会したときは、とても安心しました。それから、休みが続きました。

新学期が始まるときは、久しぶりに友達に会えるので、とても楽しみだったし、うれしかったです。

いろいろな方々や団体からたくさん支援していただきました。とても助かりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

震災にみまわれた私達をたくさんの人達が支えてくれたおかげで、私達も乗り越えられたのだと思います。

三月十一日、東日本大震災

畠山紗莉奈

三月十一日。何も変わらない日常から、突然全てを奪い去った。

あの日、私たちは次の日に行われる三年生の卒業式に向けて歌の練習をしていた。かすかな

揺れには気づいていたが気にはとめていなかった。しかし、次第に揺れは大きくなり、不安と恐怖に私は襲われた。先生の指示によって皆が外に出て、校庭に集まり、身を寄せた。まだ、温かいとは言えず、少し肌寒いくらいの時期である。スピーカーから津波に気をつけると警報が出た。すると、数分くらいでいろいろな人が校庭へやってきた。患者さんから子供達、町の人達が避難していた。だが、きつと誰もが油断していたらう。ここまで津波が来ることなく、誰も想像していなかったはずだ。すると水門から怪しげな音が静まり返つた田老の町に響いた。私は、初めて田老の町を不気味だと思つてしまった。恐ろしさにただただ怖くて見向きできなかつた。その時、

「逃げる。」

と叫ぶ大声がした。そして私は現実を目に焼き付けたのだ。自分達の目の前に津波が来ていた。皆は駆け出した。この時、皆はどう思っていたのだろうか。「死」の恐怖を感じたのだろうか。どっちへ逃げたのだろうか、実はその時の事をあまり覚えていない。ただ夢中に墓地がある山へ人を助けながら逃げた。どうやら、大半の生徒はもっと高いところへ行つたらしかった。自分も行かなきゃ、と思つたところで振り返つてしまった。つい先ほどまでいた校舎や校



庭が変わり果てていて家のがれきでうまり、ま  
してや目の前で人が流されていく姿を目の当た  
りにしてしまった。私は、人の死「最期」を見  
てしまい、何も考えられなくなってしまった。  
どうしたらいいのか立ち尽くしてしまった。す  
ると先生の声で、危険だから高台へ行くように  
指示があり登って行った。今になって思うこと  
がある。もし、あの時、

「逃げる。」

と言ってくれなかったら、私やあの場所にい  
た人達全員が助からなかったかもしれない。

あの日から私は、海へ行っていない。なぜなら、  
まだ行方不明者がいるからだ。一日でも早く家  
族のもとへ帰れますように心から願っている。  
あの震災から学んで、皆はきつと夢を見つけた  
ことと思う。だが、私はまだ自分の夢ややりた  
いことが何かがわからない。だけど私にも何か  
可能性はあるはずだから、その可能性を見つけ  
て自分にふさわしい職業につこうと思う。



生徒作文 平成二十三年卒業生（四十八名）

今、思う事  
 三月十一日のこと  
 震災を経験して  
 三月十一日  
 田老  
 震災を乗り越えて  
 震災を振り返って  
 感謝の気持ち  
 震災の日自分が体験したこと  
 大震災からの教訓  
 支援への感謝  
 震災  
 大原Tシャツへの感謝  
 三月十一日  
 津波  
 三月十一日  
 震災について  
 震災を経験して  
 三月十一日から・・・  
 震災にあつて学んだこと  
 東日本大震災津波  
 大震災について  
 津波の日  
 弟の誕生日  
 東日本大震災を通して

赤沼元気  
 大澤有峻  
 黒田瑞希  
 小林優太朗  
 中島弘喜  
 畠山広生  
 前田村生  
 三浦誠也  
 皆川有輝  
 村井旬  
 村田竜聖  
 山崎淳那  
 山本大成  
 阿部侑華  
 石川美幸  
 伊藤三葉  
 久保田祐実  
 佐々木聖奈  
 清水愛里  
 畠山映美  
 山本千咲  
 山本麻央  
 和井田まみ子  
 田澤凱暉  
 上山凌

東日本大震災  
 震災を通して  
 復興にむけて  
 Tシャツからの絆  
 東日本大震災を振り返って・・・  
 震災とボランティア  
 震災後の文化祭  
 これからの自分  
 あの日の記憶  
 田老の復興  
 三月十一日  
 震災の日  
 中学生生活の思い出  
 震災  
 三月十一日  
 三月十一日  
 三月十一日  
 東日本大震災  
 東日本大震災  
 東日本大震災を経験して  
 東日本大震災  
 東日本大震災を経験して  
 感謝の気持ち  
 あの日のことを忘れない  
 大震災が起こった時

榎本璃空  
 加藤利輝  
 小林和史  
 小林凌  
 齊藤和志  
 澤口義登夢  
 鳥居将太  
 松本航大  
 安田要  
 山本瑞樹  
 山本賢孝  
 吉水啓大  
 大久保わかな  
 影田久保亜美  
 加藤友実  
 木村紗弥  
 久保田麻里  
 添田紗理奈  
 中里実結  
 馬場裕香  
 松本茉耶  
 山本矢穂  
 扇田沙織

## 今、思う事

赤沼 元気

震災当日、僕はおばさんの手を引きながら、山を登り避難しました。津波から逃れた僕たちは、市役所で一つの毛布に数人で寝て、その日は乗り切りました。少しして、母さんが来て、そのあと宮古北高校に移りました。食べ物には困りませんでした。数日が経って、自衛隊の人が仮設テントのお風呂を作ってくれました。とても気持ち良かったです。そのあと、グリーンピアに移動しました。お風呂は温泉で、寝る場所はアリーナでとても広かったです。仮設住宅ができて、アリーナから移りました。

それから学校に行きました。学校は最初、小学校の三階で授業をしました。そして三年生の生活が始まりました。そして沢山の行事を小学校で行いました。九月に中学校に戻りました。十月に体育祭を行いました。残念ながら負けてしまいました。悔しかったです。修学旅行も行けないと思っていましたが、いろいろな方たちのおかげで行ける事になり、中学校最後の楽しい思い出が来ました。

二〇一一年三月十一日の震災で、何もかもなくしてしまった私たちに、いろいろな形で、支援して頂きました。

学校が、水をかぶってしまったとき、小学校の校舎を使わせてもらったり、筆記用具などの支援をしてくれた方々がいました。本当にありがとうございました。

高校生になり、まだ将来のことはわかりませんが、今度は逆に役に立てるように頑張りたいと思います。支援して下さった方々の事は忘れないでいたいと思います。

## 三月十一日のこと

大澤 有峻

三月十一日。僕たちは、体育館で卒業式の練習をしていました。合唱をしていると、「ゴゴゴゴーツ」地鳴りが聞こえました。そのときは最近地震が多かったので、また地震かと思いつつ歌っていました。地震が来ました。明らかに今までは、全く違った大きな揺れでした。先生の指示で外に出ました。それでも、まだ揺れを感じました。

何分かして、緊張がとけてきたところに誰かが、「逃げるー！」

と大きな声で叫びました。みんなで、一斉に逃げました。僕は、墓に逃げました。登るときに四人くらいの幼稚園児をおんぶして上に登り

ました。上に登ると、みんないました。しかし、自分の学年の男子が僕をふくめて三人しかいませんでした。他の人は、体育館の裏山を登って行ったそうです。

波がひいて、少し落ち着いたところで、役場に行きました。全校みんなが助かったときいて安心しました。全校みんなで一つの部屋を使用しているの、とてもきゆうくつでしたが、寒さをしのぐことができました。

寝ても全く時間が進まず、とても苦しい時間を過ごしました。そうしているうちに、三人で一つですが、おにぎりをもらえることになりました。毛布も、一枚を五人で使ったり、足りない人は、ごみ袋や段ボールをかけている人もいました。次の日には、帰る人も出てきて、人数が減りました。残った人でボランティアをしました。それでも尚、地震は続き、何度も避難する準備をしたりしました。何度も何度も、揺れる度に逃げる準備をし、大変でした。三日目には宮古北高に行き、そこから二日後には摂待の祖父母の家に行きました。

## 震災を経験して

黒田 瑞希

### 震災前

震災の二日前に地震があったのを覚えています。今になって考えてみると、あれは、震災の前触れだったように思います。また、前日に祖父と祖母が、

「海の上を歩けそうなくらい、波が一つもなかったな。津波がくるかもしれないな。」

と言ったのを覚えています。後でこのことについて聞いてみると、昔からの言い伝えだったそうです。やっぱり、昔の人の言っていることは正しいということが改めて証明されました。

### 震災当日

いつものように学校に登校しました。卒業式の準備を終え、修了式を行い、卒業式で発表する合唱の練習をしていた最中でした。今まで感じた揺れとは全くの別物でした。校庭に避難してからは、みんなで寄り添って体を温めたのを覚えています。あの時は、とてつもない絆を感じました。津波が来たのを確認してから逃げました。僕は、体育館の裏山に逃げました。自分たちで点呼をとってみんなの安全を確認しました。その後、寺でみんなと合流し、抱き合って喜びました。その日は、役場の三階で一日を過

ごしました。

### 震災後

震災から三日ほど経つと、僕たちは、役場の方と一緒に、ボランティアに取り組んでいました。毎日、線路の上を歩きました。こんな経験も初めてで、足はガタガタでした。それでも、ボランティアをやめることはありませんでした。それは、田老が好きだからだったと思います。

そして今

震災から一年が経とうとしています。田老も少しずつではありますが復興の道を歩んでいます。自分も高校生という立場で、一つひとつ成長していければと思います。

三月十一日

小林優太郎

三月十一日の大地震が来る直前、体育館で卒業式の練習をしていました。これから恐ろしいことが起こるとも知らずに。

午後二時四六分、大地震が田老を襲いました。すぐさま壁により、外へ避難しました。揺れはおさまらず、地面が揺れていました。

何分間か校庭に座りこみ、揺れがおさまるのを

を待っていたその時、海側から土煙があがり、津波が押し寄せてきました。

すぐさま体育館の裏へ走り、階段を駆け上がり、線路に行きました。その線路の山を登り、振り返ってみると、田老の町並みは消えていました。

津波が引き、山を一旦おりて、線路を歩いて田老総合事務所まで行き、他の人たちと合流しました。

その夜は、田老一中生全員で田老総合事務所に泊まりました。食べ物是一個のおにぎりを三等分したものを食べ、寝る時は一枚の毛布を五人で掛けて寝ました。僕のところだけ人数が間に合わなかったため、ゴミ袋を掛けて寝ました。

翌朝、家族の人が迎えに来てくれて、櫻内の集会所に行きました。大平の家には、電気がきていなかったため、小林の家の道路にはがれきがあつたため入れませんでした。そのため、先輩方や同級生と一緒に約半月間避難所生活をしました。

まさか、自分が生きている間に津波がくるとは思わなかったし、避難所生活をするということにも思っていませんでした。

これから僕たちが大人になったときの子ども達に、体験したことを語り継いでいきたいです。もうこんな大災害は起きてほしくありません。

あの日から全てが変わった。あの大地震で発生した大津波で。私は海を憎んだ。私の故郷を壊した海を。

今、私は高校生になって充実した日々を送っています。私の成長と共に田老も復興へ進んでいるように思います。震災があったあの日は、三人で一つのおにぎりを分け合い、次の日から、水や食料に苦しむ日々が二週間くらい続きました。あの時から比べれば今は平和・・・だと思っっています。しかし、震災前のことを考えると、全くもって、よくなっています。

震災が来てから何か月かは部活で練習することもできず、またユニフォームもなくなりました。やっと練習できるようになったのは北高のグラウンドでした。そのうちユニフォームやスパイクなど多くの支援物資が届き、中総体にも出場することが出来ました。本当にさまざまな方々の支援がありました。

私は高校卒業後、就職したいと思っています。まだ目指すものも決まっていますませんが、どんな形であれ、この田老の復興の原動力になりたいと考えています。田老が完全に復興するには、あと一年や二年の話ではありません。何十年、

もしくは何百年という年月が必要になってきます。そこにたどりつくために、今自分ができることを真剣に考えて、これから先を生きていきたいです。

「あの瞬間を乗り越えた私たちなら必ずできる。」

そう言い返し、心の中でつぶやきながら、あの時の輝きを取り戻す日を夢見て、これからも日々精進していきます。

### 震災を乗り越えて

畠山 広生

三月十一日のあの光景、状況は今でも鮮明に覚えています。

その時は、今は閉校して今はない宮古市立田老第三中学校の生徒でした。当時の三中は生徒が少なかつたため、宮古市立田老第一中学校と合併する事になっていました。そのため、大掃除をしていました。その時に東日本大震災が発生しました。

揺れたと思った瞬間に防火扉が閉まるくらい大きさで、歩く事も困難な状態でした。一番最初に思った事はやはり、「逃げたい」ということでした。しかしさっき書いたように、歩く

のが困難でしかも物が落ちてくるかもしれないため、校舎が潰れない事を祈って揺れが収まるのを待っていました。揺れが収まった瞬間に先生方が、

「早く外に出る。」

と大きな声が聞こえた時にはもう勢いよく階段を下りていました。恐怖で足が震えていて慌てて外に出ようとしたため、足がもつれて危なく階段から転げ落ちそうになりました。

学校では大きな地震が起きた場合、駐車場に集まることになっていました。また、地震が発生する数日前に地震が起きた場合の避難訓練が行われていたため、素早く避難場所に避難できました。先生方も今までに体験したことのない地震の規模だったため、慌てていました。地区の人々が避難したり高い場所に逃げて集まった時、数人の

「津波だ。」

という大きな声が聞こえたので振り向くと、あの光景が目に見え込んできました。

山のような津波でした。水しぶきを上げてもの凄いや音と共に押し寄せてきました。避難場所まで来るのではないかと心配でしたが、学校の手前で止まりました。津波は鉄砲水とは違い、引いてからまた押し寄せるためガレキなどを沖に持っていくます。それを何回も繰り返しまし

た。国道は無事だったため、同じ地区に住んでいる先輩の車で家に帰りました。

家が古いため潰れていないか心配でしたが、家も家族も無事だったため安心しました。後で聞いた話では、古い家は割と頑丈な造りをしているため潰れにくいと聞きました。その為、地区の人たちの家は一軒も潰れませんでした。

しかし、電気が使えなく不便で、時季も冬だったため寒かったです。また支援物資がなかなか届かなく、その間地域の皆さんとで炊き出しをして頑張って生活をしていました。その時改めて地域の皆さんとの協力やつながり、そして支え合う事の大切さが身に染みて分かりました。

何週間か経って電気が通った時は嬉しくて仕方ありませんでしたが、テレビで東日本が大変な事になっていることが分かりショックでしたし、原発も危険な状態だと聞き心配になりました。また、用事でバスに乗り田老に来た時は言葉を失いました。壁のように積まれたガレキなどで覆い尽くされていて、田老の面影はありませんでした。田老の万里の防浪堤でも自然の前ではかなわなない事が分かり、自然の脅威がどれほどのものか知りました。

しかし田老の人たちは、すぐに復興に向かって動き始めました。二か月もしない間に小さい物以外をほとんど片づけたため、車などが行き

来しやすくなりました。僕も復興に貢献したいと思い、地区の浜のガレキの撤去をしました。地形が変わっていて作業が大変でしたが、一刻も早く漁業が出来るように頑張りました。

一時期、僕たちは修学旅行に行けないと思っていました。しかし、地域の皆さんの支えもあって修学旅行に行く事ができました。今でも感謝しています。

今の僕がいるのは皆さんの支えがあったからです。今度は僕が支える番だと思つので、身も心も成長して地域の支えになるように頑張りたいです。

## 震災を振り返って

前田 村生

震災を思い出すと悪いことはかりが思い出される。津波は悲しい出来事でしたが、自分としては得るものも多かったように思う。とはいっても、もう津波は来ないでほしい。

あの日以来当たり前前のが当たり前でなくなつた。でもいろいろなところから支援があつて少しずつ生活していくことが出来るようになっていった。

震災後はボランティアにも協力した。自分が

生きていくためには必要だと思つて、物資の搬入のボランティアをした。大変だったけど人のためになることができてよかった。お年寄りも多かったし、何かしなければならぬと思つてスタッフのジャンパーを着て、かごに荷物を入れて運んだ。がれきの上を歩いたり重い荷物を運ぶのは大変だったが、続けてやった。

中学校での生活は楽しい思い出がたくさんある。震災があつたためにいろいろな行事が縮小されて、少しさびしい気持ちになつたが、特に体育祭は思い出深いものがある。校庭のがれきを撤去して、土を入れ替えてもらい、使えるようにしてもらつたので、去年よりも一生懸命やった。

文化祭での合唱も楽しかった。みんなで協力していろいろなことに取り組むのはいいことだと思つた。

みんなと過ごした日々が一番大切な思い出だ。

自分は将来海の仕事に就きたいと思つている。田老の海で働いて、田老がもう一度にぎやかな街にできるように頑張りたい。

## 感謝の気持ち

三浦 誠也

Tシャツを作ってくださった山本先生、ありがとうございました。そして、この大海原Tシャツを買ってくださった方々、本当にありがとうございました。僕は、三月十一日の東日本大震災で自分たちが着ていた服や物以外の物は、津波に流され、大切な人たちも失ってしまいました。そんなかなしい状況の中、他の県の人たちからもらったTシャツや食べ物などでとても元気になりました。あの時のみんなの笑顔は、とても見ていてうれしかったような気がします。ありがとうございました。感謝しています。

東日本大震災では大津波が田老を襲い、僕たち田老一中生も危うく命を落とすところでした。たくさんの人々がなくなっていますが、生きている僕たちはきつと幸せな人たちなのだと思います。だから、亡くなっていった人たちの分まで頑張って一生懸命に生きていかなければならないと思いました。

この震災によりたくさんの人たちから支援をしていただきました。自衛隊の人たちもとてもかっこよかったです。僕も自衛隊に入りたいと思います。自衛隊に入ったならばいろいろな人たちを助けたり、勇気づけたして行きたい

です。

この夢を絶対になえたいと思っています。

## 震災の日自分が体験したこと

皆川 有輝

あの日、自分は学校ではなく自分の家にいました。普通に学校に通っていたわけではないので、その日も少し登校してすぐ家に帰っていました。そして、あの地震が起きました。震度を確認するため点けたテレビが消え、焦っていたのもあり避難警報を聞き逃してしまい逃げ遅れてしまいました。間もなくして津波がやってきました。窓越しにどんどん水位が上がっていくのを見ながら、少しパニックになりながらも念のため電気を使うようなものは高めの所に避難させました。幸い家が壊れることもなく津波はひいていきました。

その後、日が落ちたころ近所の人達が近くの少し高い所にあつた家に集まっていたので、自分もそこであまり眠れはしませんでした。一夜をすごしました。これがあの震災の日、自分が体験した出来事です。

この震災で楽しみだつた修学旅行が一度は断念せざるを得ない状況になりましたが、様々な

人の力によって、行くことが出来ました。教室にまったく顔を出すことがなかった僕に対して、みんなはどのような反応をするか心配でしたが、みんな全く気にすることなく迎えてくれました。そのことだけでも僕の心に残る出来事でした。

そんな修学旅行を通してだいが教室に顔を出せるまでになりました。みんなの気遣いに感謝しています。思い返すと今までたくさんの方が僕を助けてくれたのだと思います。そんな皆さんに感謝しています。

## 大震災からの教訓

村井 旬

避難について

私は体育館裏の山に逃げた。途中、分かれ道があつたりフェンスがあつたりしたが、さすが田老一中生だ。女子や地域の子供を先に行かせた。線路につくと、山へ向かうはしごがあつた。線路は高いところにあるので大丈夫だと思つたが住吉先生が、

「上がれ。」

と叫ぶので上がった。人数が人数なので、私や他の男子は、山の横のほうから登つた。今思



うと、熊しか歩かないような道だった。かなり登り、頂上までいったが、こつこつ時にすべきことを考えて、山本瑞樹君からメモ帳とペンを借り、人数の確認をした。すると、火事だというので、山を下りた。案の定線路は無事だった。その後、線路を歩き総合事務所までいったが、普通に考えて、「スタンドバイミー」以外では見ない光景だった。

その日の夜

その日は寒かった。会議室に全校生徒と先生が入ると、きゆうくつだった。大きい地震が何度もあり、怖かった。これで土砂崩れとかがあったら・・・と考えてたけど、考えると恐怖以外何も感じなかったのでやめた。夜は少ないごはんや毛布を分け合った。生徒は寝返りもうてないほど狭いスペースで寝ていた。家以外では寝られない私は、もちろん寝られなかった。ただ、先生たちは毛布もかけず、足ものばせないようなところに座っていた。やっぱり、体だけでなく、心も一回りも二回りも違うんだなあと思った。朝、ささやかながら、藤村先生と小笠原先生に毛布を貸した。人の役に立てたって事がうれしかった。朝、雪が降っていたが、こんな光景が現代に存在しているのかってくらい悲惨だった。

避難所で

私は、煙内の集会所にいた。百人弱くらいだが、中学生は私を含め四人だった。食事も三食出たし、毛布などもあった。不自由だったのは、集会所の狭さと暇だったこと。あと遊ぶ相手が少なかったこと。ほかに、田老から遠かったことや電波が悪かったこともある。避難所がきゆうくつで、ストレスも溜まるのに発散できないので、いらだってきた。田老で中学生がボランティアをしているのに、手伝えないことや友達と会えない事にもいらだった。三日後か四日後に、父さんと田老に行った。家がないことは分かっていたが、跡形もないどころか、家の破片すらなかった。というより、浪浪堤がないんだから、どれだけの威力かわかったので、まあしょうがないな、という感じだった。その後学校に行った。ザックはあったけど、スポーツバックは持ってきてなかったの、流されていた。ただ、奇跡的にはあちゃん家の二階は、校庭にぼつんとあった。

家を見つけてから

父さんが不動産屋をまわって、アパートを見つけた。一戸建ての二階部分だけだったが、意外と中はよかった。その移った日は、登校日でもみんなに会え、涙がでるほど嬉しかった。本当に、避難所にいる時は友達が恋しかった。先生が避難所に来たりするとうれしかった。

新しく暮らせる場所に移って気付いたけど、自分は生徒会長なのに、何か田老の役にたつたかと考え、何もできていない事に気付いた。たまたまその頃に、親がケータイを買ってくれた。そして、ふと思いついたのが、支援のお願いだった。スポーツメーカーや洋服屋さん、物的支援要請を生徒会長名義でメールを送ってみた。すると、ナイキや、コスミックというTシャツ屋さん、ブイイレブンというユニフォーム屋さんから返信があった。小さなことだけど、少しでも田老の役にたてたかなあと思ひ、嬉しかった。

震災を通して

この震災を通して、多くの物資がきた。嬉しい一方で、申し訳ない気持ちもあった。他人の財産を使っていると考えると、使いづらいいこともある。どうやって恩返しをしたらいいのか分からない。けれどやっぱり、一生懸命勉強したり部活したりすること自体が恩返しなのかなあ、と思ったりする。

また、印象に残ったのは、他人を思いやる力や思いやりの気持ちですごいんだなあ、と感じた。現代は、光ファイバーやGPSなど、とても便利な通信機器があるが、古代から人類が持っている、思いやる力もそれに劣らないと思つた。思いやりも、インターネット同様に、

地球上の多くの人とつながりあうことができ  
る。それが通信機器の発達した現代なら、なお  
さら思いやりを届けやすくなった。

震災を通して、失ったものは大きいけど、得  
たものも大きいんじゃないかな、と思う。人間  
としてさらに成長できた出来事だった。

## 支援への感謝

村田 竜聖

三月十一日に震災があり総合事務所に避難し  
ました。お年寄りを助けました。震災があつた  
夜は寒くて腹が減り、一個のおにぎりを三人で  
分け合つて食べました。あのおにぎりはとても  
おいしかったです。それから、避難所で皿洗い  
や、風呂掃除などのボランティアをしました。  
少し落ち着いてきて宮古北高等学校の校庭・体  
育館を借りて、限られた時間の中で部活動を行  
い、中総体に参加することができました。

また、青い「大海原Tシャツ」を考案し、支  
援してくれた山本先生ありがとうございました。  
とてもすてきで気に入っています。被災し  
た時にこのような支援をしていただけたとは思  
っていませんでした。

山本先生を含め、今までたくさんの方々にお

世話になり、これからも感謝を忘れずに生きて  
いきたいです。

## 震災

山崎 淳那

震災のことを思い出すと悲しいことも多い  
が、中学校での生活は本当に楽しいものだった。

僕たちの中学校最後の年は震災の影響によ  
り、行事なんか規模を縮小したりして少し物  
足りないかとも思つたけれど、この震災があつ  
たからこそさまざまな思いを強く持つてそれぞ  
れの行事に力を入れて取り組むことができた。

みんなで協力して取り組むことが前よりも強  
く思うようにできたと思う。だから体育祭でも、  
今まで一番の思いでやることができたと思う  
し、そんなことを考えていると、田老は津波な  
んかにも負けずに復興していくことができると思  
う。

震災は普段の日常の中で絶対に起こることの  
ない出来事起きてほしくないことだ。今のこ  
の異常な日常は当たり前のことと思つてはいけ  
ないし、過去をいつまでも引きずってはいけな  
いと思う。

一・二年のころの思い出はあまりない。ない

というより、震災によって一緒に流されてし  
まったのではないかと思う。

三年生になってからはとても時間が短く感じ  
た。だからこそ長い中学校生活のほんの一瞬に  
しか過ぎない三年生という一年間の経験を活か  
して生きていくことが出来ればと思う。

僕は将来漁師になりたいと思う。そのための  
努力を怠らず海に生き、海で生活していくこと  
が出来るようにしたい。だからこそあんな出来  
事があつた海だけ、海をこれからも大切にし  
て生きていきたい。

## 大海原Tシャツへの感謝

山本 大成

この度は、私たち被災者のために、この青い  
「大海原Tシャツ」を考案してくださり、誠に  
感謝しております。

このTシャツは、とても思いがこもっていて、  
もらった時はとてもうれしかったです。本当に  
ありがとうございました。

感謝の気持ちはTシャツを購入してくださつ  
た方々へも同じくらいあります。購入してくだ  
さった方々の「がんばれー!!」という思いが  
私たちを支えてくださいました。本当にありが

とうございました。

卒業式を間近に控えた三月十一日、私たちは震災によって住む場所をなくしました。支援物資の搬入のボランティアをがんばりました。周りの人から感謝してもらったことが出来ました。震災で生活が不安定な中、三年生の生活が始まりました。

初めのうちは小学校を間借りしての授業が行われ、何か月かあとに中学校に戻っての勉強が始まりました。

部活動もなかなかすることが出来ず、中総体でもあまり良い結果を残すことが出来ませんでした。

また、修学旅行にも行くことが出来ました。行くことが出来ないと思っていたのでとても楽しくあつという間に三日間が過ぎていきました。

たくさんの思い出が残る三年間となりました。この経験を生かして強く生きていきたいと思えます。

三月十一日

阿部 侑華

あの日、私たちは卒業式の歌練習をしている時、大きな地震がおこりました。私たちは先生方の指示で校庭に出ました。まだ大きな横揺れは続いていました。私は、まさか津波が来るとは思ってもいませんでした。揺れがおさまらず、地鳴りか分かりませんが、「ゴゴゴ・・・と聞こえたのを覚えています。その直後、だれかが

「津波だー!!!」

と叫び、振り返って見れば、海の方は黒い砂ぼこりがあがっていました。私たちは、全力で山に登りました。私は山を登る途中、保育所の子供たちと一緒にいた千咲さんと引つ張りあげました。

山に登ると、中学生全員はいませんでした。体育館の後ろの山に逃げたと聞きました。山の上から見た田老の町はがれきの山となっていました。校庭にもがれきは押し寄せていました。だれかがさけばなかったら、私たちは死んでいたかもしれせん。そうして、しばらくすると、頭の上からは灰が降ってきました。遠くからは赤く大きな炎が見えました。

私たちはその晩、総合事務所に泊まりました。余震はまだ続いていました。しかも、とても大

きな余震でした。ごはんはおにぎりが配られ、一個を三人で分けました。それに毛布も配られました。その毛布は六人で使いました。

次の日の朝、おにぎりが配られました。この日は一人一個でした。ご飯を食べた後、父と母が迎えに来てくれました。

私の家は、まきストープがあり、寒くはなかったです。水も出ました。電気はその日の夜は八時ごろについたらしいです。

私が、この震災で思ったことは、「大きな地震がきたら高い所に逃げる」と、「一番は「人の優しさ」「思いやり」「助け合い協力する」ということです。自然にはかなわないけど、人間ですばらしい、すごい、人間でよかったと思いました。

津波

石川 美幸

忘れなくても忘れられない・・・忘れた方が楽だろうけれど、忘れたら忘れたで自分の心の中でも生きていけない。忘れるのが怖いと思うときもある。

楽しい事なら辛くないのに・・・津波って本当嫌だ。

三月十一日は、体育館で卒業式の歌の練習をしていました。大きな地震が来た時、壁側に寄りました。男子は壁側に寄るのが早くておどろきました。校庭に逃げても大きな地震は止まりませんでした。そして

「逃げるー。」

と言う声が聞こえたけれど、私は何が起きているのか分からず、混乱していたところを、友達に手を引っ張られて山の方に逃げました。木をたどって必死になって登りました。なかなか上にたどりつかないから途中であきらめようと思いました。でも先輩が、

「大丈夫？あと少しだよ。」

と優しく声をかけてくれました。

上にたどりついたら、たくさんの方が避難していて、泣いている子もいれば家族を探している人もいました。

私は、涙は出ませんでした。でも、足はガタガタふるえていました。

弟すら見かけなかったので、家族は助からなかったのかなと思っていました。でも、お兄ちゃんとお父が来たときにはびっくりしました。そして、弟も無事ということが分かりましたが、姉と母は行方が分からないと言われてやっぱりダメかなと思っていました。

次の日に外を見たときは、言葉が出ませんで

した。見たことがない光景があり、町はぐちゃぐちゃでした。

津波って予想外のことが起きるので大嫌いなと思いました。

三月十一日

伊藤 三葉

東日本大震災が起きた時、私達は学校にいました。

地震があつて校庭に逃げました。窓のガラスは落ちそうなくらい揺れ、地面は波うつっていました。しばらくしてから先生が、

「逃げるー。」

と言うので、何がなんだか分からなかったけど、とにかく坂を登りました。道という道も無かったので滑って転んでいる人もたくさんいました。小さい子が登れずにいたので助け合いました。やっと坂を登り、高い所から、校舎のほうを見ると、さっきまでとは違い、がれきや海の水が目に入りました。さっきまで普通だった田老の町も海の水が押し寄せ、すべてが水になっていました。あつという間に田老の町は無くなりました。逃げてきた人を見ると、泣いている人と無言で田老の町を見ている人達ばかり

でした。笑っているひとなど一人もいませんでした。私はその時津波のおそろしさを知りました。人の笑顔を無くし、田老の町を無くし、全てが終わった気持ちになりました。その後、田老一中の裏山から火がつき、暗くなった田老にかりがついたように燃え始めました。津波に火災・・・最悪でした。

寒くなり、みんなが体を寄せ合い温まりました。その夜から田老総合事務所の一部屋を借り、全校生徒で泊まりました。毛布も食べる物も無く、みんなで静かに休んでいました。でも余震は何度もくり返されました。

それからしばらく、皆こわかったと思います。男子の何人かは先生と学校方面に行きました。震災後、田老一中男子は、働き、がんばっていました。すごく感動しました。

そんな震災があつてからもうすぐ一年です。一年経った今もがれきがたくさんあり、田老は元気がありません。あの時の怖さはまだ少しあるけれど、復興のためにがんばりたいと思います。もう二度と津波が来ない事を願います。

## 震災について

久保田祐実

大きな地震がありました。私たちは、とりあえず校庭へ避難しました。この時、私は絶対に津波が来ると思いました。でも校庭にいれば大丈夫だと思っていました。今思えば、あの時すぐ山に避難すれば良かったのだと思います。しばらくして先生が、

「逃げろ！」

と言つので、何で逃げなきゃいけないんだろうと思いつながらもやまの近くまで走りました。そして海の方を見ると、波は見えなかったけど、砂みたいなのが舞っていて、その時、津波が来ているのだと気づきました。私は公民館側の山を登って避難しました。制服を着ていたのでスカートが木にひっかかりたりして、すごく大変でした。上に着くと、友達がいました。私はこわかったのか悲しかったのか、自分でもわからなかったけどずっと泣いていました。クラスみんなが集まらなかった時は、本当に不安でした。でも、いつまでも泣いていたって仕方ないので、何が自分に来ることはないか探しました。その時、私の周りには、たくさんのお年寄りがありました。座る場所もなかったの、友達と一緒に、ブルーシートを広げて、そこにお

年寄りの方々に座ってもらいました。

その後、総合事務所に行きました。そこでコップ一杯のお茶をもらいました。いつもならすぐに飲んでしまうけど、その時は飲むのがもったいないと感じました。なので、少しずつ少しずつ、大事に飲みました。そのあとは、ずっと友達と話していました。思ったより、落ち着いていました。きっと友達が一緒にいたからだと思います。夜になっておにぎりが届きました。三人で一つだったけど、すごく嬉しかったです。毛布も六人で一枚だったけど、毛布があるだけ良いと思えました。今までは、食べ物や毛布のありがたさをあまり感じなかったけど、この時にそのありがたさを感じる事が出来ました。私はその日のうちに家族に会うことが出来ました。みんな無事だったので本当に良かったです。でも、周りの人の中にはまだ家族に会えない人もいたので、それを聞くとすごく不安でした。私は家族が無事だったけど、家が流されてしまいました。お母さんから、その事を聞いた時は信じられなかったです。まだ自分の目で確かめていなかったので、心のどこかで家に帰れると思っていました。そんなことを考えていると、なかなか寝ることが出来ませんでした。

次の日は、早く目が覚めました。目が覚めると、前日の出来事を思い出して、頭の中で整理

していました。そして、ようやく理解したような感じでした。ずっと頭では分かっていたんですが、それを信じたくないという気持ちがありました。でも、もう冷静になっていて、その事を受け入れていました。

午前中のうちに、お父さんがむかえにきてくれました。そして、外に出るとそこには、今まで見たこともない、田老の姿がありました。あんなにたくさん家があったのに、きれいになくなっていました。もう言葉が出ませんでした。変わり果てた田老を見るのは、本当につらかったし、悲しかったです。

この震災を経験して、もう二度とこんな思いはしたくないと思えました。私は津波のことを知っているつもりでした。でも津波がどんなに恐ろしいものかまでは、正直よく知りませんでした。きっと津波を経験しないと、分からないと思います。でも今は映像などがたくさん残っています。津波を知らない人のためにも、この映像などを見て知ってもらいたいです。もう二度と津波で悲しい思いをして欲しくないと思います。

## 震災を経験して

佐々木聖奈

三月十一日、私たちは明日の卒業式のため、一生懸命、合唱を練習していました。大きな地震が、体育館を揺らしました。その場に座り、どんどん強さをます揺れに、壁に寄る事を言われました。私は歌ごに夢中になってしまい、一つひとつの行動が遅くなってしまいました。外へ逃げることを言われ、友達と手を繋ぎ校庭へ逃げました。友達と輪になり、揺れる校庭にじっとしていました。保育所の子供たちも避難してきました。

「逃げろー」

誰かが叫びました。海の方を見ると、大きな波が大きな音を立て、田老の町を煙を立てながら襲ってきた。私は中学校から見て正面の山へ逃げた。山は雪でどろの状態でした。草をつかみ木をつかみ、とにかく一杯の力で逃げました。後ろを向くと、友達が落ちそうになっていました。山の頂上へ着くと、たくさんの方がいました。いとこも兄弟もちゃんとして、ほっとしました。お年寄りの方々もいました。私は自分に来ることを考えました。田老の方々と協力し、お年寄りを安全な場所へ座らせ、ホッカイクを渡したりしました。また、周りにいた後

輩や友達を励ました。自分の事より周りを支える事を震災当日は心掛けました。山へ避難する時に仲間とはぐれてしまいました。でも生きていると信じていました。小学校のほうや、山の奥のほうからたくさん仲間が、私たちがいた所にきました。中学生全員が無事でした。学年ごとに集まり、変わりはた田老を見つめていました。男子がたくさん励ましてくれました。そんな男子がかっこよく見えました。何時間も山にいました。空が暗くなり始めた頃、総合事務所に泊まる事になりました。移動するときに、見たこともない田老全体を見ました。家は壊れ、電信柱は倒れていました。総合事務所に着き、友達をたくさん励ました。おにぎりは三分の一で、空腹を凌ぎました。

朝になり、景色を見ると雪が積もっていました。それよりも田老の町はなんにもなくなっていました。おにぎりは二、三個配られました。親が総合事務所に来てくれました。会えてうれしくて泣いてしまいました。ふれあい荘に行く事になりました。私の友達、兄弟四人と。レールを歩き、危ない道を歩きやつこのこと着きました。くつはどろだらけでした。中へ入ると避難者でいっぱいでした。四人同じテーブルに座り、たくさんのおにぎりを食べました。テレビで津波を目にしました。ものすごい迫力でした。

時間がたつにつれ、ふれあい荘もいっぱいの人でした。後輩や友達が来ていました。いろんな話をしたり、ゲームをしたり、疲れからか、いつの間にかみんな寝ていました。起きた時には夕方でした。夜は同じ部屋にみんなで寝ました。朝になり全員分のふとんをたたみ、おにぎりともそ汁を食べました。時間がたつのがとても遅かったです。するとお母さんがいきなり、

「じいちゃんがない。」

と言いました。嘘だと思いました。突然言葉頭が真っ白でした。私の家は小堀内だし、そんなことはないと思っていました。家に帰る事になったのですが、田老は通行止めとなっていたので、遠回りをして家に帰りました。帰ると、いとこがたくさんいました。家が流されてしまったからです。食事はしばらくパンの生活でした。お菓子はみんなで分け合いました。落ち着いてきた頃、いとこ全員と、祖父を探すために小堀内漁港に何回も行きました。結局一年たった今でも見つかることはありませんでした。

でも私は、友達、親戚、たくさんの人たちに支えられ、つらい事も乗りこえられる事ができたと思っています。

今後、この田老を被害のない地域にしてほしいと思います。

三月十一日から・・・

清水 愛里

三月十一日、あの時は体育館で卒業式のために合唱練習をしていた。するとグラグラ揺れ始め、大きな揺れへと変わった。私は伴奏をしていたので、荒谷先生の指示でピアノの下にいたけど、みんなは壁に寄っていた。その後女子から外に逃げた。校庭にみんな並んで座っている時、泣いている人もいたし、ガラスがまだ揺れていた。上着を着ていなかったのですごく寒かった。校庭にいる時には、大きな津波が来るとは思っていなかったから、自分の家の中の物が倒れていないかなどの会話をしている人もいた。それから何分たったかは全然記憶にないけど、誰か男の人が

「逃げる。」

と叫んだ時、校門のほうを見たら土煙がすくくて、家や電柱が倒れていくのを見た。みんな急いで走っていて、私は公民館のほうの山を駆け登った。登っている途中、校庭を見ると、もう波がおしよせて来ていて、がれきや車があり、海のようになっていた。

お墓があるところに着いた時、みんな泣いていたし、野球場のほうはそこに家があったことすら分からなくなっていた。とても寒くて怖

かった。お年寄りの方や小さい子たちも避難していたし、火事のせいで黒い灰とかが降ってきたことを覚えている。違うところへ逃げていた人と合流した頃、上空にヘリコプターが飛んでいた。

その後、総合事務所にみんなで行った。毛布を六人でかけていて、紙コップにお茶をもらって飲んだ。飲まないといけないと思っていたけど、のどを通らなかった。夜には一個のおにぎりを三人で分けて食べた。そして、みんなで寝ることになった。全然眠れなくて夜がすく長く感じた。みんなで横になっている時、時々余震はあったけどあまり不安な気持ちではなかった。

翌日、時間の感覚が変でなにがなんだか分からなかった。おにぎりを二個くらいもらったけど、一個の半分しか食べられなかった。朝になったので親が迎えに来る人がいて、総合事務所にいる人がだんだん少なくなっていた。火事がまわってくるというところで外に出たり、お寺に行ったりしていたけど、結局総合事務所に戻ってきた。家族とは一度会えたけれど、先に北高のほうに行ってしまったのでもう一度会えたのは夕方だった。北高にはたくさんの方が避難していた。おにぎりなどももらえたけど、余震が来るたびに体育館が揺れていたし、警報が鳴っ

ていたのでとても怖かった。でも、一日目の時よりはゆっくり眠れた。

朝が明け、宮古北高の隣の北星館というところに移動して、そこで私は一週間くらい避難していた。

避難生活は不便なところもあったけど、この津波が来てから今までのことはずっと忘れないようにしたい。

### 震災にあつて学んだこと

畠山 映美

私は、東日本大震災のとき、統合する前の田老第三中学校にいました。その日私たちは、お世話になった教室などの清掃をしていました。私の担当は図書館でした。そして地震がきて少しの揺れから大きな揺れに変わり、本棚から本が落ちて停電しました。

やがて地震がおさまってから私たちは駐車場に集まり高台である墓地まで走っていきました。走っている途中、キジの声はしますがカラスやスズメの声はなく、とても静かでした。

墓地で避難していたら水沢の保護者が来て、水沢の児童・生徒を乗せて帰りました。それから何分もしないうちに遠くから黒い波が見えた

のです。その時、私や周囲の人たちはあ然としていました。いったん落ち着きを戻し、近くにある家のトイレをかり終わつたその時、消防団から、私の父が少しけがをしたとの情報が入りました。私と母は家まで歩いていました。その途中で父を発見しました。父は近所の人からけがを治してもらっていました。それから無事を確認した後、家まで必要な物を取り、墓地に家族で戻りました。

日がだんだん暮れてきて、泊まる場所は水沢の公民館になりました。グリーンピアの話もありましたが、そこには学校の先生たちが行きましました。それから三日後、一日だけ摂待に戻ることができました。摂待の津波は、学校の裏のプールの横まで来ていました。それを見たとき、私は津波の怖さを知りました。

その後、私は三中の先輩と二人で、地震によって落ちたものなどの整理・清掃をしました。夕方にはまた、水沢の公民館に帰りました。

それから二日くらい避難しました。その間は、お世話になっていた消防団の人たちにおにぎりなどの食事作りもしました。

摂待に戻る前日、私は風邪をひいてしまいました。薬を飲み、翌日雪が降っている中、消防団の人に乘せられて家に帰り、睡眠をとったら治りました。

約一週間後、田老三中の校庭にアメリカのへりがきて、衣類・食料・薬などの支援物資を持ってきてくれました。私たちはそれらを校舎まで運びました。それらは、摂待のセンターやグリーンピアに運ばれていきました。その時、世界はつながっていることを感じました。海を越えて私たちを支援・応援してくださいっているんだ、と感謝の気持ちでいっぱいになりました。

そんな日々を通して、私は三年生になり、とうとう卒業となりました。震災から一年がたとうとしています。私に何ができるかわかりませんが、復興に向けてできることをやっていきたいと思えます。そして大きな地震が来たときには、本当に必要な物を持ち高台まで逃げて、自分の命を大切に生きようと思えます。将来が明るく平和な日常に戻れますように頑張りたいです。



## 東日本大震災津波

山本 千咲

三月十一日の東日本大震災が起こったのは、体育館で明日の卒業式のための合唱の練習をしていた時でした。先生の外に出るとい言葉が聞き、わけがわからないまま校庭にでると電線がおもちゃのようにゆれていました。校庭に出たら数分たったころ、茶色の波がおしよせてきました。その時はなにがおこったのかもわからないまま公民館の裏の山を田老保育所の子たちと一緒に登りました。後ろを見ると田老一中の校庭は波がきたというより、がれきが山になっていました。山の上に登るとたくさんの家が見えています。山にはたくさんの田老の方たちが避難していません。なかには病院から逃げてきた車いすのお年寄りなどもありました。山に登ってしばらくすると遠くで起こっている火事のけむりが真上を飛んでいました。空と波の色がすべて一色に見えました。この日は田老の総合事務所に泊まりました。

次の日になると昨日のことは夢ではなく現実なんだなと思いテレビの世界のような光景を見てこんな身近なところでこんなことがおこってしまうのだと思いました。家に帰る時には山を



通つて帰りました。途中、白い布にくるまれて  
いる人が運ばれているのが見えました。家に  
帰つても家の前はがれきだらけで、水も電気を  
つかない日が一月ほど続き、水は田老の山の  
ほうにある川に毎日くみに行き、せんたくも川  
にいきました。普段経験しないようなことをい  
ろいろやりましたが、これからの人生に活かし  
ていきたいと考えています。

## 大震災について

山本 麻央

あの日、私達は卒業式の歌の練習をしていま  
した。その途中で強い地震に襲われました。私  
達は校庭に避難していました。でも先生の  
「逃げろ！」

の一言で、全員が一斉に走り出した。私は  
訳が分からないまま公民館の方に逃げました。  
登っている途中に、男の先輩と女の先輩が  
「大丈夫？」

と手を貸してくれました。半分くらい登つて、  
ふと振り返つてみると、校庭には波が押し寄せ  
ていて、車などがたくさん浮かんでいました。  
私はもつこの世の終わりだと思いました。登り  
終わった後、みんなが泣いていました。私は最

初、泣いているみんなを

「大丈夫だよ。」

となぐさめていましたが、泣きながら抱きつい  
てきた子にもらい泣きをしてしまいました。途中  
で体育館の裏に逃げた人達とも合流し、また泣き  
ました。総合事務所に避難することになり向かっ  
ている途中、道にはがれきばかりで、家は残っ  
ていませんでした。総合事務所に着いてからは、  
友達と固まっていました。余震がある度みんなで  
手をつなぎ、寄り添いあいました。お茶をもらっ  
たり、一つのおにぎりを三人で食べたり、一枚の  
毛布を六人で使いました。でもちゃんと眠れず、  
何度も目が覚めてしまいました。

次の日もらったおにぎりを食べて待つていた  
ら、父が私を迎えにきました。私は思わず泣き  
ながら抱きつきました。その後、いとこ達に会  
いに、小学校に向かいました。そこで兄と会い、  
また泣きながら抱きつきました。兄はそんな私  
を見て、優しく頭をなでてくれました。小学校  
でいとこ達と会った後、父と兄と三人で線路を  
歩きました。そこから田老の町を見て、私はあ  
然としました。家はあとかたもなくなっており、  
駅などの建物も悲惨な姿になっていました。道  
路も泥だらけで、とても歩けるような状態では  
ありませんでした。私の家まで波は来なかつた  
ので、家は無事でした。壊れたものもありませ

んでした。家に帰ると、母が泣きながら私を抱  
きしめました。私は思わずもらい泣きをしてし  
まい、二人でしばらく泣いていました。しばら  
く泣いた後、私は着替えをして、茶の間の石油  
ストーブで温まっていました。しばらくすると、  
父がいとこ達を家に連れてきました。そしてみ  
んなでお昼を食べました。それで、まだ警報が  
出ていると知り、みんながふれあい荘に避難し  
ました。余震の度、建物が大きく揺れて怖かつ  
たです。一週間くらいふれあい荘にいましたが、  
家が残っている人は帰れと言われたので、仕方  
がなく家に帰りました。でも家は、水も電気も  
通っていないとても不安でした。

こうした経験をし、私たちは支援をいただき、  
今は元気に生活しています。本当にありがとう  
ございました。

## 津波の日

和井田まみ子

三月十一日、大きな地震が来て私達は、体育  
館から外に逃げた。

地割れしそうなくらいゆれていて、もしかし  
て津波・・・とふと思いました。でもまさか自  
分が生きてきた中で津波が来ると思わなかつ

た。夢かと思うくらいあわただしかった。

気がついたら、目の前の山に友達と走っていた。そして、なんとなくうしろを向きたくなかったし向けなかった。山に登ってる時、うまく登れず一瞬うしろにふり向いてしまった。すると、けむりみたいな黒いのがおしよせていると思いい、急いで登った。山に登り下を見たら、ありえない風景が目の中に映った。みんなは泣いているし、たくさん人がいるし、なんで？って最初思っただけ、時間がたつほどに今何がおこっているのか分かってきて悲しくなっていた。

そして家族を心配している人がたくさんいた。でも今は、家族を信じようと思った。そして役場に行って、一夜を過ごした。

おにぎりが届き、みんなで半分にして食べた。とても温かくてうれしかった。

そんな中でも大きい地震がたくさんおきて嫌だった。

朝になりみんな帰っていき自分も帰ったが、家にもいってしまっていた。

震災から月日が過ぎ、今こうやって生活しているのも、たくさんの方の支援があったからだと思います。

本当にありがとうございました。

## 弟の誕生日

田澤 凱暉

三月十一日は、小学校二年生の弟の誕生日だった。いつも弟の誕生日には、みんなで歌を歌い、ケーキやお寿司を食べていた。この日も母が、「今日は綺麗な誕生日だ。」と言うと弟はにこにこして、僕も嬉しくなった。しかし、午後二時四十六分、大きな揺れがおそってきた。僕は卒業式の練習の最中で中学校の仲間と一緒に学校の裏山に避難した。しばらくたつと大きな黒い津波が押し寄せてきた。家や木や車が波にのみ込まれ流れてくるのが見えた。怖くて泣いている人もいた。家族のことがとても心配だった。

次の日の朝、父と弟が、僕が避難していた総合事務所に来てくれた。弟も祖母と一緒に小学校に避難していて無事だった。僕は再会できて「助かって本当に良かった。」と父に言った。

弟は自分の誕生日のことなど一言も言わなかった。母とは三日たって初めて会うことができた。

地震が起きた時、母は弟の誕生日のケーキを買ったために、宮古市役所を通り、ケーキ屋に向かっていたのだった。母は疲れ切った様子で命が助かった。」と言つづばやいた。僕は胸がド

キドキして何も言うことができなかった。弟の誕生日は、結局中止になってしまった。今回の津波で、祖父が亡くなり、悲しいことがたくさんあった。でも仮設住宅に入り安心して生活ができるようになってきた。

来年こそは弟のために、誕生会をしたい。

## 東日本大震災を通して

上山 凌

三月十一日、二時四十六分日本列島を大きな揺れが襲った。僕ら田老一中生は体育館から校庭に避難し、皆で円を作り寄り合って暖をとった。そんな中、遠方で不気味で背筋が凍るような不快な音が聞こえ始めた。数分後、どす黒い波が見えて僕らは走って逃げた。逃げる際に避難していた保育園児を抱えて逃げた生徒、ご老人をおぶって走った教員もいた。

このような状況で自分の命を優先するのではなく、知らない他人の命を優先し助けたいと思いい、体が動く方は素晴らしいと思う。そして、避難した山の上から見た田老はまるで地獄だった。何もなくて、僕は言葉を失った。泣き崩れる生徒もいた。そんな状況でも泣いている者を慰めたりする者がいた。大声をあげて点呼をと

る者もいた。急な斜面で足を滑らせる者がい

ば「掴め」と言つて手を貸す者もいた。みんな、協力していた。そして、誰一人マイナスイな言葉を口にしなかった。家族が心配な人もいるし、思えば思うほど恐怖が生まれる中だったが皆下を向かず前を見ていた。そう、田老一中生は皆強いのだ。明治、昭和と大きな二つの震災を乗り越えた田老の先人たちのロイヤルが僕らに引き継がれているということだ。だから、僕は思う。あの悲惨な状況の中でも僕らは腐ることなく前を向いて仲間と共に協力し助けあい乗り越えた。震災の規模は最大だったが、僕らの協力し合う力の方が最も大きかった。だから、たとえこれからどんな事が起きようと一中生はへこたれることなく協力し合い乗り越えられる。そんな力を持っていて、協力し合うことの大切さを学んだ僕は社会に出てこれからもその力は役立つし活かすこと出来る。なぜなら僕らは千年に一度の大震災を乗り越えた素晴らしい勇者だからだ。

また、「大海原Tシャツ」製作のお話を受けた時はうれしく思いました。私は生徒会執行部としてTシャツのデザインを考えました。デザインを考えるのは大変でした。このTシャツが三・一一を忘れずに、後世に伝えるため、そして田老の復興と未来に願いを込め、着る人が一

人でも多くと思い、デザインを考案しました。そして、このTシャツに込めて僕らの思いを美術の先生がうまくまとめてくれました。完成品のTシャツを見たときは、感動しました。今では、小学生や中学生、たくさんの人が田老を背負っています。このTシャツを着る人がもっともっと増えてほしいです。

このTシャツは、僕たちの文化祭でも活躍しました。文化祭のテーマは、 *voyage* 「航海者達」だったので、大海原Tシャツはテーマとぴったりでした。大海原Tシャツに書かれているように、果てなき大海原に僕たちは進み、あきらめずにひるまずに僕たちは前進していこうと文化祭で誓い、僕たちの絆も一層深まり、Tシャツの存在もさらに大きくなりました。

このように、大海原Tシャツには、たくさんの人の思いが込められていて、僕たち田老の復興の糧となっています。だから、この素晴らしいTシャツの存在をもっと多くの人に知ってほしいし、着てもらいたいと思っています。

最後にお願ひですが、このTシャツを田老の方々に着ていただきたいので、「たるちゃんハウス」で販売していただけたらな、と思っています。また、売り上げの一部を義援金にして、宮城や福島に送ってほしいです。

この度は本当にありがとうございます。

## 東日本大震災

榎本 璃空

最初は津波が来るとは思っていなかったです。体育館で歌の練習をしていると、突然大きな地震が起こりました。まず校庭に逃げました。僕は津波が来るわけがないと思っていました、すぐ止まるだろうと考えていました。でも予想していたことは、はるかに違いました。先生が突然、

「逃げる。」

と言い、なんのことかと振り返ってみると、すぐそこまで津波がきていました。僕は全力で走り学校の裏まで逃げました。そしてしばらくすると、違う方向に逃げた先生たちがむかえにきてくれてよかったです。そのまま役場まで行き、そこで一晩泊まりました。次の日帰っている途中で外を見ると雪が積もっていました。大変な出来事でしたが、この体験をいかしていきたいと思います。

十年後の自分は夢を叶えているかもしれないし、叶えていないかもしれない。しかし、自分の夢が叶うかどうかではなく、叶えてみせるという意気込みを持って生きていきたい。

そのために、まず勉強をしっかりと頑張り、高校に入り立派な大人になることを目指したいと

思います。僕の夢は料理人になることです。

## 震災を通して

加藤 利輝

こんな大きい震災に遭うのは、もうこれぐらいしかないと思うし、これから先に役立つこともたくさん学べたと思います。

この出来事から一番思うのは、命の重さだと思っています。震災前まで、近所で暮らしていた人や話したことのある人、顔見知りなど、身近な所でたくさんの人々が、亡くなりました。本当に命はとても重いものだと思っただけ、しかしそれは今回の震災で簡単に、一瞬にして奪われてしまうようにとても弱いものだとすることもわかりました。

震災で亡くなった人たちはたくさん残り残したことがあったと思います。だから震災で亡くなったたくさんの方々の命のためにも、自分たちが、生きていることに感謝しながら、毎日毎日、その日やり残したことがないように今この瞬間死んでしまっても悔いの残らないように、今何が大事で何をやりぬかなければいけないのか、よく考えながら、これから生きていきたいと思えます。今まで当たり前だった事の大切さを学ばされました。

身近なところでたくさんの方々が自分のさまざまなことにかかわり、接してくれているということを実感しながら、人のかかわりを大切にしていくことで、命を大切にしていきたいと思えます。

## 復興にむけて

小林 和史

少し前までは、正直もうここには住みたくないと思っていました。でも今になっては「少しでも田老の復興の役に立ちたい」「田老の復興に関わりたい」と思うようになってきました。

なぜかというところ、正直、行くこと難しいだろうと思っていて、修学旅行に行くことが、多くの方々の応援によって可能になったからです。修学旅行に行くと楽しかったことはいっぱいあるけど、一番楽しかったのは、やっぱりディズニーランドに行ったことです。キッズニアの職業体験も楽しかったです。二泊三日だったけど、とても楽しかったです。

修学旅行後、中学生生活最後の体育祭や学習成果発表会もとても思い出に残るものになりました。

特に体育祭では、早稲田大学の応援部の方々

が来てくださって、とても盛り上がりました。人を支援したり、応援するというのがこんなに人の心を感動させるものかとあらためて気づかされました。

実際に僕が街の復興に関わり、役にたてるかは大人になってからでないと分かりませんが、もしそのような機会があれば、積極的に参加したいと思えます。

## Tシャツからの絆

小林 凌

あの日の揺れはなんか、なんかいつもと違う揺れでした。大きかったのもあるけど、いつもより長い揺れでした。まさか津波が来るなんて思ってもいませんでした。

あの日、僕たちの町が姿を変えました。僕たちの生活も変わりました。あの日はとても大変、いや大変でもんじゃなかったです。それでも、Tシャツを作ってくれた山本さん、Tシャツを購入してくれた皆さん、ありがとございます。休日によくそのTシャツを着ています。東京のほうでも着ている人がいるようで、そのことを思つと、なんだかつながっていると云いますが、なんだか一つになった、そんな気がします。

今の自分の気持ちとしては、皆と別れたくないと思ったり、高校生に早くになりたいと思ったり、そんな感じの複雑な気持ちです。

意見というか、願いとしては気軽にスポーツができる場所、施設ができればいいなと思っています。

僕はうまく文章にできませんでしたが、本当に感謝しています。

本当にありがとうございました。

東日本大震災を振り返って・・・

齊藤 和志

三月十一日、あの時僕は、体育館で卒業式に歌う歌の練習をしていました。みんなのボールテージがマックスになり、次で終わりにするために、村井旬君が指揮を始めました。その時、最初の小さい地震に気付いたのは、鳥井将太君です。その後、徐々にみんなが地震に気付き始めました。その瞬間に何か爆発したような強い地震が僕たちを襲いました。あの時は、とても恐かったです。さらに地震は激しさを増してきました。その地震で、校庭に設置されているライトが折れてしまつくらい揺れていました。僕の記憶では、地震の途中で津波が来たと思

ます。

その時、僕はもうすでに走り出していました。僕は津波が来るという恐怖で走ってきた道を振り返り、状況を把握することができませんでした。

僕は、赤沼山の方に逃げました。赤沼山に逃げる道はとても混雑していました。しかし、それをかいくぐり、逃げました。最終的に赤沼山の頂上まで行きました。そこから見た光景は最悪でした。なぜなら、家をひとつも確認することができなかったからです。それから僕たちは総合事務所に向かい、そこで家族と再会しました。

その後、宮古北高校の避難所やグリーンピアの避難所を転々としました。そうしているうちに、あつという間に一年が経ってしまいました。今回の東日本大震災で、僕は一人ひとりが協力する事の大切さや津波がきたら高台に早く逃げるということのを再度確認することができました。

震災とボランティア

澤口義登夢

津波が押し寄せてきたときに、体育館の裏の山のほうに行つて、線路のほうまで逃げていき、その後、まだまだ津波はきたらしく、「上に登れ。」

と誰かが言ったようで、線路の上の山に登りました。しばらくして波が落ちて着いてから、山を下りて線路を歩き、暗いトンネルの中を小笠原先生を先頭に歩き、総合事務所にとどり着きました。それから、中に入って休んでいました。みんなは疲れているにもかかわらず、無理に笑顔を作っているようで、心が強いんだなあと感じました。そのままそこで一夜を過ごし、次の朝、いきなり呼び出され、家が無事な人は歩いて帰されるらしく、歩いて線路を歩き、途中から消防車に乗せられて家まで帰りました。家に着いたときはようやく帰ってこられた嬉しさで、

「よかった。」

としか言えませんでした。家には家族もみんないて、ほんとによかったです。ただ、電気や色々なものがいつもどおりにはいかない日々が続きました。ふとある日、ボランティアを中学生がやっているという話を聞き、自分もやるつもりだと思ひ、近くに避難していた黒田瑞希くんとい

緒に歩いて総合事務所まで行きました。そこには、村生くんや大成くんがいて働いていました。だいたいの仕事は物資の運搬で、ほとんどが肉体労働でしたが、家にいるよりは充実していましたし、物資を運んでいった先でいろいろな人たちから

「ありがとう。」

と言われたときは良いことしてるなあって思えてきます。次の日からは、中島弘喜くんも一緒に行ききました。この生活を三週間ぐらい続けました。みんな本当につらくて、悲しくて、疲れているはずなのに田老のために頑張っていて凄いです。本当に心の底からそう思います。並みのひとじゃそんな風にはできないんじゃないかって思います。

うまくまとめられないのですが、自分もこれからもつと復興に携わりたいと思います。



## 震災後の文化祭

鳥居 将太

規模縮小となった文化祭は醍醐味である劇の発表がなくなっていました。本来ならば劇もやり歌も歌うはずだったのが、歌だけになってしまいました。歌が好きな自分にとって歌は歌うことになって良かったのですが、劇が好きなたらとってはなくなってショックだったと思います。自分も劇がなくなりなにか物足りない感じでした。

練習する期間も短くなり心底完成するかどうかが不安でした。でも完成させなければならなかったので、学年一丸となり頑張りました。短時間で完成させるのはとても大変でしたが、みんなが歌えるようになっていくのは、指揮を振る自分としては楽しかったしやりがいがありました。

文化祭前には完成して良かったです。そんな自分たちが歌った曲はumpoolさんの「証」でした。とてもいい曲で僕らが歌うには少し難しい曲でしたが、練習していくうちに少しずつ歌えるようになっていきました。文化祭当日は他の学年の発表も見られて良かったです。

他の学年も期間が短い中でよく完成させたなあと思いました。自分たちの学年合唱も成功

して良かったです。とても楽しく歌えて感動でした。全校合唱も完成して良かったです。指揮者がすごいので完成すると思いました。

今回の文化祭は規模こそ小さいものだったけど中身が濃いものにできて良かったと思いました。

## これからの自分

松本 航大

僕はこれからも世界との絆を大切に生きていこうと思います。この震災を通じて支援物資や義援金などをいただきました。そのことに感謝して恩返しをしていきたいと僕は思います。そして、田老の復興を目指して町のみなさんとの「絆」を大切にしたいです。

震災の時僕は総合事務所に避難していました。ものもなかなかなかったので、支援物資に頼る生活でしたが、がれきで道がふさがっていたので離れたところにおかれた支援物資を持つてくる必要がありました。そこで、その物資の運搬を手伝うことにしました。だれかがその作業を手伝わなければ何も届きません。また、足の不自由になったおばあさんの移動なども手伝いました。自分が生きていくためには、そ

た仕事をしなければいけなかったからです。ス  
タッフのジャンパーを着て、様々な作業を一生  
懸命にやりました。みんなに感謝してもらったこ  
とが出来てとてもよかったです。

僕がこの震災を通して学んだ事は「大きな  
地震がきたら、すぐ避難する」ということです。  
この言葉を忘れずにこれからの人生を生きて  
いこうと思います。そして、自分はこの経験  
が良い経験になったと思っています。その理  
由は「こんな経験は人生に一回くらいしか  
ないから」です。

いつか成長したら田老が復興できるように何  
かできるようになりたいと思います。しっかりと  
勉強をして役に立てる人間になりたいと思  
います。

### あの日の記憶

安田 要

これは震災当日に僕がメモしていたもの  
です。

三月十一日、二時五十分。在校生での卒業式  
練習の時に強い揺れを感じました。体育館から  
校庭へと向かいました。最初、数日前にあった  
のと同じくらいかなと思っていましたが、途中  
からそうではないと思いました。地震の揺れで

木々が大きくうねり、台風の時しか揺れなかつ  
た野外照明が、左右に大きく揺れていました。  
今まで生きてきた中で体験したことのない揺れ  
でした。これは津波が来るかもしれない。そう  
思った僕は、胸ポケットからペンとメモ帳を取  
り出して、時間など記録してみようと思いまし  
た。僕は中学生になってから、メモを取ると便  
利だと思うことが度々あり、メモ帳とペンを学  
生服の胸ポケットに入れておくようになったの  
です。ちょうどあの日は、ポケットに時計が入っ  
ていたので時間もメモできました。

強い揺れはおさまらず、ほとんどの人たちは  
その場に座っているしかありませんでした。揺  
れは強くなったり、弱くなったりしてしまし  
たが、おさまりそうにありませんでした。津波が  
心配になり海の方を見つめていると、避難して  
きた人たちが校庭に集まってきました。僕はこ  
こが避難所だから、津波は学校には来ないだろ  
うという思いがあり、油断していました。そん  
な時に

「逃げる。」  
という声。

頭が真っ白になり、ひたすら体育館の裏山を  
目指して走りました。その時にものすごい音が  
して、振り返って見ると、防浪堤よりも上に、  
高く上がった水しぶきが僕たちを追うようにし

て迫ってくるのが見えました。津波を背にしな  
がら、やっとのことで体育館の裏まで来た時、  
住吉先生から、

「線路の上にあったはしこを登って、山に避  
難して。」

という指示がありました。その指示を聞いて、  
とっさに女子や小さい子優先で登らせた方がい  
いと思い、男子や大人のの人に協力してもらい、  
女子を山に上げました。その後男子も登って、  
ひたすら高い所へ向いました。後輩たちへ指示  
などもしながら、人数確認をしてしばらく山の  
上で待っていました。逃げる時に二手に分かれ  
てしまったので、僕の来た方にいない人たちの  
ことが気になっていました。僕たちの方は、先  
生と生徒を合わせても三十人くらいしかいま  
せませんでした。他の人たちは津波に巻き込まれたの  
ではないかと心配になりましたが、大きな津波  
が来る可能性があったので、山に逃げる時に周  
りの人たちに手助けをしていて、気にしている  
暇はありませんでした。

待っている間に山から見た田老の町は、前か  
ら何もなかったように海の一部となっていまし  
た。とにかく、田老の町の人びとが無事でい  
て欲しい。ただ、その思いで海を見ていました。  
あの時の光景や、防災無線が水につかかってかす  
れた音は今でも忘れられません。

僕たちは山の上から声もなく町を見ていました。揺れや津波の心配はもうないのかな、そう思った時でした。隣の山から山火事の煙が上がりました。そして、僕たちの上に灰が降ってきました。急いで線路まで降りて、そのまま総合事務所へ向って線路つたいに歩いて行きました。二手に分かれた仲間と先生たちに会えた時は本当にうれしかったです。

その日、田老一中生は全員、総合事務所の会議室で一晩過ごすことになりました。でも、眠ることができずに朝になってしまいました。

ここまでが、三月十一日のことです。

次の日には、宮古の祖父母の家へ行き、生活しました。宮古に行っても電気や水は当然ありませんでした。次の日からは毎日買い物に行ったり、水汲みをしたりして忙しい日々でした。震災後はかなりの間宮古にいたので、田老にいた同級生と一緒にボランティアができなかったのが残念でした。ボランティアができなかった分、これから自分ができることを頑張りたいと思います。

## 田老の復興

山本 瑞樹

きつと十年後の自分は、田老の復興にたずさわっていたと考えている。今の自分には何ができるかわからないが、その時の自分が何ができるのかをしっかりと考えておとなとしてかわっていくことが出来ればと思う。

十年後の未来はどうなっているのだろうか。月移転計画が進んでいるのだろうか。総理大臣はどのような人がなっているのだろうか。大震災を受けた田老の街はどうなっているのだろうか。

しかし、これを考える事が、今いちばんやってはいけない事のように思う。十年後の田老の未来がどうなっていくかということはまだ誰にもわからないし、それに自分がどうかかわっているのかもわからない。

今の時間を精一杯生きて、そのあとに田老の復興に向けて頑張れば良いと思う。今からどうのこうの言っていて意味がないと思う。だから今を精一杯生きたいと思う。でもこうやって真剣に考えていくことこそが今できる復興にかかわる気持であると考えてるので、すべてのごことに全力でむかい、自信を持って生きていくことが必要だと考えている。

復興には、まだまだ時間とお金がかかると思うが、気持ちを一つにして頑張れば何とかなるのではないかと考えている。これからも頑張っていきたいと思う。

三月十一日

山本 賢孝

三月十一日について思うことは、友達の大切さです。やっぱりつらい時に友達に励まされたり、逆に励ましたり、それがあつたからこそできたと思います。復興に向けて大事だと思うのは、自分は関係ない、人がしているから自分はいなくていい、という人任せをやめ、一人ひとりが復興に向けた町づくりに参加することだと思えます。

震災からかなりの時間がたとうとしていますが、自分は田老ではないところで勉強をするので、変わっていく様子をそのまま見ることはできませんが、今後の課題は今までの田老ではなく、さらに発展した田老を作ることが出来るかどうかということだと思います。きつと田老の人たちが協力すれば実現することが出来ると思います。だからこそ僕もできることは参加したいと思えます。



自分たちが今できることはあまりないかもしれませんが、小さいことなら少しずつでもやっていくことが出来ると思います。

震災の影響で、修学旅行もできないかと思っただけで、実施することが出来、大変うれしかったです。これも誰かの力が手助けをしてくれたからだと思います。

これから先、高校に入って勉強して、いつか田老のためになることが私の目標です。みんなと力を合わせて、さらによい街を作っていくことが出来るように、努力していきたいと思います。

## 震災の日

吉水 啓大

三月十一日大地震が起きました。あのとき二年生で、卒業式に歌う歌の練習中でした。地震が大きいため途中で止めて、体育館のかべに寄ってから、次の指示で外へ出ました。地面は波うつて立っているのが大変でした。校舎の窓は、ガタガタとっていました。津波は来ないだろうと思っていました。

「津波だー！逃げろー！」

その一言で、どういふことかと思ひ町を見た

ら、黒い水が町中に入ってきているところでした。自分は、体育館を背に上の家の前を横切り、山へ山へ、線路をこえて山へというかんじでした。線路にたどりついて橋の上から町を見ると、青砂里の方は黒い波が次々と押し寄せているかんじで、ほとんど自分たちの方へきている感じでした。町の中は水というよりも、本当にがれきがいつぱいでした。防災無線はとぎれとぎれですが、鳴っていたのを覚えています。それと、流されてきた車のクラクションが鳴っていたのも覚えています。

熊野神社のとなりの山なのが、そのむこうの山が分からないけど、山火事がおきて、灰が雪のように、ちらちら降ってきました。少ししたら、ヘリコプターがグルグル町の上を回っていました。灰や火が心配になってきて山を下りはじめ、途中で小笠原先生の姿が見えました。その後、人数を確認して、線路を歩いて総合事務所に向かいました。

そして、みんながいるところにかたまっていました。話している時に声かして振り返ると父さんがいて、なんかとても泣けてきました。帰れないので、一晩みんなですこし、次の日の朝、お寺の前を通り、線路を歩き教員住宅の所から町に向かつて歩き、テクノプラザの所から消防車に乗って家に帰りました。

家では食料、水もあつたけど、電気がなくて大変でした。

## 中学生生活の思い出

大久保わかかな

だんだんと春も近づき、自分たちの卒業が迫ってきました。今日までのサーモン教室での様々な出来事が思い出されます。

自分は小学六年生から約四年間、サーモン教室へ通いました。一番初めの頃は緊張してばかりで、登室することを拒んでいましたが、通った日が多くなるにつれ、登室が楽しくなりました。勉強面では特に一人で学ぶ事が難しい数学と英語を、先生方に丁寧に指導頂き、教室にて集中し勉強に取り組む事が出来ました。

さらに色々な行事を通じて、体を動かす事の楽しさや人との触れ合いを学びました。中でもシーカヤック体験とスケート教室はとても貴重な体験となりました。他にも登山、卓球、佐羽根教室等々、心に残る事を沢山経験しました。そこでは他の生徒さんとの交流もあり、対人関係が苦手な自分への良い刺激になりました。

サーモン教室は学習面の成長は勿論の事、精神の成長の支えでもありました。教室は自分

のもう一つの居場所です、安心出来る空間です。もし、サーモン教室が存在しなければ引き籠りになってしまい、高校入学もあきらめていたかもしれません。そのくらい、サーモン教室は大きな大きな存在です。そして、昨年の震災の後もサーモンの先生方の支えや励ましの御陰もあり、ここまで来られました。

長かったような、短かったような、そんな約四年間でした。サーモン教室の先生方には沢山の事を教わり、本当に御世話になりました。思い出が一杯詰まっているこの大切な四年間を決して忘れません。

## 震 災

影田久保亜美

三月十一日、東日本大震災が起きました。その日、私たちは卒業式の練習をしていました。すると、急に揺れ始めて大きな横揺れになり、校庭に避難しました。しばらくしても、地震はおさまらなかつたのでとてもこわかったです。そして誰かが、

「津波だー。」

などと叫びました。私は、訳も分からず無我夢中で向かいの山に登りました。斜面がきつく、

滑りながらも登りました。途中で海の方を見てみると、茶色い砂煙が立っていました。本当に津波が来たんだ、うそではないことが分かりました。泣きそうになりながらもなんとか登りました。そこには、地域の人たちがたくさんいました。その日は、総合事務所にみんなで泊まりました。余震が絶えず起こり、みんなで寄り添いました。誰かがおにぎりを届けてくれて本当にありがたかったです。三人で分け合いました。食べ物の大切さを感じました。

修学旅行に行けるかどうか分からなかつたけど行けてよかったです。震災があつて、色々な方からの支援があり、感謝しています。人とのつながりを感じる事が出来ました。将来は、人のためになるようなことや田老の復興に携わることが出来たらいいなと思います。

三月十一日

加藤 友美

三月十一日、私達はまだ二年生で、卒業式の歌練習をしていました。でも二時四六分強い揺れが来て全校生徒は外へ逃げました。泣いている人も数名いました。その時海の方から煙みたいのが見えてまさかと思いました。それは、津

波でした。大型の津波が来て先生が、

「山へー早くー!」

と言ってきたので無我夢中で逃げました。山まで登った私達は学童の子供たちや老人を案内したり、声をかけて一緒に登ったりしました。区切りのついたところで、辺りを見渡すと、向こうの方に火事が見えました。夢だと思いたかったです。数人の生徒が見当たらず、探していたらお寺の方に制服を着た子達が歩いて来ました。そこに同級生もいてよかつたと思いました。田老一中全生徒、先生も合わせて全員が無事でした。私達は総合事務所に行き、一夜を過ごしました。朝が来て、迎えに来た親御さん達が生徒を連れて知人の家などに帰りました。震災当日は、ご飯もろくに食べられず、三人に一個のおにぎりでした。支援の毛布をかけながら、迎えを待っている人は、女子が四人くらいで、男子はまだ結構いました。私はお父さんが迎えに来てくれました。線路を通って、お父さんの仕事場まで歩いて、グリーンピアの避難所に行きました。家族は全員無事で、安心しました。今は、仮設住宅に住んでいます。やっと慣れたところですよ。早く復興できますように。

三月十一日

木村 紗弥

三月十一日、東日本大震災が起こりました。私は、こんなことになるなんて、思いもしませんでした。

体育館で、卒業式の合唱練習をしているときに、大きな地震が起きました。急いで、校庭に避難し、待機していました。泣いている子もいました。放送も鳴らなくなり、地震も大きくて長かったし、天気も悪かったし、私は変にドキドキして、もしかしたら津波がくるんじゃないか・・・と不安になりました。早く山に逃げないのか？とずっと思っていました。そして、地震がおさまりはじめて、少ししてから、海の方からパンツパンツと音がしました。私は、防浪堤をしめてる音だと思つて気にもしませんでした。そしたら、

「逃げろー津波が来たぞー！」

と声が聞こえました。急いで体育館の裏山に逃げました。できる限りに逃げました。上から見た光景は今でも覚えています。校庭まで家が流されていて、何もなくなっていました。車のクラクションが鳴りっぱなしでした。安田くんがメモ帳を出して、誰がいるか名前を書かせていました。そのうち、雪や灰が降ってきました。

た。火事が近くで起きていたからです。急いで山を下りて、線路に集まりました。おばさんやおじさんもいました。線路をたどってお墓に行きました。途中、トンネルがあり暗くて怖かったです。そこで、やっと中学生全員が集まり、無事が確認されました。みんなに会えて、友達と抱き合い、

「良かった、無事で！」

とみんなで泣きました。夜は、総合事務所で一晩明かしました。毛布一枚を分け合い、寒さをしのぎました。その夜は、全然ねむれませんでした。

次の日の朝、総合事務所から田老の町を見ました。家がめちゃくちゃになっていて、跡形もなくなっていました。言葉が何も出ませんでした。頭は真っ白でした。その後、お母さんが迎えにきてくれました。生きていて本当につれしかったです。家族全員の無事が確認されたのは数日後のことでした。みんなに会えて、言葉にならないくらいうれしかったです。それから長い避難生活が始まりました。

東日本大震災

久保田麻里

三月十一日東日本大震災が起こり、津波がきました。避難する途中、保育園児の手をひいたりして避難しました。避難所の総合事務所では配給された一つのおにぎりを三人でわけて食べたり、配布された毛布をかけて寒さをしのいだけど寒かったです。

震災後は田老一小の校舎を借り、授業を受けました。一小での生活は中学校とは違い、いろいろなことを制限されてすごくストレスがたまりました。はやく中学校に戻りたいと思いました。部活は田老一小の体育館や北高の体育館を借りてしました。そのおかげで部活ができ、中総体に参加することができました。ありがとうございました。

九月末になり、やっと中学校に戻れるようになりしました。一階が使えず、行事もいつもどおりにはいかなかったけど、体育祭や、規模が小さくなったけど文化祭をすることができました。体育祭ではみんな優勝できるように応援練習など練習に一生懸命に取り組んでいたし、文化祭では合唱だけになってしまったけど一生懸命取り組んで歌いました。

そんな中、「大海原Tシャツ」をお送りいた

だき、ありがとございました。私たちのためにTシャツを作ってくれた人がいると聞き、Tシャツを見たときはとてもうれしかったです。

震災があり、気持ちが沈んでいましたが、「大海原Tシャツ」を見て元気になりました。これからも、田老の復興のために頑張っていこうと思います。

ありがとございました。

## 東日本大震災を経験して

添田紗理奈

三月十一日、田老第一中学校の終業式が終わった頃、体育館の蛍光灯を揺らすほど大きな地震が起こった。

私たちは校庭にしばらく避難していた。それからどれくらいの時間が経ってからの、一人の先生が、

「逃げろー!」

「山に登れー!」

と、叫んだ。

反射的に海の方を見たら、砂嵐が水しぶきなのか分からないものが押し寄せていた。

山に登り、後ろを振り返ると、たくさん破壊された家々が、私たちがさっきまでいた校庭

に流されてきていた。

訳が分からなかった。でも、何より家族のことが心配だった。

しばらくして、総合事務所に移動した。そこで母と会うことができた。嬉しかった。

一夜が明けた。朝、また地震が起きた。山に避難したあと、私は母と線路を歩き、姉が通っている高校に移動した。姉にも会えて安心した。

食べ物を分け合ったり、物資を頂いたり、色々な人たちと関わって、助け合う生活が続いた。

私は今までなんて命を粗末にしようとしていたのだろーと思っただ。

この震災が起こってよかったとは思わなかったが、命の尊さ、思いやりを学び、大切なことはなにか見つめ直す、良い機会になったのではないかと思っただ。

## 東日本大震災

中里 実結

二〇一一年三月十一日、田老は津波に襲われました。

その日は修了式があり、午後は次の日の卒業式に向けて歌練習をしていました。その真中にいきなり強い揺れが起こりました。今まで感じ

たことのない強い揺れですぐに校庭に避難しました。校庭に避難しても揺れは続き、校舎や公民館の窓もガタガタしていました。二、三日前から地震はありましたが、それとは比べものにならない程の大きな地震でした。私は津波でも来るのかと思いましたが、心のどこかでは津波なんて起こるはずがないとも思っていたんだと思います。

そしていきなり町の方からドーンと何かがぶつかる音が聞こえ、町の方を見てみるともの凄い砂ぼこりが見えたのです。すると先生が急に、「逃げろー!」

と叫び、訳が分からないまま公民館の方の山を必死に登っていました。途中ふり返って学校の方を見ると、プールの方にあつた救急車が体育館の方まで流されているのを見ました。墓地の所まで登り、そこから見た田老の町は、何もなくなっただ黒い波と町の残骸だけでした。しばらく町を見て、何も無いな、これが夢だったらいの、と何度も思いました。

その日の夜は中学生全員で総合事務所の一室で過ごしました。おにぎりや毛布をみんなで分け合いました。夜も何回か地震が起こってその度に起きて、みんなで励まし合いました。

翌朝、お母さんが迎えに来てくれて、その日から二、三日はふれあい荘で過ごしました。そ

れからは、お母さんの実家に行き、しばらく居ることになりました。

学校が始まり、小学校の三階を借りて授業をしました。登下校は震災前の徒歩通学から三鉄やバス、車など交通機関を利用しての通学になりました。

津波を経験して、もう二度とこんな災害にはあいたくないです。町は殺風景になりさびしくなりました。一刻も早く元の町になってほしいです。東日本大震災の影響はまだたくさん残っている、少しでも早く復興することを願うばかりです。

### 東日本大震災を経験して

馬場 裕香

二〇一一年三月十一日。この日は修了式を終え、次の日に予定していた卒業式の準備をして笑って帰るはずでした。あんなことが起きなければ……。

修了式を無事に終え、卒業式の合唱練習をしていました。すると揺れているのに気がきました。その時は大丈夫だと思っていたのですが、だんだんと揺れが大きくなり校庭に避難しました。私はすでに涙をこぼしていました。怖すぎても考えられませんでした。校庭に避難し待

機している時、先生たちの

「逃げるー……」

で何が何だかも分からずとにかく走り、公民館の山を駆け登り、途中で振り返ると、がれきが学校の校庭に押し寄せてくるのが見えた。実は、先生たちの「逃げる。」の声があった瞬間、私は海の方を向きました。そしたら、白っぽい煙が見えました。その時は何も思わず逃げた。でも、がれきを見た瞬間に、あの煙は家の土ほこりだったのかと確信しました。ずーっと山を駆け登り、総合事務所より少し上のお墓に着きました。田老の町を見ると海でした。また涙があふれてきたとともに、家族が心配になりました。落ち着くまで何もできずにいました。でも、お年寄りを見て、とにかく座らせました。声をかけ、励まし合いました。それから総合事務所に移動して一晩過ごしました。一つの部屋に一年生、三年生と先生たちが何人かいて気をまぎらわせるために、友達と話し続けました。毛布を五、六人で一緒に使い、一つのおにぎりを三人で分けて食べたり、凄く体験をしました。余震もずっと続き、なかなか寝られずに次の日になりました。起きて外を見ると、田老だとは思えない田老になっていました。

だんだんと迎えがきて、私も家に帰ることが出来ました。暗いトンネルを二つ越えて車のと

ころまで歩きました。家についたら、おばあちゃんの家から出てきて私と妹、弟を抱きしめてくれました。この時、改めて家族のあたたかさや大切さを知りました。それから家では

「あの人が亡くなった。」

とか

「行方不明だ。」

とか、私が目の前で見た津波の話などをしていました。親戚の人が、

「大丈夫か。」

と来てくれたりしました。しばらくは、夜はろくそくで明るくしていました。食べ物はずっキーなことに買い出しをしていたので大丈夫でした。じいちゃん病院に行っていて、二、三日会えなかったのですが、帰ってきた時は少し疲れているような顔だったけど、元氣そうで安心しました。何日かして、電気も水も復旧し、一安心でした。テレビでは安否確認や他の被災地の情報を放送していました。

何日かしてやっと友達に会える日が来ました。始業式です。でも中学校は使えず、小学校の三階で約五か月間授業しました。中学校に戻ったら、修学旅行の準備が始まりました。本当は中止という話もあったらしいのですが、保護者の方々が行かせてほしいということで、行けることになりました。おかげでいい思い出が

出来ました。感謝しています。修学旅行から帰ってきたら、体育祭の準備が始まりました。短い期間でしたが、本番では紅組団全員の気持ちが一つになり完全優勝できました。最高の思い出です。次は学習成果発表会の練習です。今年度は合唱だけでしたが、とても良い発表会になったと思います。

震災から一年。あつという間の一年でした。日本、世界中の支援をしてくださった方々に感謝の気持ちを忘れずに、そして宮古市の、田老の復興を祈りながらこれからも頑張っていくたいと思います。

### 感謝の気持ち

松本 茉耶

修学旅行はすぐに終わりを迎えました。楽しい時間はすぐ過ぎてしまっな、と少し儚く感じました。修学旅行が終わって、改めて親や先生方に感謝の気持ちが芽生えました。震災して、修学旅行に行けるか怪しかったところを、周りの皆さんのおかげで無事成功することができました。とても感謝しています。

また、体育祭では校庭が直り、中学校で無事に体育祭を行いました。早稲田大学の応援部の

方々も来てくださってとても盛り上がりました。三年目の体育祭ということもあったので、陣地係だった私は絶対優勝できるように、今まで以上に頑張りました。結果は見事に優勝できたのです。いい達成感がありました。今までになり幸福感がとてつもなくあふれました。

こうして修学旅行や体育祭を行えたのは、みんなで協力し合い、助け合い、田老の人々や自衛隊の方々のおかげで中学校に戻ってこられたからだと思います。そして、私達のために校舎を掃除したりしてくれた先生方のおかげだと思います。本当にありがとうございますという気持ちでいっぱいです。

### あの日のことを忘れない

山本 矢穂

私は、一生あの日のことを忘れないだろう。三月十一日。あの日は、一生忘れる事のできない東日本大震災に襲われた。それは、突然やってきました。私たちは、体育館で卒業式の練習をしていた。するといきなり、大きな地震がきたのだ。いつもの地震とは違う、大きくゆっくりとした気持ち悪い揺れだ、とその時感じた。生徒全員、先生の誘導で校庭へ出た。その時の外は、いつにもなく寒かった。しばらく校庭で待機し

ていると、誰かが大声で、「津波だー、逃げるー。」と、叫ぶ声が聞こえたのだ。何が起きたのか分からないまま、自分はただひたすら山を登っていた。登り終わり山の上から、校庭の方を見て呆然とした。さっきまで自分たちがいた校庭はたくさん瓦礫でみえなくなってしまうていた。周りを見ると、声を上げて泣いている生徒がたくさんいて、自分はいあまりの怖さで泣く事すら、いや、声を出す事すら出来ずにいた。あの山の上から見た光景は、今でも忘れる事ができない。

その日は、避難所である総合事務所に泊まった。地震が来るたびストーブが消され、とても寒かった。毛布も足りず、段ボールやビニール、新聞紙をかけている生徒もいた。怖くて、寝るに寝られなかった。ただ、目をつぶっているだけであった。気が付くと、朝になっていた。私は、お爺ちゃんが迎えに来てくれたため、帰ることができた。しかし、道は瓦礫で歩くことさえできない状況で、何回もサイレンが鳴る中、線路を歩いた。小学校に母親がいると聞き、小学校へ行った。すると、母親が泣きながら

「生きてて良かった。」

と言い、抱きついてくれた。私もその時、ものすごい安心感で思わず声を上げて泣いた。それからまた線路を歩いた。あの時、線路から見

た田老はたくさん瓦礫で埋もれていた。前日に見た、白い大きな渦を思い出した。私は、初めてあんな恐怖を体験した。車に乗り、我が家に帰宅した。すると、二人の姉に抱きつかれ、泣かれた。私も二人と同じように泣いた。その時、生きて良かったと心から思う事ができたし、家族の大切さを改めて実感する事が出来たのだ。

私はこの震災を通して、たくさん怖い思いもした。その反面、家族の絆、大切さを知ることができた出来事だとも思う。

津波はたくさんの家や人を奪った。もう二度と来てほしくない、と心から願っている。私は、津波の事を忘れてたりしない。将来、子供が出来たら、どれだけ津波が恐ろしいものなのか、伝えていこうと思う。そして、自分の生まれ育った田老の復興に関わりを持っていきたいと思う。

震災を通して、たくさんの方々の支援をしてくださった方々に感謝をし、これからの人生を一杯生きていこうと思う。

## 大震災が起こった時

扇田 沙織

三月十一日、二時四六分頃、大きな地震を家で感じました。立っていられないような激しい揺れに祖母もどうしようかとおろおろしていた様子でした。すると漁協から母が、「避難させにきたよ。」と顔を出しました。その時、私はとっさの判断で漢和辞典と愛用していた五冊の本をバッグの中に入れました。

その後、腰の痛い祖母も車に乗り、公民館まで行きました。公民館にはすでにたくさんの方がいました。「ここでは危ないからもう少し上に避難しよう。」と誰かが言い、みんなで山に登ろうとしたときでした。津波が堤防を越えてきたのです。私は本と辞典が入ったバッグと、家で使っていた毛布が入ったバッグを両方の手で持って逃げました。山から見たら、田老の風景はがらりと変わっていました。家や建物が流され、まるで戦争があったかのように無残な姿となったのです。そして母のいる漁協が濁って汚い水で囲まれているのを見て、母はどうなったのかと心の奥で思いました。そして祖母と二人で、母は死

んだのだと思い泣いてしまいました。悲しくて悲しくて涙が止まらない思いでした。その後、住吉先生や荒谷先生と学校のみながいたし、地域の人たちもたくさんいたのでうにかかりました。そしてお墓の坂を下りてお寺のほうへ行きました。そこはたくさんの方がいたので気がまいってしまいそうでした。

暗くなって母はもういないのだと諦めかけていた時、六時十分頃、俊応兄さんと死んだか、行方不明になっていたと思っていた母が、ろうそくの光の中に現れました。抱き合って喜びあひ涙が止まりませんでした。そして母の話では自宅に二台あった家用車のうちの一台は流れ、もう一台は俊応兄さんが崎山に遊びに乘っていた時に使っていたので無事なことがわかりました。無事だった車は大きい車だったので、なんとか家族全員が乗る事ができ、お寺で一夜を明かした後、十二日の午後、私たちは母の運転で田代を回り、盛岡にいる絃光兄さんのところへ向かいました。夜の七、八時頃になり、盛岡は真っ暗になっていました。

あの時、漁協に戻った母は、流されたのではないかと気が気ではありませんでしたが、家族がみんな無事だったことが一番うれしかったです。今こうして落ち着いて勉強できるのが、本当によかったとしみじみ思っています。

# コンクール応募作品



## 平成 23 年度「わたしの主張」宮古地区大会 最優秀賞

### 「命てんでんこ」 2年 加藤 諒太

僕は思う。あの日の体験をこれから生きていく人々に伝えたい。

三月十一日、二時四十六分、大きな地震が東日本を襲った。僕たちは体育館で卒業式の練習をしていた。先生の声で校庭に出た。校庭はまるでゼリーのように波打ち、泣き出す人もいた。みんなで励まし合いながら恐怖に耐えていた。そして「逃げろ」という声が出て、何がなんだか分からないまま、僕たちは裏山に登った。津波はものすごい速さで町を飲み込み、さっきまでの町並みを一瞬でがれきに変えてしまった。声も何も出なかった。ただこわくて体が震えた。津波を目の前で見て、何もできない僕たちはおろおろするだけだった。

その日は、全校生徒が田老総合事務所で一夜を明かした。消防団の父さんに、夜十一時頃に会えてとても安心したが、寝るにも寝られない夜だった。夜が明け、外を見ると、がれきの上に雪が積もっていた。昔から津波の次の日には雪が降るといふ言い伝えがあるらしい。言い伝えのとおりすぎて驚いた。そして、がれきの上の雪は僕たちをますます悲しくさせた。明るくなるにつれて、家の人がやってきて、みんな家へと帰って行った。家の人が会いに来るたびに、涙を流す仲間の姿を見送った。

三日目、千徳の祖父母の家に行った。電気も水もガスも復旧していて、その違いに驚いた。でも僕はなんだか落ち着かず、じっとしていられなかった。父さんと一緒に消防団の仕事を手伝いたいと言った。生きている人がいるかもしれないと、一生懸命にがれきの中を父さんと歩いた。

僕はがれきの中を歩きながら思ったことが二つある。一つは「命てんでんこ」という言葉の深い意味。命より大切なものはありません。どんなことがあっても逃げることを考えてください。命があればどうにでもなります。未来に向かって歩き出せます。

もう一つは、負けたくないと思ったことです。田老は今まで何度も津波の被害にあい、それを乗り越えてきた町です。校歌の三番には田老一中生の進むべき道が示してあります。

防浪堤を仰ぎ見よ  
試練の津波幾たびぞ  
乗り越え立てし 我が郷土  
父祖の偉業や 跡継がん

僕はあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと伝えたい。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。

# Inochi-tendenko\* (Stay Alive)

Ryota Kato  
( Second Year Student )

This is what I think: I would really like to tell people in the future what I experienced on March 11<sup>th</sup>, 2011.

A great earthquake hit eastern Japan on March 11<sup>th</sup>, 2011 at 2:46 p.m. We were practicing for our graduation ceremony in our gymnasium at that time. Our teachers ordered us to go out to the school grounds. The ground shook as if it were jelly, and some students burst into tears. We encouraged each other to stay calm and were able to control our fear. Then, I heard someone say, "Run away!" and I didn't understand what was happening but we ran to the mountain behind our school. A great tsunami swallowed our town very quickly, and it instantaneously changed our town, from a typical townscape of stores and houses into mountains of debris. I could not say anything at all. I only trembled with fear. We saw the tsunami with our own eyes, but all we could do was stand in bewilderment.

On that day, all of the students spent the night at the Taro town office. I was really relieved because I could meet my father who worked as a fire fighter at 11:00 p.m., but I could not sleep well. The morning came. When I looked outside, I saw snow on the debris. It is said that snow always falls on the day after a tsunami. I was very surprised because it was too true. The snow on the debris made us even sadder. When it became light, many of my friends' families came to the Taro town office and took my friends home. I saw only my friends as they left together with their families with tears in their eyes.

On the third day after the tsunami hit, my family moved to my grandparents' home in Sentoku, Miyako City. We had water, gas and electricity there. I was really surprised at the different conditions in Taro and Sentoku. However, I could not calm myself down, and I really wanted to do something for someone. I said to my father, "I want to help you with your job." I thought that there might be people who were still alive and waiting for someone to save them, so I walked around and looked hard among the piles of debris with my father.

I thought about two things while I was walking among the piles of debris. One of them was what Inochi Tendenko ("stay-alive" in the Taro dialect) really means. There is nothing more important than life. When disaster strikes, no matter what the situation, please think only about running away to safety. Only if you are alive, can you advance into the future.

The other thing was that I don't want to ever be defeated by a tsunami. Tsunamis have damaged Taro Town many times, but people of Taro Town have overcome tsunamis again and again. The 3<sup>rd</sup> verse of our school song shows us, the students of Taro First Junior High School, the direction in which we should advance:

Look up at the great dikes  
Many tsunamis have hit our town  
But our ancestors have overcome them again and again  
Let us succeed in their great efforts

I want to tell many people what happened on that day. I really want to tell many people the importance of life. Finally I will never give up and I want to work towards our brighter tomorrow.

\*Inochi-tendenko is a dialect of Sanriku Coast. Inochi literally means life and tendenkeno means separately. This is a word that emphasizes the importance of saving one's own life.

Translated by Sunao Miura  
( Edited by Erik Lutz, Tomoko Yamazaki and James Hall )

## 平成24年度「わたしの主張」宮古地区大会 優秀賞

### 「未来に続く海」 3年 山本 拓実

『おいしい料理を作って、みんなを良い気分させよう。』調理師になる。それが僕の小さい頃の夢でした。中一の冬の三者面談も、担任の先生に「調理師になるので、食物科にいきます。」と言いました。母は「まあ、拓実にはむいてるか。」と賛成し、父も賛成してくれていましたが、おまけの言葉がついていました。おまけの言葉とは「どこの高校に行ってもいいけど、潜りの資格だけは絶対に取れ。」僕の父は潜水士です。震災前は田老の海にもぐり、あわびやうになどの漁をしていました。そんな父のおまけの言葉を聞く僕は、軽い返事で「はい、はい。」と言い、心の中で「まあ、取ればいいんでしょ。」と簡単に考えていました。

そんな僕の今までの考えが大きく変わったのは、昨年三月十一日の震災後です。僕の生活も大きく変わり、我が家も避難所生活が始まりました。テレビでは連日、行方不明者を捜索する映像が流れています。その中の一場面が、僕の頭の中から離れませんでした。潜水士の方が行方不明者の方を捜索するものでした。潜るイコール魚業だけではないことを改めて感じたのです。この時以来、僕は潜水士の仕事が気になり始めました。

そんな頃父は、田老の海に潜り養殖の準備をしていました。家に帰って来た父が「拓実、拓実が小学生の頃、俺と一緒にうにの口開けに行ったよな。その時箱めがねで見た海の景色とは全然違うぞ。」と言いました。「ああ、自分の目で見るとどう感じるんだろう。」ますます潜水士の仕事が気になりました。父はその後、家族を守り生活していくために宮城県女川に単身、働きに行きました。僕はどうしても父の仕事場が見たくて、六時間かけて女川に行きました。女川も田老と同じで何も無く、父も秋田から来ている人と二人でプレハブに住んでいました。会社の方々も良い方たちで、とても安心して帰ってきました。

そんなある日、進路通信で種市高校の体験入学を知りました。「行ってみようかな。」父に相談してみると「行くだけ行って来い。」と言われ、僕はいとこを誘っていくことになりました。体験遊学では、潜りの体験をしました。いざ潜ってみると、苦しいのと怖いのとで早くやめたくなりました。一緒に行きたいところは僕とは正反対で、どんどん潜りとても楽しそうでした。悔しくて、できない自分に腹がたちました。その日の夜に父に電話すると、「お前には潜りの素質がないんじゃない。」と笑われました。自分でもそう思いましたが、どうしても納得いきません。もう一回やっただめだったらあきらめよう。リベンジの一般向けの講習会、いとこの支えもあり十メートルまで潜ることができました。十メートルから見上げる水面はなんとも言えない景色でした。

講習会から帰り、「潜水士になろうかな。」と母にうちあげた時、母は祖父の話を始めました。祖父は根待の海で生きる漁師だったこと。漁に出て亡くなったこと。その時母が小学生だったこと。そして、祖父の遺体を潜水士の方が見つけてくださったこと。今でも母と祖母は潜水士の方に感謝していること。僕には始めて聞くことばかり……。でも、僕の中で何かがつながりました。

母から聞いた祖父のこと、仕事をしている父のこと、今、僕は父のような潜水士になりたいと強く思います。そして、いつか父と一緒に潜水士として田老の海で働きたいと思います。じいちゃんが生きた海で、父さんと一緒に漁をする。復興のために何かする。僕の未来も海へと続く。

## Sea leading into the future.

Takumi Yamamoto  
(Third Year Student)

“ I will cook delicious food and make everyone happy! ” It was my childhood dream to become a chef. At the parent-teacher-student meeting in winter of my first grade at junior high school, I told my teacher that I would study in a food course to become a chef. Mother encouragingly said, “ Well, Takumi may be fit to cook ” . Father also agreed, but added an extra comment. He added “ You can go on to any high school, but you must obtain the diving qualification. ” My father is a diver. He used to dive in the sea of Tar to catch abalones, sea urchins and other marine products before the earthquake. Listening to father’s comment, I quickly replied “ Yes, yes ” and thought to myself, “ OK, I just have to get a qualification, don’t I? ”

My thinking drastically changed after the earthquake disaster on March 11 of last year. My life changed a lot; our family ended up in an evacuation center. TV programs were showing images of people searching for the missing every day. I could not get one of those images out of my mind. On TV, divers were searching for missing people, and I realized then diving does not equate to fishing for marine products. Thereafter I became interested in the job of a diver.

My father was diving in the sea of Tar at that time to prepare for cultivation. When father came back home he said “ Takumi, do you remember when you went to the sea with me to crack open sea urchins when you were an elementary school pupil? The sea is completely different now from the view you saw through boxy glasses on that day. ” “ How will I feel when I would see it myself? ” I got interested in the job of divers more than ever. Father later went to work in Onagawa, Miyagi, apart from the rest of our family. I really wanted to see his where he worked, so I made the six-hour trip to Onagawa. Same as Tar, Onagawa was shattered, and father lived in a prefabricated house with a person from Akita. Everyone in the company was kind, and I could leave Onagawa at ease.

One day, I got information about experience-based entrance program to Taneichi Senior High School from course communication. “ Should I go? ” I asked Father. Father told me to just try it, and I decided to go with my cousin. We experienced diving for fun. After that, I felt so breathless and scared that I wanted to quit right away. My cousin was enjoying it, and dived more and more, seeming to have a great time. I was frustrated and hated myself for not being able to do it. Father laughed at me and said, “ Maybe you don’t have what it takes to be a diver ” over the phone that night. Honestly I also thought so, but I was not satisfied with it. “ I will try it once more, and give up if I cannot do it. ” Then I succeeded in diving into the ten meter depth with both a general seminar re-try with the support of my cousin. It was amazing to look up at the sea surface from the ten meter depth.

After coming back from the seminar I confided to Mother that I’m thinking about becoming a diver, and she responded by talking about Grandfather. He was a fisherman living near the sea in Settai. He passed away when he was fishing. Mother was an elementary school student at that time. A diver found the deceased body of Grandfather, and mother and Grandmother are still grateful for that diver. This was the first time I ever heard this story, but something clicked in my mind.

Considering what Mother told me about Grandfather, and considering Father’s career, now I really want to become a diver like Father. And I want to someday work as a diver with Father in the sea of Tar. I will fish for marine products with him in the sea where Grandfather spent his life. I will do something for the reconstruction of our community. My future is leading to the sea.

Translated by Kaori Izumi

## 平成23年度 FM岩手「家族の絆作文コンクール」最優秀受賞作品

### 「弟の誕生日」 3年 田澤 凱暉

三月十一日は、小学校二年生の弟の誕生日だった。いつも弟の誕生日には、みんなで歌を歌い、ケーキやお寿司を食べていた。この日も母が、「今日は綺蘭の誕生日だ。」と言うと弟はにこにこして、僕も嬉しくなった。

しかし、午後二時四十六分、大きな揺れがおそってきた。僕は卒業式の練習の最中で中学校の仲間と一緒に学校の裏山に避難した。しばらくたつと大きな黒い津波が押し寄せてきた。家や木や車が波にのみ込まれ流れてくるのが見えた。怖くて泣いている人もいた。家族のことがとても心配だった。次の日の朝、父と弟が、僕が避難していた総合事務所に来てくれた。弟も祖母と一緒に小学校に避難していて無事だった。僕は再会できて「助かって本当に良かった。」と父に言った。弟は自分の誕生日のことなど一言も言わなかった。母とは三日たって初めて会うことができた。地震が起きた時、母は弟の誕生日のケーキを買うために、宮古市役所を通り、ケーキ屋に向かっていただけだった。母は疲れ切った様子で「命が助かった。」と言つつぶやいた。僕は胸がドキドキして何も言うことができなかった。

弟の誕生日は、結局中止になってしまった。今回の津波で、祖父が亡くなり、悲しいことがたくさんあった。でも仮設住宅に入り安心して生活ができるようになってきた。来年こそは弟のために、誕生会をしたい。



# My Brother 's Birthday

Yoshiki Tazawa  
( Third year Student )

March 11<sup>th</sup> 2011 was the birthday of my brother, Kiran, who was a second grader then. On his birthday, we would sing a song together and eat cake and sushi. On that day as well, my mother said, " Today is Kiran 's birthday. " My brother smiled and I felt happy, too.

However, at 14:46, a big earthquake struck. I was practicing for the graduation ceremony at my school, and I evacuated to the mountain behind the school with my classmates. Soon after that, a large black tsunami came down on the town. I saw houses, trees and cars swallowed up by it. Some people began to cry because of fear. I was very worried about my family. The next morning, my father and brother came to the o ce of the municipal government where I had evacuated to. My brother was safe because he evacuated to the elementary school with our grandmother. When I met them again, I said to my father, " I 'm really happy to know we are all safe. " My brother didn 't say anything about his birthday. Three days later I was able to meet my mother for the first time after the tsunami. I knew that she had passed the City Hall and was on her way to the cake shop to buy a birthday cake for my brother. She looked exhausted and murmured, " I survived. " My heart beat fast and I could not say anything to her.

In the end, the birthday party for my brother was cancelled. This time, the tsunami has brought about many tragedies. My grandfather was killed by it. But now, we have moved to a temporary house and we can live at ease. Considering all that has happened, next year in particular, I really want to have a birthday party for my brother, Kiran.

( Awarded as winner for the Family Ties Essay Contest given by FM Iwate, 2011 )

Translated by Tomoko Yamazaki  
( Proofread by James Hall )



## 平成23年度 FM岩手私と家族の作文コンクール優秀賞

### 「18歳の兄へ、今、伝えたい事」 3年 畠山 紗莉奈

私には3歳違いの兄がいます。物の取り合いが原因で小さい頃からけんかばかりしています。こんな関係の兄が、私が小学校の時に何回かいじめに合う度に私のことを助けてくれました。私の言い分を最後まで聞いて味方になってくれたのです。その時のうれしかった気持ちは今でも覚えています。

そして、中学3年生になり、また大きな壁にぶつかりました。私は、陸上競技の砲丸投げで学校の代表となりました。しかし、様々なプレッシャーで陸上を何のためにやっているのか、分からなくなっていました。このような気持ちのまま、県体に出場することを悩みました。考えても、自分自身で決断することができませんでした。結論を出そうとすると、何かがひっかかり、心が渦まいて気分が悪くなりました。その様子を見ていた兄が同じ気持ちになったとことがあるから、私が悩む気持ちを共感できると言ってくれたのです。それは、ありがたい光のように感じ、私は少しずつ元気になりました。

この夏、進学を控えた兄が県外に行くことになりました。この話を聞いたとき、さみしい気持ちと少しせいせいする気持ちが交差しました。兄とはぶつかりあってばかりですが、兄はやはり一番頼りになる存在です。

ありがとう、兄さん。泣かずに見送るよ。

将来の夢、絶対にかなえてね。

今度は私がずっとずっと応援している。

私も自分の夢見つけられるよう頑張るよ。



# My 18 Year Old Brother, What I Want to Tell You Now.

Sarina Hatakeyama  
( Third Year Student )

I have a brother who is three years older than me. As brothers and sisters always do, we were always fighting over something since we were small. He used to help me out, however, every time I was bullied when I was an elementary school pupil. Listening to what I said to the end, he was always my supporter. I still remember how happy I felt at those times.

When I became a third year student in junior high school, I met another big obstacle. I was chosen to be the track-team shot-putter for the school. I lost sight of the purpose to join track and field events, however, for various reasons. I wondered whether to take part in the prefectural tournament. I considered a lot, but I could not come to a decision on my own. Once I tried to make a decision, thoughts weighed on my mind, whirled through my heart, and made me feel sick. Looking at me in such a condition, my brother told me that he was able to sympathize with my worries because he had felt the same feeling before. His words shone like a light, which then got brighter little by little.

Next summer, my brother will move to another prefecture to prepare for entrance to college. When I heard this, I felt lonely and a little bit relieved at the same time. My brother and I often argue, but after all he is the most reliable person for me.

Thank you, Brother. I will see you off without crying.

Please make your dreams come true.

I will keep on supporting you.

I will endeavor to find my own dream.

Translated by Kaori Izumi





## 東北電力第38回中学生作文コンクール優秀作品

### 「お母さんありがとう」 3年 小池 紗恵

「お母さん。今度はね英語の暗唱大会に出場することにしたんだよ。頑張るからね。」

私は心の中で母に告げました。中学最後の年に私は英語暗唱大会に出場することを決め、私の夢に少しでも近づこうと思いました。

二年前、中学に入学した私は、初めての中学生活に大きな不安と、新しいことへの楽しみとで胸をどきどきさせていました。小学校の六年間、ずっとークラスだった私たちの学年が中学に入学する時にニクラスに編成され、そのことも大きな変化でした。

また、各教科の授業もすごく気になることでした。特に英語は初めて習う教科になります。楽しみなのと、今まで英語に関わることがあまりなかったので、一番不安な教科でした。しかし、いざ授業が始まると、毎時間の授業が楽しくて一番好きな教科になりました。そのような私を見て、ある日母が私に「英語が好きなら、英語にかかわる職業に就くのがいいんじゃないの。」と言いました。それまで将来について考えることなどなかった私は、その母の言葉も強く印象に残るわけでもなく、興味も持つこともなく、ただ耳の中を通り過ぎただけでした。そのようなことがあって、中学一年が終わろうとした三月十一日、東日本大震災発生。そのとき私は体育館にいて、卒業式を明日に控え合唱練習をしていました。一方、私の父はいつものように仕事へ、姉は高校へ、母はその姉を迎えに行くところでした。地震発生後、父は消防団で活動し、姉と母は家に戻ったと思われます。「逃げる。」という大人の大きな声で私たち中学生は近くの山に避難しました。津波が来たのです。父も危険と感じて消防車で避難したということです。

しかし、姉と母は逃げようとしたものの間に合わず、亡くなってしまったのです。悔しいし悲しいけれど、二人の分まで強く生きよう決めました。四月に入り、新学期が始まりました。中学二年生になり志望校や将来のことを考えなければならない年になったのです。自分は何がしたいのだろうかと考えたときに、ふと母の青葉を思い出しました。

「英語が好きなら、英語にかかわる職業に就くのがいいんじゃないの。」「やっとわかった。自分のやりたいことが。」心の中で何度も繰り返しました。「私の将来の夢は、英語にかかわる職業に就くことだ。」母からのなにげない一言ですが、私の中では大きな大きな目標となったのです。将来の夢が決まってから、良い話が舞い込んできました。それは、東日本大震災によって親をなくした中学生がハワイに招待されるというものです。海外の文化にふれることや英語を学ぶ機会をいただいたということは私にとって「母からのプレゼントだ。母も私の夢を応援してくれている。」そう思いました。だからこそ、これから夢に向かい、勉強だけではなく、色々なことに挑戦していきたいと思いました。ハワイへの話にはすぐに行きますと返事をしました。どちらかという私は人前に出たり、知らない人と話すのが不得意です。でも、母からのプレゼントを無駄になどできないと思ったのです。ハワイ八泊十日という貴重な体験をした私。ハワイは雨が降っていなくても毎日のように虹が空にあらわれるのです。日本では珍しいことですが、ハワイでは虹のマークが車のナンバープレートに描かれているくらい有名なのです。毎日見ることができて幸せな気分になりました。世界にはまだまだ、私が見たことがない景色があり、そこに住む人たちの暮らしがあるのだろうと考えずにはいられませんでした。そして一番に思ったことは英語圏の国に行ってみたいということです。そのため英語をもっと勉強しようと決心しました。まず私は英語検定取得に向けて勉強し、三級に合格しました。次は準二級に挑戦です。英語暗唱大会への参加も決めました。英語にかかわる職業に就くために、できることは全て挑戦したいです。

「あのときお母さんのあの一言があったから今こうして色々なことに挑戦したり頑張ることができているんだよ。これからも頑張るから見守っていてね。お母さん。」

# Thank You, Mom

Sae Koike  
( Third Year Student )

“ Mom, I am going to participate in the English recitation contest. I will do my best.” I told to my mother this, but only in my mind. I decided to take part in the English recitation contest in my final year of junior high school in order to move one step closer toward my dream.

When I entered junior high school two years ago, I had both a great anxiety and hope for my new life. There was a big change that year in that our grade of one class from elementary school was divided into two classes when we entered Tar Daichi Junior High School.

I was also very curious about the lessons in each subject. Especially, English was a subject which I would learn for the first time. English was the most challenging subject at the time, because I had hardly ever learned it. Once we started the class, however, I really enjoyed every class and English soon became my favorite subject. One day Mother told me “ Since you like English so much, it would be good for you to have a job involving in English.” I had never thought about the future before so I never considered this and Mother ’ s words just passed through my ears. Days later, the Great East Japan Earthquake occurred on March 11, just when my first year of the junior high school was going to end. I was in the gymnasium practicing a chorus for the graduation ceremony that would be held the following day. Father was heading to work as usual, my sister was in her high school, and mother was going to pick her up. After the earthquake, I think father volunteered as a fire fighter and mother and sister went back home. “ Run!” an adult shouted to us junior high school students to evacuate towards the nearby mountain. The tsunami was coming. Father told me that he also had sensed the danger and evacuated in a fire truck.

Mother and sister tried to escape too, but it was too late. They passed away. While I feel sadness and regret, but I have decided to live strong, and to share the life with them. The new term started in April. I became a second year student and it was the year for me to start thinking about a high school for the future. When I thought what I want to do, Mother ’ s words came back to me.

“ Since you like English, you should get a job involving English.” “ Yes, I finally got it!” I repeated many times in my mind. “ My dream for the future is to get a job related to English.” Mother ’ s small words gave me a great, precious goal. After I decided my future dream, I received the good news that junior high school students who had lost parents in the Great East Japan Earthquake would be invited to Hawai ’ i. I was given the opportunity to experience the foreign culture and learn English. I thought “ It is a gift from mother. Mother is supporting my dream.” It made me want to not only study, but also do a lot of other things towards my dream. I replied soon to join the Hawai ’ i project. I tend to be shy in public and when talking with new people. I believed, however, that I never can throw away the mother ’ s gift. I received a valuable experience in the form of ten days and eight nights in Hawai ’ i. Rainbows appear in the sky almost every day in Hawai ’ I, even when it does not rain. It is rare in Japan, but rainbows are so famous that the rainbow mark is depicted on car plates. I felt happy to see rainbows every day. I could not help but think that there must be more views and lifestyles in the world I had never seen before. I firstly wanted to go to an English-speaking country. I decided to study more English to achieve it. First of all I began to study for the STEP test, and then I passed the third grade. Next I will try the pre-level two. I also decided to participate in an English recitation contest. I want to try everything I can to get an English-related job.

“ Your words in that little time led me to try many things and work hard. I will keep on doing my best. Keep on watching over me, Mom.”

Translated by Kaori Izumi

## 東北電力 第37回作文コンクール 佳作

「私の大切なふるさと」 1年 清水川 未知<sup>みのり</sup>

「うそでしょ...。」初めて震災後の田老の町を見たとき最初に口にした言葉です。その時の田老の町は、私の知らない町へと変わり果てていました。

平成二十三年、三月十一日、私は卒業式を一週間後にひかえていました。卒業式の歌練習をしていた時でした。ゴオーという音と共に激しい揺れがきました。建物がくずれるかと思うほどの揺れでした。

校庭へ避難した時ラジオから「大津波警報発令中。」と流れていました。きっと解除になるだろう。という気持ちとともに小さな不安がありました。

するとまたゴオーと音がしました。町の方を見ると砂けむりをたててこちらへ襲いかかってきていました。「逃げろ〜。」という校長先生の声を聞き、山の方へみんな走り出しました。

何時間かたち、山から下りて学校の体育館へ行きました。マイナス二度くらいの寒い体育館には百人くらいの避難者がいました。そんな体育館で私は一夜を過ごしました。布団がわりの薄い紅白まくでも温かく感じました。その次の日です。あの悲しすぎる現実を知ったのは...。いきなり家を失い、この先、未来が不安になりました。この町はどうなるのだろう。家がなくてどう暮らすのだろう。中学校入学はどうなるだろう、友達と離れ離れになるのだろうか...。胸の中にある不安な気持ちを少しでも楽にするために泣きたかったのですが、泣きたくても涙が出てきませんでした。しかし、希望の光が見えました。家族が全員無事だったのです。本当に本当に心の底から安心しました。家族がいればこの震災を乗り越えられると感じられました。

震災から二ヶ月間、家が無事だったいとこの家にお世話になりました。そんな生活をしているうちに、町のがれきは少しずつ片付いてきました。最初は自衛隊の人たちが全部やってくれているのだろうと思っていました。しかし、おばあちゃんが、「助けてくれているのは自衛隊だけじゃないよ。世界中の人たちが助けてくれているんだよ。」という話をしてくれました。うれしい気持ちと共に感謝の気持ちが溢れてきました。それからはテレビでチャリティ活動をしている人を見ると「ありがとう」と伝えたくります。いとこの家から私は仮設住居に移りました。二部屋で四人はせまかったので父は今も違う所で暮らしています。

私はよくこんな事を考えます。田老の自然が元にもどるのは？ということです。私は田老の自然が大好きです。都会とかにもあこがれますが、高いビルばかりはつまらないと思います。自然が好きだから、私は海をうらみません。田老の魚も食べました。田老の海でも泳ぎました。海は楽しい思い出もくれました。なのに津波がきたからと、急に海をうらむなんて私には絶対できません。

私が育ってきた町は今ではがれきだらけです。でも絶対にがれきはなくなると思います。だけがれきも元は家など思い出が詰まった物です。田老にはたくさんの思い出が積み重なっていると私は考えます。がれきの中から私の写真がみつかりました。家がなくなるなんて思ってもいないような笑顔でした。最初はそれを見て、思い出が残ってよかったとしか思っていませんでした。でも今は、こんな笑顔で過ごせば苦しい事だって乗り越えられると思います。だから笑顔で過ごそうと思います。

私は復興を応援してくれている方々や募金活動してくれている方々へまだお礼ができていません。私はこの作文を書きながら考えました。私には、どんなお礼ができるのだろうと。考えついた答えは、一生懸命生きる、という事です。津波から助かっただけでもありがたいのに、それをもっとがんばれっとはげましてもらっているのだから、一生懸命生きようと思います。

そんな時に私はある詩を、見つけました。「どの時代にもそれぞれの課題があり、それを解くことによって人類は進歩する。」これはハイネという詩人が書いたものです。それぞれの課題とは東日本大震災だと私には考えられます。この震災を乗り越えれば人類は次にこのような事がおこらないように、防災などもできると思います。

田老は絶対復興して元にもどります。おいしい思い出も、楽しい思い出もつくれるくらい、もどります。そして田老の笑顔がもどると世界中の人たちに伝えたいです。

# “ My Dearest Hometown ”

Minori Shimizukawa  
( First Year Student )

“ Tell me it ’ s not true... ” These were my first words upon seeing Tar after the earthquake. Tar had completely changed to town I had never seen before.

On 11 March 2011, I was looking forward to the graduation ceremony scheduled for just one week away. It was the time for us to practice the songs for the ceremony. Suddenly, there was a powerful shake along with a roaring sound. It felt as if the building would collapse. We evaluated to the school yard for safety when the radio announced an “ Imminent Tsunami Alert. ” I thought warning would cancel soon, but I was nervous.

I then heard another roaring sound. I saw a cloud of sand was rushing toward us through the town. The head teacher shouted “ Run! ” and we all fled into the mountains.

A few hours later we descended the mountain to go to the school gymnasium. There were about 100 evacuees in the cold gymnasium where the temperature was -2 . We stayed all night there. I could feel warmth just with a thin red-and-white curtain which I used because there was no blanket. The next day I was hit with a terrible reality. My home was gone, and I feared for my future. What will happen to my town? How can my family live without a home? Will I be able to enter junior high school? Do I have to separated from my friends? I wanted to cry, hoping it would make me feel better, but tears wouldn ’ t fall. I could find, however, a ray of hope. My family was safe. I felt a deep comfort in my heart. I believed I would be able to overcome the disaster as long as I am with my family.

For two months after the earthquake, I stayed in my cousin ’ s home which was not damaged. During this time, debris throughout the town was being cleaned up little by little. In the beginning, I thought only the Japan Self-Defense Forces was cleaning up. Grandmother told me, however, “ Not only the JSDF, but also people all over the world are assisting us. ” I felt great happiness and thankfulness. Since then, I want to express “ Thank you ” each time I see those working for charities on TV. I eventually moved out of my cousin ’ s house, to a temporary house. Only Father lives in a di erent place now because a house with two rooms is too small for our family of four.

I often think about "When and how the beautiful nature of Tar will recover?" I love the nature of this town. I yearn for the life in a big city, but a town with only tall buildings does not fascinate me because I love nature, and I never blame the sea. I love to eat the seafood from Tar . I swam in the sea of Tar . The sea is the source of joyful memories. Even though the Tsunami hit Tar , I will never blame the sea.

The town where I grew up is full of debris now, but I believe this will be cleaned up. On another front, the debris was originally homes or other things that are flooded with memories. I feel a lot of memories being piled up in Tar . One of my photos was found in the rubble. I was smiling in the photo, without a clue that my home would be lost. In the beginning, I just felt happy that a memory was left, but now I

think such a smile can make us overcome any troubles. So I will keep smiling.

I have not yet thanked those who are assisting in our recovery and working on donation activities. Writing this essay, I thought about how I can thank these people. The answer is to live my life to the fullest. I am happy just to have been saved from the tsunami. Moreover, many people encourage me. That is why I have to live life to the fullest.

Among the rubble, I found a fragment of a poem, " Each era gives us a challenge and solving it enhances us as a people." A poet named Heine wrote it. I believe the Great East Japan Earthquake was our challenge. When we overcome this disaster, we will improve disaster prevention methods so that the next generation will never be damaged in the same way.

Tar will definitely be rebuilt and return to normal again as enough as we can make tasty and joyful memories. I want to tell the people of the world that the smile of Tar will come back!

(Honorable Mention, the 37th essay contest by T hoku Denryoku)

Translated by Kaori Izumi



# 生徒作文の解説

〈中学生の作文から聞こえる復興の足音〉

岩手大学 教授 山崎 友子

# 中学生の作文から聞こえる

## 復興の足音

岩手大学教授 山崎友子

はじめに

2011年4月25日、宮古市内の小・中学校は手を携えて震災から立ち上がるつと一斉に平成23年度始業式を行いました。この年度に宮古市立田老第一中学校で学んだ3つの学年の中学生が、先生方の指導のもと津波体験を作文にしました。転校した1名を除き130名の作文がここに収められました。

1年生は数週間前の大津波の時小学校6年生で、田老地区館が森にある田老第一小学校あるいは摂待にある田老第三小中学校で大津波に遭遇しました。平成23年度に統合された田老第三中学校から移ってきた2・3年生も、摂待にある田老第三小中学校で大津波を体験しました。両校の校舎・校庭はからくも津波が到達せず物理的被害を免れ、地域の被災者の救援活動の場となりました。

田老第一中学校は、校庭と校舎1階に津波が到達し、その改修が終了する9月まで田老第一小学校3階で、その後元の校舎に戻って教育活動を行っています。本文集は津波被災地の中学生が、復旧の真只中で取り組み、被災者自身が見た津波の実相や心の中を描いたものです。

体験を作文に記録することの意義 津波に負けない

震災の衝撃の後、田老第一中学校では復興教育に取り組み、中でも表現活動に着目しました。津波体験を作文にし、それを公表することは、個人の体験が社会というレベルでも重要なものとなり、個々人の成長や地域の復興にとり価値があるという共通理解のもと、その目的を生徒に伝え、また個々の生徒の状況へ配慮しながら指導がなされました。津波体験を作文にするという表現活動の意義をまとめてみます。

社会全体にとって

- ・被災者の視点からの多様な詳細な記録が後世に残る
- ・被災地の外の人々が、津波被害の実相に近づくことができる
- ・津波波防災対策を検討する研究資料となる

学校にとって

- ・活動を通して、生徒と指導者との信頼関係が深まり、互いの共感に基づく協力体制を作る基となる
- ・発表を通して、地域とのつながり・信頼関係が深まり、地域の学校としての役割・活動が強化される
- ・学校内・地域との信頼という安心感のある環境作りにより、生徒の心理的安定に寄与できる

生徒にとって

- ・自己の体験を文章にすることにより、また、さらにそれを公表することにより、自己の体験や自分自身を対象化することができる
- ・対象化することにより、社会を変革する力を得ることができる。これは、復興の方向性やそのエネルギーのもととなる

などが挙げられます。

作文集には、悲惨で辛い震災に遭いながらも自発的に助け合い、人とのつながりの大切さ温かさを実感し、この町のために役立ちたいという思いに至ったことが書かれています。命の重さを噛みしめ、底流に津波に負けない」という思いが貫かれ、中学生が人として一つの高みに立つた姿を見る思いがします。震災という厳しい体験を作文にする学校をあげての表現活動が、生徒個人を成長させ、中学生が時には復興の最前線に立っていることを示しています。

1933年の昭和三陸大津波の後にも、田老尋常小学校では児童に津波体験を書く指導がなされました。作家吉村昭氏が心打たれる作文と関心を寄せ、孤児となった牧野アイさん（震災時5年生、現在91歳、「荒谷」姓）の作文他計6編を『三陸海岸大津波』に所収しました。今回の震災後も多くの人々が再びこの本を買い求め、津波の引き起こす深刻な被害に心を痛めました。

震災後ふるさと田老を離れたアイさんは、学校を卒業すると、友達がいるからと単身田老に戻りました。80年前の出来事は今でも鮮明です。「私は、ほんとに独りぼっちの児になったのです」と書き筆を置くと、担任の先生はアイさんを抱きしめて一緒に涙を流されたそうです。先生のお名前は「佐々木耕助先生です」と即座に返ってきます。「生涯の恩師です」とも。先生方が子ども達とともに現実と向き合おうとされたことが心の支えとなり、「津波に負けない」という思いがその後の人生を歩む力となったと思われまます。佐々木耕助先生は、今回田老第一中学校

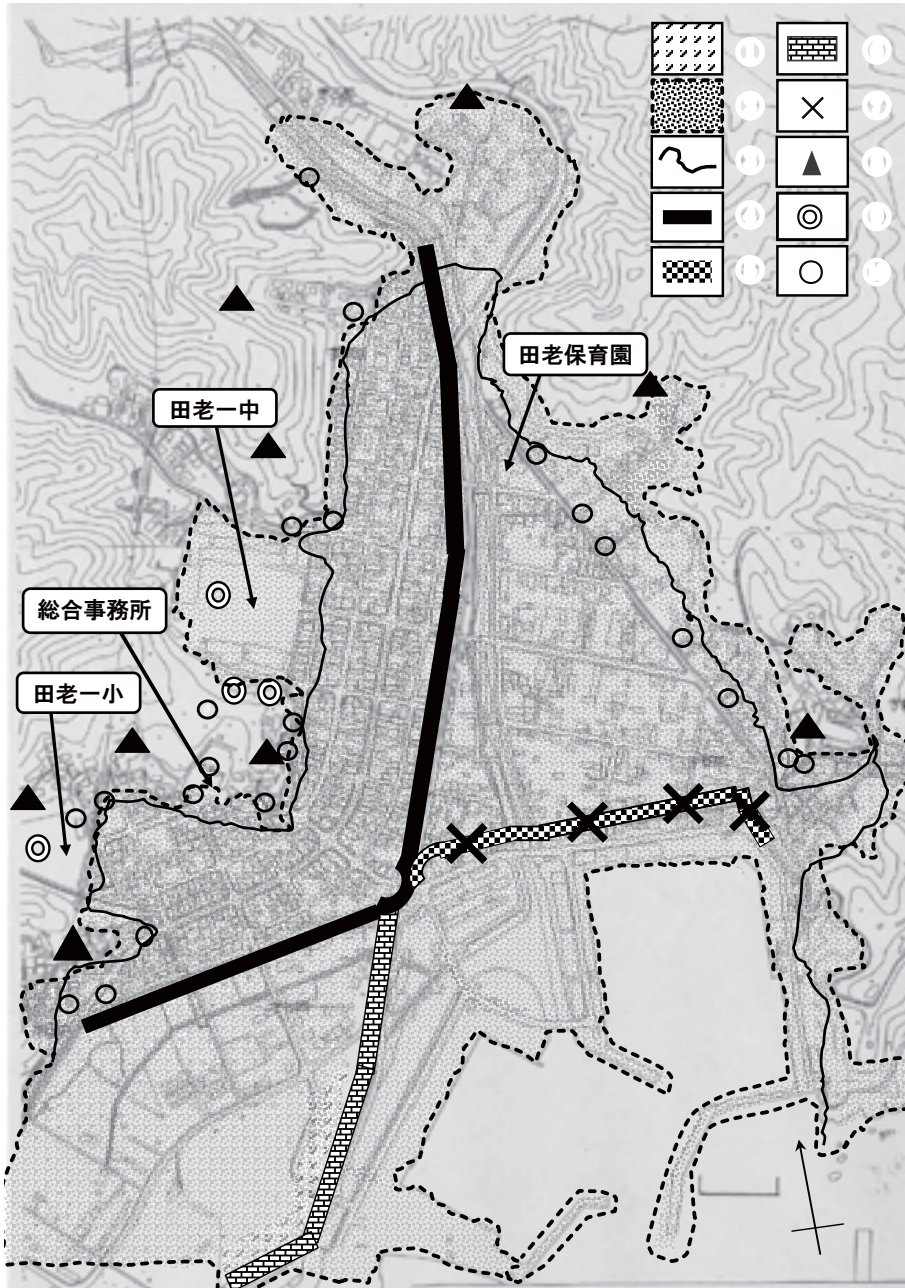
の津波体験作文指導の陣頭指揮をとられた佐々木力也校長の父のおじにあたりまます。

## 二 田老第一中学校と田老の津波の歴史 父祖の偉業や跡継がん

田老は三陸沿岸に位置する、真崎わかめやウニ・アワビで有名な漁業を中心とする人口約4000人の町です。太平洋プレートが北米プレートにすべり込む面が沖合に展開しており、リアス式海岸という地形も相俟って、過去に幾度となく津波の被害を受けました。津波防災に力を入れ、平成15年には「津波防災の町宣言」をしました。平成17年には、宮古市に統合され宮古市田老となり（人口は市全体の約6%）、田老から生まれた津波対策を山間部もある宮古市全域で展開することは難しい状況にあります。

1996年（明治29年）の大津波では生存者わずか36名という壊滅的な被害を受け、1933年（昭和8年）にも、死亡者548人・行方不明者368人（生存者1828人）にのぼる犠牲を生みました。国からは満州への移住が提案されましたが、村民は関口松太郎村長を中心として、この地に残ることを決め、村民の手で防潮堤建設を始め、まず960mの防潮堤が出来上がりました。その後戦争による中断を経て、昭和33年には、根幅最大25m、上幅3m、高さ地上最大7.7m（標高10m）全長1350mのX字型の大堤防が完成しました。「万里の長城」とも呼ばれる巨大な防潮堤の内側から海は見えません。しかし、住民の悲願が込められた防潮堤は、町の風景の一部となり津波との戦いの歴史を後世に伝えてきました。防潮堤の上は幅3mもあり、歩くことも自転車を通ることも可能です。中学生の部活動のトレーニング





田老町津波浸水地図 山崎憲治作

凡 例		
防潮林	防潮堤(昭和37~41年建設)	第2避難所
東日本大震災津波浸水域	防潮堤(昭和48~53年建設)	避難路
昭和8年津波浸水域	防潮堤の破壊	
防浪堤(昭和9~32年建設)	第1避難所	

グの場や高校生のデートコースにもなっていました。

田老第一中学校は、田老にあるただ一つの中学校です。昭和22年4月に創設され、同年7月に現在地に校舎が完成し移転しました。住民の子弟を育てる大切な場所として昭和の大津波も到達していない標高10mを超える場所に山林を切り開いて建設されました。校歌には自然の美しさとともに津波との闘いの歴史が詠みこまれ、「父祖の偉業や跡継がんと」と地域の核として防災を担うことが生徒・教職員の意識に長く留められてきました。「津波防災サミット」を開催するなど津波防災に尽力された東信一町長は田老第一中学校第10代校長でもありました。（校歌は、震災後最初の入学式で生徒会長が新入生歓迎のことばに引用しています。P.116を参照して下さい。）

中学校は第二避難所に指定され、3月11日の震災時には多くの町民が校庭に避難していました。しかし、防潮堤は第一波が町に流れ込むのを防ぎましたが、その後海側の北半分が破壊され、津波は山側の防潮堤を越え、昭和の大津波でも浸水しなかった中学校まで到達しました。校庭には破壊された家々・車・材木等々が押し寄せ、校舎は1階90cmの高さまで浸水しました。この緊急事態に、校庭に避難していた生徒・教職員・保育園児・地域住民はとっさの判断・機敏な行動により、全員が無事に津波から逃げることができました。

しかし、約7割の生徒が家屋損壊・家族の死傷・保護者の離職などの被害を受け、仮設住宅や隣接する町のアパート、親類宅に身を寄せることとなりました。中学校より南の海側の建物は3階建ての漁協以外は損壊し撤去され、夕方からは真っ暗となります。このような状況で、

95名はスクールバスで、5名は自家用車で、18名は徒歩で通い続けました（学区外通学者13名、平成24年2月調べ）。市街地は流失したにも関わらず、在籍数の減少は自然減少以外はありませんでした。住民はこのような中学生の姿に励まされ、震災後も、田老第一中学校は地域の核となる役割を果たし続けました。

### 三 大津波からの避難と教訓

保育園から社会教育までの串刺しの防災学習を  
(1) 目視してからの避難

地震後校庭に避難していた生徒達の津波からの避難は、校舎上階から海を見ていた先生が水柱を見、それを「津波」と認識した地元出身の用務員さんの「津波だ、逃げろ！」により開始されました。地震は今までに体験したことのない程大きなものでしたが、昭和の大津波でも津波が到達していない場所であること、第二避難所に指定されていることから、津波の襲来は想定されませんでした。津波からの避難は、津波を「目視する」ことにより始まりました。

今回の震災で、岩手県では指定避難所の3分の1が津波に襲われ犠牲を生みました。避難所の指定は、過去の事例をもとに一定の基準によりなされるものですから、それを越える自然現象に対応するには、避難に「目視する」手順を追加しなければなりません。避難所だからと安心しないで、海を観察し続けること、異常な現象を津波と認識できる地域の自然観が必要です。避難所は役に立たないではありません。田老の中学生・住民は、地震後標高10

m以上ある避難所にいたからこそ、津波の目視後であつても短い時間でさらに高い所へ逃げ安全を確保することができたのです。

第一小学校裏の高台にある自宅から海の様子と下方の避難状況の両方が見えた東キ又さん（元第一小学校教諭）は、避難を呼びかける声が届かないもどかしさを感じました。半鐘があればもっと犠牲を少なくすることができたのではないかと考えました。作文の中には防災無線についての記述がほとんどありません。観察したことを伝達する手段として、半鐘のような電源を要しない分かりやすいものの設置は検討課題の一つです。

「津波だ、逃げる！」の後逃げたのは背後の山でした。滑る山の斜面を登る人、体育館裏から三陸鉄道へと抜ける道を取る人と二手に別れ、整備されていた避難路は選ばれませんでした。避難路のある場所は若干海寄りです。このことが咄嗟の判断に影響を及ぼしたと思われまふ。避難路は日常きちんと整備され意識されなければなりません。しかし、同時に緊急時に備えて、山林にも簡易階段や手すりに代用できるものがあること、高台への最短コースに障害物が無いようにしておくことが必要です。

田老第一小学校も第二避難所に指定されていますが、被災時の状況は少し異なっていました。地震の後、8日前の避難訓練のように先生の指示で児童は校庭の中央に集合しましたが、大勢の保護者が児童を迎えに来ました。保護を必要とする年齢の子どもを預かる小学校の特殊性です。町民も多数避難してきており、ラジオからの情報があちこちに聞こえてきます。6mの大津波警報、宮古市で20cm

の津波を観測したとの放送の直後、ドンツという大きな音がし、次いでバキバキバキと木が倒される音がして、津波が家々を押し倒し校庭に近づきます。「逃げる」という声があちこちで上がり、児童は全速力で学校横の道路を歩いて上へ上へと逃げました。結果として、第一小学校まで津波は到達せず、しばらくして小学校へ戻ります。その後、小学校の体育館は被災した方々の避難所となりました。小学生という年齢、6歳から12歳という幅の広さを考慮した避難について改めて考えさせられました。小学校の先生には保護者への児童引き渡し対応という仕事がありました。また、情報収集についても新たな事実が分かりました。ラジオの情報よりも現場の状況が時間的に先を行くということです。異常な自然現象の真只中にあつては、何よりも現場の状況を観察し把握することが必要です。学校の組織の中で、あるいは地域と連携してその仕組みを作ることが大切だということが分かりました。

## （2）串刺しの津波防災学習

緊急事態の中で中学生は保育園児や高齢の町民の手を引いたり、背負ったり、リレーで手渡したり、励ましたりして全員の避難を達成しました。高台へ避難すると先生の指示があり、先生がいない場合は、生徒が自主的に点呼をとっています。山へ逃げる途中で住民を助けたり、学校が水に浸かった後も、次の津波を警戒して避難してくる人の誘導を数十分も行った生徒もいます。津波が地域の課題であるとの学習が徹底し、学校の教育活動の中でチームワークや

リーダーシップの育成がなされ、中学生に住民の避難援助の力があ  
りました。保育園から社会教育まで縦に貫く防災学習の仕組み  
を、山崎憲治氏（前岩手大学教授、地理学）は「串刺しの津波防災  
学習」として提案しています。佐々木茜峰さんは、子どもから大人  
まで楽しめるような行事をして自然とみんなが触れ合い絆が深まる  
ように、というアイデアを作文に著していました。

### （3）避難生活 自分達にできる最大限のことをした

震災当日の夜、中学生は学校の指示でまとまって宮古市田老総合  
事務所の会議室に宿泊しました。5人に一枚の毛布にくるまり、寝  
返りもつけない狭い所で緊張の一夜でした。それでも、友達同士協  
力してお年寄りに席を作ってあげる生徒もいました。膝をかかえ毛  
布もない先生方に尊敬と感謝の気持ちも持ちました。夕飯は被災を  
免れた民家が炊き出してくれた真つ白な塩おにぎりが3人に一つ。  
忘れられない味になりました。

翌日になっても火事と余震が続き、不安は続きました。第一小学  
校体育館は避難所になり、大勢の被災された方々が凍えるような寒  
さの中、身を寄せています。第一小学校と第三小学校の校庭にはヘ  
リコプターで救援物資が運ばれました。自衛隊の救援活動も始まり、  
大人は消火活動や救援活動に出かけます。田老一中生はすぐにボラ  
ンティア活動を始めました。夜明けとともに活動開始。川で汲んだ  
水を運んだり、毛布や食料などの物資を背負いかごに入れて三陸鉄  
道伝いに運搬するなど、日暮れまで自分達にできることを最大限し

た、と記述しています。何かせざるを得ない気持ちに駆られていた  
ようです。誰もが人の優しさを感じ、人に優しくなったのです。  
中学生は人の為に働く意思と力があります。中学生の役割を取り入  
れた串刺しの避難組織作りが可能です。

生徒会長の村井旬さんは携帯を使って外部に支援を呼びかけまし  
た。すぐに反応がありました。被災地では、支援をしろという多  
くの人達の思いを生かすノーハウがなく、不要なものが届いたり、  
数が不足しているためすべて廃棄したりという事もありました。生  
徒会長のとった方法は、このような不都合を避けるヒントになりま  
す。「市民参加型災害情報システム」というものが研究され始め  
ました。ネット上に必要な物の情報を載せ、応募が必要な数になっ  
たところで締切り、配達する、という仕組みが可能になりそうです

## 四 生徒達が津波体験から獲得したもの 態度価値ということ

田老第一中学校の生徒達が、震災からどのような影響を受けたか、  
作文からキーワードを抜き出してみました。「生きなければならぬ」  
「千年に一度の大震災を乗り越えた素晴らしい勇者」「僕は漁師になる」  
をもとに彼等が獲得したことを考えてみたいと思います。

### （1）生きなければならぬ

地震の後迎えに来た家族とともに車などで避難した当時小学生  
だった生徒達は、津波と直面した時の様子を描写しています。澤口  
倫代さんはお母さんと車で帰る途中、「黒くて渦を巻いた大きな波

が、堤防を乗り越えて家やお店を飲み込んでいく」のを見、お寺の方へ進路を変えました。運転しているお母さんを焦らせないように配慮するなど冷静でした。田老駅の近くに家がある鈴木優友さんは車で帰宅途中、野球場の方から上がる「得体の知れないしびき」を目にしました。津波と判断するとスピードを上げて、からも逃げた様子を書いています。自宅はその時に見たのが最後となりました。

高橋銀児さんは、家の高さほどもある「黒い水の塊」に追われ必死で逃げました。必死ということでは言い尽くせないほど、一つの行動が生死を分けるぎりぎりのものでした。ついに津波に追いつかれてしまいました。何とか逃げました。しかし、お母さんは亡くなってしまいました。決して忘れない、と言います。その作文に高橋さんは「生きなければならぬ」というタイトルをつけました。人はどこまでも生きたいと思うものである、懸命に生きようとするものである、だから、自分は生きなければならぬ、という決意が伝わってきます。命の尊さ、生きることの覚悟を表すこのタイトルは震災を体験した生徒達の気持ちを代表しています。

清水川未知さんも、家を流され、家族を亡くし、3月11日という残酷な日を決して忘れないと言います。しかし、自分を「田老復興の道を支える大勢の中の一人」と位置づけました。

辛く悲しい事実にも耐え前を向くことを可能にしたのは、強い自立心やともに歩む仲間。そして、みんなが一緒に学ぶ学校がそのような気持ちと関係性を育てました。

(2) 千年に一度の大震災を乗り越えた素晴らしい勇者

2011年の大津波は、行政や科学の専門家が想定していた宮城沖地震の規模を大きく上回り、貞観の大津波(869年)に匹敵するものでした。そのエネルギーは実に想定値の180倍であったそうです。そこで、千年に一度の大震災と言われます。上山さんは、この大震災を乗り越えた自分達のことを「千年に一度の大震災を乗り越えた素晴らしい勇者」と誇らしげに書きました。(上山さんは高校に進学してこの体験を「僕を成長させた震災」と題する作文にし、第26回感動作文コンクールで文部科学大臣賞を受賞しました。)

一秒を争う津波からの避難のとき、大澤有峻さんは保育園児を4人も背負って逃げました。加倉侑輝さんは何度も下に降りて後から避難する子どもやお年寄りをおぶって上まで運びました。多くの中学生が他者を助けて命にかかわる避難を成し遂げました。

震える寒さの中余震が続き、「これ以上ない」というような悲惨な状況の中で「不安と恐怖で胸が締め付けられるよつでした」が、みんなが「笑顔」を見せ、ポジティブであろうとしていたと書かれています。松本一真さんは、何十キロもの支援物資を運ぶボランティア活動を「つらい気持ちより楽しい気持ちの方が多かった。多分人の役に立つことがうれしかったのだと思う」と述べています。黒田瑞希さんが、毎日線路の上を歩いて思い物資を運び、足はガタガタでした、と書いているように、簡単な仕事ではなかったのです。が、「でも、ボランティアをやめることはありませんでした。それは、田老が好きだったからだったと思います」と続けます。瀧田莉捺さ

んも、少しでも誰かの役に立とうと避難所に手伝いに行きました。本当に「素晴らしい勇者達」です。

### (3) 態度価値の獲得

今まで築いてきた財産やキャリアがすべて奪われ、家族や愛する人まで引き離されて、看守の指の動き一つで命さえも決定されるといふ非人道的な状況が、第二次世界大戦中ナチスの支配下でありました。ナチスは身に着けていた時計や靴、密かに下着にしのばせていた愛する人の写真まで奪いました。しかし、決して奪うことができないものがあつたと『夜と霧』で著者フランクは述べています。ほとんど実の入っていないスープだけの食事でした。そのスープを飢えた同房の人に譲り、翌日息絶える人もいました。この人がスープを他者に譲りたいと思つ気持をナチスは奪うことはできなかったのです。この運命を受け止める態度によって実現される価値を、フランクは「態度価値」と呼んでいます。

死の気配を感じるほどの不安の中で、他者の安全にまで気を配れないことがあるとすれば、それは仕方のないことです。しかし、田老第一中学校の生徒は、誰が指示したわけでもなく、誰が強制したわけでもないのに他者への「態度」を示しました。上級生の力強い行動は下級生のお手本となり、多くの生徒が「協力」「思いやり」が最も大切だと思つた、と書いています。中学生は極限の厳しい状況の中で、「態度価値」といふ、何者も、牙をむいた自然さえも奪うことのできない価値を獲得しました。

### (4) 僕は漁師になる

田老は漁業の町です。佐々木俊介さんのおじいさんは漁師でした。この津波で亡くなりましたが、佐々木さんは、かっこいい海ではなかつた、と述べています。田川尚樹さんは、今までの優しい海ではなかつた、だが怖いとは思わなかつた、この海に勝たなければならぬと思つた、と述べ、漁師になりたいと思っています。影田久保樹さんもたくましい海の男になりたいと願っています。

看護師や医者・教師・自衛隊員・料理人などの職業を挙げる人もいます。具体的な仕事は挙げなくても、人の役に立ちたいとの思いが述べられています。態度価値を獲得した中学生の描く未来は、他者や地域の役に立つ人としてあることです。まさに復興の担い手なのです。

### おわりに

津波は個人への被害をもたらすだけでなく、地域社会・生産の場を破壊する広域システム災害です。地域の復興がなければ、子ども達の未来も保障できません。また、地域の未来を考え、未来を作るエネルギー能力を持つ子ども達を育てていかなければ、地域の復興は成りません。まさに、「地域の学校」という役割が今学校に求められています。

東日本大震災後の一年間、岩手県では教員人事が凍結され、震災を体験した教師が被災地で奮闘しました。地域をよく知り深い愛着を持つ教師が地域社会と意思を共有しながら教育活動を進めることの意義を示す試みとなりました。田老第一中学校での作文指導は、先生と子ども達が

協働して学校を作っていく実例の一つです。

佐々木校長は本文集のタイトルを「いのち」としました。「命でんてんこ」ということばで津波から「命を守る」ことが語り継がれている田老での復旧・復興にあたり、犠牲になられた方々への慰霊の気持ちが込められています。

震災から2年。復興の道のりは遠く、被災地が周辺化されている全国的な現状を思うと、田老第一中学生の姿は現代社会のあり方への問題提起となり、現代人が失ったものをこの作文集の中で輝かせてくれています。



高台から見た新緑の田老

2011年6月撮影

(注)

『地域ガイド 津波と防災』語り継ぐ体験』第7刷、岩手県田老町編、2005年および『田老町史 津波編』田老町教育委員会編、2005年による。

震災当時田老診療所の医師であり、患者の避難誘導と震災後の被災者の診療・被害者の検体にあたった黒田仁医師は、『救命』（海堂尊監修、新潮社、2011年）の中で、防潮堤の役割を 外側の堤防は第一波を止めた 津波がぶつかり水しぶきをあげ、津波来襲を知らせた 避難の時間を与えた 家屋の残骸・財産・ご遺体の海への流出を防いだ 防災意識を与えてくれた、と分析し防潮堤への感謝を述べている。(P.218)

田老第二中学校はかつて田老銅山の近くにあり、田老第三中学校は小学校と併設で2011年3月まで併待にあつた。第三中学校閉校時の校長荒谷栄子先生は初代校長荒谷功二先生と牧野アイさん夫妻の娘である。

8日前は3月3日。昭和8年3月3日の大津波を忘れず、この日に避難訓練が行われていた。

田老在住で、紙芝居により津波への警戒を訴え続けた田畑ヨシさんのことば。田老一中の加藤諒太さんの作文コンクール最優秀賞作品はこのことばをタイトルとしている。(P.88 参照)

田老地区の死者・行方不明者181人。(宮古市調べ)

# 平成二十三年 卒業式式辞

宮古市立田老第一中学校 校長 佐々木 力也



# 平成二十三年卒業式 式辞

宮古市立田老第一中学校 校長 佐々木力也

はじめに、様々な立場から、日々、岩手県や宮古市の復興に向け全力で取り組んでいらっしゃる中、関係各位のご臨席を賜りましたことに対し、心より厚く御礼申し上げます。

さて、卒業生のみなさん、先ほどお渡しした卒業証書には、三年間のみなさん自身の頑張り、中学校入学以来、ひたすらみなさんの成長を願い、愛情を惜しげもなく注ぎ続けてこられたお家の方々のあたたかな愛情と、熱心に指導してこられた先生方の努力が込められています。

そして、卒業生一人一人が述べたスピーチには、三年間を振り返り、未来への展望や思いを持った力強いメッセージがこめられ、心から感動しました。

私たち教職員一同、改めて、みなさんと出会えたことを喜び、中学校の全課程を修めて巣立つみなさんの門出をお祝いし、更なる成長と活躍を心から期待し、「卒業おめでとう」と言いたいと思います。

みなさんはこの三年間、勉強に部活動に生徒会活動によく頑張りました。特に、この一年間は、震災後のボランティア活動や体育祭や文化祭などの学校行事によく頑張り、みんな立派に成長しました。

四月二十五日には、田老一小で入学式を迎えました。村井生徒会長の新入生歓迎の言葉が、生徒会活動の原動力となりました。「私達田老一中生も一致団結してこれから生活していきましょう。私達は津波のことを忘れてもいけないし、津波のことを引きずってもいけません。現実を受け止め、一人一人ができることを精一杯やっていきましょう。田老の先人たちの後を継ぐのは私達田老一中生です。」と言い切り、生徒全員が「おーっ」と応えていた光景をいまだに思い出すことができます。

六月の中総体では、五月上旬から練習を開始しましたが、十分な練習時間と場所が確保されない中であっても、各部が善戦しました。特に、野球部は、対一中戦で、前半0対7で負けていたにもかかわらず、最後は特別延長戦により九対八の大逆転により一回戦を見事に突破しました。

全ての環境が変わり、九月二十日までは、田老一小での学校生活が始まりましたが、本校の校庭を七月末日で完全に修復していただき、八月一日からは新しい校庭で部活動や陸上の練習を再開し、九月二十一日には、本校の二階と三階で授業を開始しました。十日後の十月一日の体育祭では、準備期間が少ない中であっても、一人一人が競技や応援に完全燃焼する姿を見せてくれました。体育祭で見せた三学年のまとまり、心を震わす勇壮果敢な応援合戦。早稲田大学応援部との応援の演武披露、それらを通して、生徒にはもちろんのこと、田老地区の皆さんの心にもしっかりと田老一中生の元気のよさ、躍動感、そして、田老の復興に向けて協働し努力する若い力を伝えることができました。

文化祭の全校合唱の「ボイジャー」には、大きな感動をもらいました。西根一中との交流もあり、合唱交流を通して、真の意味で、人と人が繋がれ、さらに結びつきの強い、大きな絆が形成されたと思います。

三月十一日から一年が経過しました。ここで、震災当日のことを振り返りたいと思います。その理由は、震災直後に本校生徒が見せたたくましい行動力、その強さと優しさを皆さんにお伝えしたいからです。

震災当日の地震発生時は、六校時目の授業の最中でした。翌日は、卒業式の予定でした。午後二時四十六分の長い地震に驚きと焦りを感じながら校長室か

ら外に飛び出し、用務員の琴畑さんと一緒に、一階にいた三年生に対し、「外に出なさい。」と叫びました。日頃の避難訓練の成果もあり四分で校庭に避難することができました。体育館で、卒業式の練習をしていた一、二年生の生徒も校庭に避難することができました。

ラジオの情報や防災無線だけが判断の頼りであったわけですが、正直、判断の難しさを痛感しました。判断を迷わせた理由は、防災無線の音が不明瞭であること、明治二十九年、昭和八年の三陸大津波に遭っても本校が被災から免れ、平成十七年度から津波シェルターになっていることや防浪堤の存在があったからです。

「津波はここまでは来ない。」そう思いました。「まずは、三時十分まで待とう。」しかし、余震が何度かあり、最終的に「三時三十分まで待機し、様子を見よう。」と伝えました。その時、三時十分過ぎ頃、田老湾方向に約三十メートルの高さの、まさに東京スカイツリーのようにそびえ立つ水柱を発見しました。用務員の琴畑さんが、すかさず「津波だ、逃げる！」と、声を発したことが避難行動の引き金となり、生徒も教職員も一斉に高台を目指して走っていきました。校庭に避難していた田老の住民や保育園の園児たちも、田老一中の行動を見て、一斉に動き始めました。そして、四つん這いになりながらも必死に山を登り、常運寺の墓地に避難しました。

しかし、学級学年ごとに人数確認をした結果、何人かの生徒が別ルートで避難した可能性があるかと判断し、若手男性教員とともに捜索にあたりました。結局、生徒全員の安否を確認し、皆が無事であることを確認できるまで一時間以上も要した理由は、「津波だ。逃げる。」の声で一斉に避難を始めたわけですが、何人かの生徒は、機転を利かせ、体育館の裏手から三鉄の線路を通り小学校方面へ避難したからです。日頃から、学校周辺の地理に明るい生徒たちは、冷静に校舎周辺の状況を判断し、主体的に行動することで津波から自分の命を守りました。当初、常運寺で人数の確認をした時には、焦りの色を隠せませんでした。最終的には、全員が無事であることがわかり、とても安堵いたしました。

山を登った生徒や若手教員がとった行動についてお伝えします。常運寺までたどり着くまでには、全ての生徒、住民の皆さんは大変苦労したと思います。振り返り、眼下を見下ろせば、津波が瓦礫を食って、少しずつ校庭を埋め尽くす様子が迫る中、必死になって山を登ったからです。その中であっても、何人かの生徒や若手教員は、たくさん保育園児やお年寄りの手を繋いだり、恐怖で足がすくみ、歩行がままならない人たちを背負ったりしながら、安全なところまで誘導していました。

また、後日の報告で得た情報では、体育館の裏手から避難した生徒たちは、周辺の土地が不案内な住民の方々を、「三鉄の線路をたどっていけば一小に通じます。」と避難誘導したそうです。改めて、田老一中の生徒の主体的に行動するたくましさや優しさ、たのもしさを感じました。

その後、震災直後から、スタッフジャンパーを着て、支援物資を運搬する等のボランティア活動を何日も何日も続けた生徒たちがたくさんいることを目の当たりにしました。自分の家屋が被災したにもかかわらず、前向きに田老の復興のため、厳冬の中、ボランティア活動に果敢に取り組む姿を見て、田老一中の生徒を誇りに思ったことは私だけではなかったと思います。

このように、本校の生徒たちは、被災地被災校の生徒たちではありませんが、この一年間の過酷な学校生活や地域の生活現実の中にあっても自分の持てる力を十分に発揮し、命を守り、田老の復興にも寄与し、心身ともに大きな成長を遂げたことを確信しています。

この一年間の教育活動では、生徒会の活動や総合的な学習の中で、様々な団体や個人からいただいた大きな支援に対する「恩返し」の活動を大切にしてきました。そして、九月二十三日には、花壇に、「返礼」の花言葉を持つ「ハナミズキ」の木を植樹しました。

震災直後から、テレビで、「心はだれにも見えないけれど、心遣いは見える。思いは見えないけれど、思いやりはだれにでも見える。」という、詩人 宮澤 章二氏の「行為の意味」という詩の一節が、何度も何度も流れました。

「行為の意味」という詩の中で、「あたたかい心が、あたたかい行為になり、やさしいおもいが、やさしい行為になる時、心もおもいはじめて美しく生きる」と、宮澤章二さんは述べています。

気持ちやおもいを行為で表現することの難しさを感じたことは何度もありました。表現したものの、相手の心に届かずじまになったものもあると振り返ることがよくあります。しかし、この一年間、全ての活動の中に、少なくとも、心の中では「返礼」の意味を理解し、おもいを積極的に表現しようとする生徒が努力してきました。

サッカー部の上山凌君は、試合の前、陣を組み「中総体優勝という夢のために、勝って、サッカーができることに感謝して、恩返しの意味でプレーしよう。」と仲間伝えたそうです。「田老が優勝すれば恩を返せるのかなと思いました。」とも述べています。気持ちのいい生徒がいると感心しました。体育祭や文化祭で見た、生徒の応援や合唱も、田老一中の生徒による最大限の「返礼」活動の一部であるといえるでしょう。

そして、この一年、様々な支援を受け、ここまで田老一中は来ています。

ここで、支援物資として受けた、本校として心に残る大切な贈り物を紹介させていただきます。

その一つは、ここにある濃紺のTシャツです。卒業生に贈ってほしいということで、田老出身の東京の中野共立病院に勤務されている山本英司先生から、サプライズのプレゼントとして、昨日、宅配にて送られたものです。このTシャツは、もともとは、本校生徒会がデザインし、「我等進まん、あきらめず、ひるまず、手をつなぎ、心を合わせ、未来への道作るべし」とプリントされています。未来に対する生徒の意志が表明されています。山本先生、本当にありがとうございました。山本先生とは、四月十日からの修学旅行で、宿泊先ホテルで再会する予定です。

二つ目は、県田老人会の皆様からのご支援のもと、新調した「田老第一中学校の学校旗」です。吉川繁行会長さんからは、「新しい校旗を見て、絶対に諦めたいけない気持ちを奮い立たせてほしい。」と激励の言葉をいただきました。本当にありがとうございました。

この二つの品々の他、本年度、本校に対し、数えきれない支援物資が日本国内からはもとより、世界各国からもおくられました。私たちは、多くの皆様から大きな期待がかけられている、ということを理解しなければなりません。そして、その期待に応えるべく、常に前を向いて進んでいかなければなりません。卒業生の皆さんには、損壊した防浪堤や日々変わる田老の現実を見ながら、未来への自分の姿をしっかりと描き、可能性は小さくとも、大きな夢を持ちながら、前進してほしいと思います。

そして、数多くの教訓に学び、「生きる意味」を問い続け、将来、岩手や日本の復興のため、一人一人が選んだ未来の道で、活躍できる人間に育ってほしい。そのためには、どのように社会が変化しようとも、常に勉強し、自分の得意なところを伸ばしてほしいこと、弱者優先の精神をもとに人を思いやり、協力・協働して物事に取り組めるようになってほしいこと、体を鍛えること、そして、よい仲間関係を生涯にわたって大切にしてほしいと心から願うばかりです。

平成二十三年度の卒業式も忘れ得ぬ日となりました。皆さんの門出を心から祝福したいと思います。「卒業おめでとう」

平成二十四年 三月十五日

# 震災後の学校の歩み

## 「入学生歓迎のあいさつ」 生徒会長 村井 旬

寒い冬が過ぎ、田老にも桜が咲きました。そして今日は私たち2、3年生が心待ちにしていた入学式の日です。午前中には、もと田老三中の皆さんとともに笑顔を忘れずに進もうと誓った始業式がありました。2年生39人に新入生44人が加わり、平成23年度の田老一中がスタートしました。

震災の日から普通のこと普通でなくなり、普通でないことが日常の一部になったりしています。田老の町並みは消え、がれきの山となった町。しかし、少しずつもとに戻りつつあります。

それはいつまでも人の力です。市役所、自衛隊、警察、消防団の方々が一丸となり、普通に戻そうとしてくださっています。だから、私たち田老一中生も一致団結して、これから生活していきましょう。

私たちは津波のことを忘れてもいけないし、津波のことを引きずってもいけません。現実を受け止め、一人ひとりができることを精一杯やっていきましょう。それがいつか田老の町を再建することにつながるのだと思います。

校歌の3番に私たちの進むべき方向が示されています。

「防浪堤を仰ぎみよ 試練の津波幾たびぞ 乗り越えたてし我が郷土 父祖の偉業や跡つがん」

田老の先人たちの跡を継ぐのは私たち田老一中生です。私たちはどんな時でもあきらめず、笑顔を忘れず、今までよりも強く温かい田老一中を、みんなの力で作り上げていきましょう。

頑張れ田老！頑張れ一中！

(平成23年4月25日、田老第一小学校で行われた田老第一中学校入学式で、生徒会長、村井旬君の入学生歓迎のあいさつ文)



## A Welcome Speech at the Entrance Ceremony of Taro Daiichi Junior High School

on April 25<sup>th</sup>, 2011  
by Jun Murai

The cold winter is over. Even in Taro Town, cherry blossoms are in bloom and we, 2<sup>nd</sup> and 3<sup>rd</sup> year students of Taro Daiichi (First) Junior High School, are having an entrance ceremony today which we have been looking forward to. In the morning, we attended the opening ceremony and we made a vow that we will go forward together with the students from the former Taro Daisan (Third) Junior High School\*, with smiles. Today we have 39 new 2<sup>nd</sup> year students and 44 freshmen. The new academic year of 2011 at Taro Daiichi J.H. has just started.

Since March 11<sup>th</sup>, what was common before hasn't been common, and what was not common before has been common in our daily lives. The stores and houses on the streets of our town have disappeared. Instead, our town is filled with debris. However, things are starting to recover little by little.

It takes all the efforts of the people. Civil servants in the municipal government, the Self Defense Force, and members of the police and the fire station are doing their best to move along our town's recovery. Therefore, we, students of Taro Daiichi J.H., will also unite and move forward.

We should neither forget the tsunami disaster nor dwell too much on it. We should accept what has happened and do what we can do as much as we can. Then, we will be able to restore Taro Town some day.

The 3<sup>rd</sup> verse of our school song shows us the direction to which we should advance:

Look up at the great dikes  
Many tsunamis have hit our town  
But our ancestors have overcome them again and again  
Let us succeed in their great efforts

It is we, the students of Taro Daiichi J.H. that will succeed in the efforts of our ancestors. We will never give up. We will keep smiling. We will create a stronger and a more warm-hearted Taro Daiichi J.H. with all our might.

Stay strong, Taro Town! Stay strong, Daiichi J.H. !

\*Taro Daisan (Third) J.H. was merged with Taro Daiichi (First) J.H. in April, 2011.

(From a welcome speech made by Jun Murai, President of the student council, at the entrance ceremony of Taro Daiichi Junior High School, which was held at Taro Daiichi Elementary School on April 25<sup>th</sup>, 2011.)

Translated by Tomoko Yamazaki  
( Proofread by James Hall )

# 平成二十四年度学校経営の概要

## 1 学校教育目標

- 真理を求め創造する生徒（知）
- 心豊かな責任感の強い生徒（徳）
- 生命を尊び健康な生徒（体）

## 2 目指す学校像

- 活 さわやかな学校
- 律 けじめとまとまりのある学校
- 美 きれいでうるおいのある学校

## 3 学校経営の基本方針

- (1) 各生徒がおかれている社会生活の環境や現実を十分に理解し、教育活動の企画・運営を行う。
- (2) 岩手の復興・発展のため、明るい未来を展望し、持てる力を十分に発揮し、主体的に行動できる生徒を育成する。
- (3) 自分自身を見つめ、他者や社会と自分とのかかわりをとらえ自立的に行動できる生徒を育成する。
- (4) 学校、保護者、地域が未来を担う生徒の育成について、共通の認識を持ち、協働して教育活動に取り組む基盤を作る。

## 4 今年度の教育活動の重点

- (1) 震災の記録と発信
- (2) 命の教育活動



## 田老～果てなき大海原へ

### Tシャツが結ぶ絆

宮古市田老地区出身の中野共立病院・山本英司副院長は、震災直後から田老町に入り支援活動をされました。震災が発生した11日、テレビで被害の大きさを知り、その日の夜に車で自宅を出発され、高速道路の規制の中、27時間かけて盛岡に到着されました。その後、宮城での応援診療の要請もあったそうですが、「田老に行く。」と断り、田老診療所長の黒田仁医師らと協力して、避難所での診療に従事されました。

Tシャツは、病院の患者さんやスタッフの皆さんからの資金援助を元に、本校生徒会がデザインし、製作していただいたものです。最初は青色のシャツを、翌年には濃紺のシャツをいただきました。4月当初の修学旅行時には、宿泊先で山本先生をはじめ友の会の皆さんと交流会を持った他、11月の連合音楽会では、全校生徒が濃紺のシャツを着用して全校合唱に臨みました。

Tシャツの背中には「果てしなき大海原へ 我等進まん あきらめず ひるまず 手をつなぎ 心を合わせ 未来への道作るべし」とプリントされています。生徒たちの前を向いて未来へ進む意志を表明しています。





# 学校日誌より

## 平成二十二年度 学校日誌

### 【3月】

- 11日(金)・修了式  
 ・東日本大震災津波  
 ・田老総合事務所に避難(在籍129名：欠席者7名)  
 12日(土)・卒業式中止  
 ・朝から田老総合事務所に避難していた生徒を保護者等が引きとる・No.30常運寺で教職員解散  
 (15日正午に田老一中に集合する旨確認)  
 15日(火)・教職員全員12:00学校集合  
 16日(水)・岩手日報「逆境 必ずはね返す」  
 生徒のボランティア活動の記事が掲載される  
 17日(木)・平成23年度人事異動方針発表  
 20日(日)・読売新聞「おばあちゃん乗って」  
 おばあちゃんを避難所から介護施設へ背負って移動する生徒の記事が掲載される  
 22日(火)・県立高等学校入学者選抜合格発表  
 23日(水)・臨時校長会議  
 24日(木)・合格証書授与(10:00～)  
 ・卒業証書授与(11:00～田老一中3階多目的教室)  
 29日(火)・岩手大学山崎友子教授来校

## 平成二十三年度 学校日誌

### 【4月】

- 1日(金)・辞令交付式  
 ・副校長 甲谷清隆、教諭 暮目靖子、教諭 安藤聖子着任  
 ・田老一小での間借り学校生活が始まる(～9月20日)  
 ・田老三中与統合、一中へ編入学  
 4日(月)・職員会議 学校経営の基本方針を示す  
 生徒や家庭  
 ・地域の生活現実を十分に理解し、教育活動やPTA活動をを行うこと  
 田老や岩手の復興のため、明るい未来を展望し努力することが出来る生徒を育成すること  
 6日(水)・田老一小へ椅子や机等の搬入作業  
 ・新入学生説明会  
 7日(木)・職員会議  
 8日(金)・臨時登校日  
 10日(日)・校庭の瓦礫が完全に撤去される  
 11日(月)・児童生徒のこころのサポート研修会  
 ・家庭や避難所訪問(～13日)  
 14日(木)・職員会議(～15日)  
 18日(月)・家庭訪問(～20日)

・講師 島野洋亮着任  
 21日(木)・一小へ荷物移動  
 25日(月)・紹介式

・始業式  
 ・入学式(田老一小体育館:1学年44名、2学年39名、3学年46名 計131名)  
 ・八幡平市社会福祉協議会のカレライスの炊き出し昼食  
 ・プールの瓦礫撤去

【5月】

6日(金)・教職員のメンタルヘルスセミナー  
 9日(月)・部活動合同トレーニング開始  
 10日(火)・避難訓練  
 30日(月)・生徒指導事例研究会

【6月】

1日(水)・刈谷和人臨時事務職員 着任  
 3日(金)・岩手大学山崎先生、留学生による特別授業(社会、英語)  
 6日(月)・校内研究会  
 ・生徒指導事例研究会  
 9日(木)・参議院文教部会視察(橋本聖子議員他12名来校)  
 13日(月)・授業参観  
 ・PTA総会  
 ・学年懇談会  
 14日(火)・岩手大学留学生との特別授業(英語)

15日(水)・田老一小プール清掃・防災教育講演会(山崎正幸氏)  
 16日(木)・壮行会  
 18日(土)・宮古地区中学校総合体育大会1日目  
 19日(日)・宮古地区中学校総合体育大会2日目  
 23日(木)・津波注意報発令のためスクールバス1時間遅れで運行  
 (7:50注意報解除)

【7月】

1日(金)・1学期期末テスト(2日目4日)  
 2日(土)・早稲田大学、宮古北高等学校ボランティア部校舎内及び校庭清掃  
 ・早稲田大学鎌田総長来校  
 4日(月)・校庭整地作業開始  
 5日(火)・生徒指導に関わる職員会議  
 6日(水)・自衛隊によるコンサート  
 8日(金)・生徒総会  
 14日(木)・職員会議  
 19日(火)・岩手大学ALITによる特別授業  
 21日(木)・1日授業参観  
 22日(金)・宮古北高等学校体験入学・楽器贈呈式  
 25日(月)・1学期末面談(〜27日)  
 28日(木)・防犯講話  
 ・1学期終業式  
 ・野球グラウンド土盛り工事  
 29日(金)・夏季休業(〜8月17日)

- ・ 田老三小から高飛び用具搬入
- ・ 校舎内清掃ボランティア活動
- 31日(日)・校庭完全修復

【8月】

- 1日(月)・校庭で部活動、地区陸上練習開始
- 2日(火)・枚方市教員による校舎内清掃と草取り作業、学習支援等
- (～3日)

- 4日(木)・仮設住宅夜間巡視
- 7日(日)・放射線量測定(問題なし)

- 8日(月)・岩手大学の支援による3学年学習会(～10日)
- ・岩手大学夢灯り設置作業(～9日)

- 18日(木)・2学期始業式
- ・実力テスト

- 23日(火)・宮古地区陸上競技大会
- 24日(水)・国道45号線に花を咲かせよう活動

- 25日(木)・職員会議
- 27日(土)・資源回収

- 29日(月)・講師 佐藤勝之着任
- ・修学旅行説明会

- 30日(火)・宮古地区駅伝大会

【9月】

- 1日(木)・2学年宿泊研修

(八幡平市、西根第一中学校との部活動交流)

- ・ 事務支援員 中島理英着任
- 2日(金)・1学年校外学習(岩泉町)

- ・ 2学年宿泊研修(盛岡市)
- 5日(月)・3学年修学旅行(～7日東京方面)

- 7日(水)・私の主張宮古地区大会
- (加藤諒太「命てんでんこ」最優秀賞)

- 10日(土)・宮古地区新人大会(～11日)
- 15日(木)・体育祭取り組み開始

- 20日(火)・田老三小から引越し作業
- 21日(水)・修復途中であるが本校舎に戻り授業開始

- 27日(火)・YJMO弦楽アンサンブル演奏会
- 28日(水)・職員会議

【10月】

- 1日(土)・体育祭(早稲田大学応援部8名来校)

- ・ 講師 齊藤 実可子着任

- 5日(水)・避難訓練・楽器贈呈式
- 7日(金)・中間テスト

- 10日(月)・田老地区体育大会(グリーンピア)
- 18日(火)・上山美恵子ソプラノコンサート

- 21日(金)・桐朋中学校来校

- 22日(土)・学習成果発表会(西根第一中学校との合唱交流)
- 27日(木)・職員会議

【11月】

- 6日(日)・授業参観日
- 8日(火)・学習定着度状況調査
- 16日(水)・安藤学級 校外学習
- 18日(金)・校舎修復工事第1回打合せ
  - ・ 高校入試事務説明会
- 19日(土)・県新人戦(バレーボール部)
- 24日(木)・職員会議
- 29日(火)・京都フィルハーモニーコンサート

【12月】

- 5日(月)・2学期期末テスト(～6日)
- 13日(火)・生徒総会
- 15日(木)・職員会議
- 18日(日)・吹奏楽アンサンブルコンテスト
- 20日(火)・2学期期末面談(～22日)
  - ・ 消火器操作講習会(～22日)
- 27日(火)・2学期終業式

【1月】

- 11日(水)・3学期始業式・実力テスト
- 14日(土)・資源回収活動
- 16日(日)・避難訓練
- 19日(木)・1日授業参観日
- 25日(水)・田老三中理科備品搬入

【2月】

- 3日(金)・山本市長の熱血授業(2年A組)
- 7日(火)・新入生説明会(田老一小)
- 21日(火)・修学旅行説明会
- 23日(木)・感謝と激励の会

【3月】

- 2日(金)・修卒認定会議
- 6日(火)・サーモン教室 卒業式
- 7日(水)・新入生入学説明会(田老三小)
- 9日(金)・公立高等学校学力検査
  - ・ 3学年奉仕活動
- 13日(火)・1階校舎修復完了
  - ・ 体育館への渡り板搬入
- 14日(水)・修了式
- 15日(木)・卒業式
- 16日(金)・公立高等学校合格発表
- 19日(月)・図書室 環境整備
- 23日(金)・離任式
- 26日(月)・PTA送別会
- 29日(木)・避難場所指示灯設置工事

吉吉市立田老第一中学校 学校がより・・・・・・平成24年度版校報「田老第一中学校」

# 田老第一中学校

夢てなき大津波へ 残らぬ人 あきらめず がんばる 力をつなぎ 心を合わせ 未来への道を探るべし

■■■■ 2012年11月21日(水)

吉吉市立田老第一中学校 編 01933-87-2531



11月16日(水) 生徒会役員及び立会委員真似会。全員が参加し、19日(月)には認証証書を受けました。学校生活をよりよくなるため、決意をかたみにしてほしい。



授業の様子。20日の100分授業で実践されました。

◆11月16日(金)に岩手大学の留学生の皆さんに、紙芝居「つなみ」英語版を朗読披露する特別授業を行いました。留学生は7名(米国、メ、フィリピン等)。グループに分かれ、朗読特別の成果を披露しました。授業では、「We're the world」の合唱もあり、楽しく有意義な1時間となりました。



「ぼくはあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと思える。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。」(平成23年度 わたしの主張優秀 加藤隼太)

◆女子バレー部は田老の希望、負けたことを悔やむよりも、来年度中団体に向けたビジョン(目標)を立て頑張れ!



見事に勝利! 1回戦対西根中に2-0で快勝

■岩手県中学校文化祭 展示部門に各種作品展示  
○美術部門:3年松本一真 2年高橋颯児  
○工芸部門:1年久保田萌香、佐々木りの、山本紗音立  
○書道部門:3年佐々木みく、高山彩香 2年丸山茜生、山崎ひより(県民会館で22日~25日まで展示予定)

★吉吉市PTA研究大会(11月12日新報中)松本会長が年次表彰を受賞されました。また、山本和則さんが健全育成標語で入選に輝きました。「未来へと一歩の力で 復興を」おめでとうございます。

●島山紗梨奈さんが、FM岩手社と家康の作文コンクールで、「優秀賞」を受賞しました。題「十八歳の兄へ伝えたいこと」また、●小池紗恵さんが、東北電力第38回中学生作文のナで優秀作品(10編)に選ばれました。題「お母さんありがとう」おめでとうございます!



●吉吉地区合唱大会に3名が参加(11月21日山形公民館)  
・木村優樹 (Pincer-D'amor)  
・佐々木あずさ (初恋)  
・佐々木翔太郎 (Caro mio ben)  
恋左の写真は、11月15日に朝日新聞に掲載された記事です。



「ぼくはあの日のことをたくさんの人に伝えたい。命を大切にしようと思える。そして、決してあきらめず僕らの未来を作りたい。」(平成23年度 わたしの主張優秀 加藤隼太)





震災後咲いた桜と校舎

**東日本大震災津波**

**関連資料**





「3.11 無常の雪」3月12日午前5時39分 田老総合事務所 3F 大会議室窓越しから撮影



「瓦礫に覆われた校庭」3月12日午前9時3分 公民館側とバックネット裏から撮影



「被災した職員室と3年生教室」3月12日午後3時26分撮影



「3.17 無常の雪ふたたび」3月17日午前8時47分撮影



「瓦礫の山が生徒玄関・職員玄関にまで」3月18日午前8時3分撮影



「捜索活動の消防団員、被災した校庭の様子」3月18日午前9時43分撮影



「被災した生徒用玄関の外と中の様子」3月13日午後3時26分撮影



「支援物資を運ぶ田老一中生、校舎裏の被災状況」3月16日午前10時44分撮影



「津波の高さ：職員室内と職員室外の津波の痕跡」12月12日午前8時25分撮影

“我等進まん あきらめず ひるまず 手をつなぎ 心を合わせ 未来への道作るべし”



9月5日 2泊3日の東京方面修学旅行



平成23年 3月24日 平成22年度卒業式



9月19日 西根第一中学校との部活動交流



4月25日 平成23年度入学式



9月23日 東京三菱UFJ銀行「ハナミズキ」の植樹



4月26日 中畑監督、松村さん、篠塚選手来校



9月27日 YJMO 弦楽アンサンブル来校



7月2日 早稲田大学鎌田薫総長来校



10月1日 復旧した校庭で体育祭開催



8月24日 国道45号線に花を咲かせよう

“私たちは 津波のこと忘れてもならないし 津波のことを引きずってもいけません”



2月3日 感謝と激励の会



10月18日 上山美恵子&須江太郎コンサート



3月14日 平成23年度卒業式



10月22日 学習成果発表会



4月6日 平成24年度入学式



11月29日 京都フィルハーモニー室内合奏団来校



4月10日 修学旅行 早稲田大学大隈講堂



12月15日 リーガロイヤルホテルからクリスマスケーキプレゼント



4月11日 修学旅行 山本英司先生と交流会



平成24年 2月3日 山本市長の熱血授業

“防浪堤を仰ぎみよ 試練の津波 幾たびぞ 乗り越えたてし 我が郷土 父祖の偉業や 跡つがん”



5月12日 体育祭



4月10日 修学旅行 リーガロイヤルホテルで交流会



5月12日 体育祭



4月11日 修学旅行 茗台中学校訪問



6月11日 田畑ヨシさんの紙芝居「つなみ」朗読



5月1日 男性合唱団「極(きわみ)」来校



6月18日 中総体野球 地区大会3位入賞



5月12日 体育祭



7月22日 県中陸上加倉侑輝君 400M5位入賞



5月12日 体育祭 早稲田大応援部2度目の来校

“ぼくはあの日のことをたくさんの人に伝えたい 命を大切にしよう伝えたい”



9月20日 2学年松園中で紙芝居「つなみ」の朗読



7月27日 下橋中、城西中と部活動交流



9月21日 1学年吉塚牧場で山地酪農体験学習



7月31日 篠塚野球教室開催



9月27日 岩大地域防災研究センター堺センター長の講演



8月29日 岩手大学山崎友子教授による特別授業



10月7日 田老地区総合体育大会



8月30日 フェアリーバレエ団来校



10月20日 県新人戦陸上競技

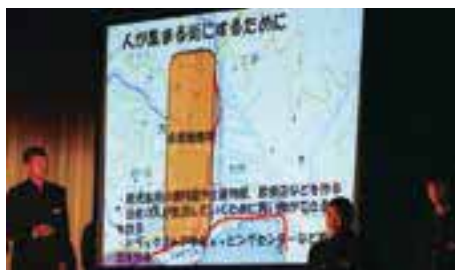


9月18日 1学年藤原埠頭瓦礫処理見学

“ 田老は絶対復興して元にもどります おいしい思い出も 楽しい思い出もつくれるくらい もどります ”



11月16日 2学年岩大留學生に「つなみ」英語版披露



10月27日 文化祭 1学年復興マップ発表



11月17日 県新人戦女子バレーボール部



10月27日 文化祭 3学年合唱「通り過ぎる風の中に」



12月7日 3学年日清製粉の支援を受けクッキー作り



10月27日 文化祭 2学年職場体験学習報告



平成25年1月14日 大船渡駅伝に3チームが初参加



10月27日 文化祭 3学年修学旅行自主研修報告



1月15日 グリーンピア仮設住宅でスノーパスターズが始動



11月14日 連合音楽会「あの日から」全校合唱



平成 23 年 3 月 16 日 岩手日報

岩手日報 2011年(平成23年)3月16日(水曜日) 社

# 逆境 必ずはね返す

【本紙記者の報告】  
 宮古市立宮古中学校の生徒は、3月15日(土)に発生した東北地方太平洋沖地震の影響を受け、授業が中断された。生徒たちは、被災した地域を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。

## 10人協力被災の傍ら奮闘 水や燃料被災の傍ら奮闘



避難所へ物資を運ぶ生徒たち。被災地へ物資を届ける活動を行っている。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。

宮古市立宮古中学校の生徒は、3月15日(土)に発生した東北地方太平洋沖地震の影響を受け、授業が中断された。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。

## 物資運搬、若者が担う

【本紙記者の報告】  
 宮古市立宮古中学校の生徒は、3月15日(土)に発生した東北地方太平洋沖地震の影響を受け、授業が中断された。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。生徒たちは、被災地を支援するために、被災地へ物資を届ける活動を行っている。



平成 23 年 10 月 8 日 岩手日報

# 再起へ今年も運動会

第66回田老地区体育大会（実行委主催）は7日、宮古市の田老一中グラウンドで開かれた。住民有志で開催にこぎ着けた昨年に続き「起ち上がろう。ふるさと田老復興大運動会」をテーマに子どもから高齢者まで約800人が親睦を深め、気持ちのいい汗を流した。

## 宮古・田老



ウツリに見立てたたわしをタモで拾う。田老改訂一で開演するは場者

## 800人が親睦深める「名物行事」引き継ぐ

同大会は震災前は地域対抗だったが、現在は全て個人参加。今回は至拾い、二人三脚パン食い競争など6種目をを行った。種目「田老名物」はウツリに見立てたたわしをタモで拾うなど派手なものは目玉

種目で、出場者は声援を受けてゴールを目指した。

運営スタッフとして参加した田老一中2年の安田ひかるさんは「田老のみんながやっている感じがありがたい。来年もやってほしい」と目を細めた。

戦後復興の象徴として1946年に始まった同大会は過去に、集中豪雨に見舞われた59年と昭和天皇が崩御した89年の2度しか中止したことがない。開催が危ぶまれた昨年も、名物行事を次代に引き継ごうと仮設住宅の住民ら有志が中心となって大会を成功させ、今年につなげた。

開会式では宮古コミュニティ放送研究会がつくった「宮古を元気にするラジオ体操・田老版」が初披露され、号令係の若狭セツ子さん(40)は「みんなの顔を見られて良かった」



手 日 卒 民

2011年(平成23年)12月6日(火曜日)

宮古市田老地区

復興見据え奮い立つ

東日本大震災から間もなく  
身月、被災地の住民たちは  
復旧任務で生活再建を語り、  
復興や農業再生の試みも進  
む。新たなまちづくりの進展  
が本格化する一方、高齢者  
や土産利用など課題は山積み  
で、復興に向けた急務はこ  
れからだ。震災直後と1月に  
現場取材した本紙記者たち  
が、再び訪れた被災地の「今」  
を報告する。

(この企画は1回続きます)

高さ100メートルの巨大防風壁から  
見渡した風景は依然として  
「更地の前」だった。半年ぶ  
りに訪れた宮古市田老地区の  
中心部。強風が砂ぼこりを  
巻き上げ、冬寒さを忍ませ  
る。

生徒一丸

解体作業の収束で重機音が  
消え、ひっそりと静まり返る  
商店街。国道沿いの西、飯  
が森地区の山手に向かうと田  
老一中(佐々木力也校長、生  
徒131人)の校庭で駆け回  
るサッカー部が見えた。  
3月11日、生徒たちは学校  
の裏山に避難して大震災の襲  
来から逃れたが、校舎は被災、  
復興工事が1年10ヶ月にわた

被災地を歩く

東日本大震災 本紙記者ルポⅡ



田老一中の空母舎新設員に就任した(左から)松本一真君、加藤謙太郎君、木村暹樹君、加藤まみさんと担当教師の岡池水さん。被災児童が多く新しい通学環境だが、持ち前の明るさと結束力で学校を盛り上げる＝12月2日

宮古市田老地区の現状。12月1日現在の人口は39  
17人。震災前の8月1日時点に比べて511人減少し  
震災・津波の死者は179人、行方不明者は48人。仮設  
利用者は約30世帯、約1200人になる。被災した136事

業所のうち41事業所が事業再開。22事業所はグリーン  
ピア三陸みやこの仮設店舗「たろちゃんハウス」に入  
居する。田老町商協は焼損963隻のうち918隻が被災し  
たが、国の補助事業で約150隻を確保した。

平成 24 年 5 月 13 日 岩手日報

# 岩手日報

## 汗と希望光る熱戦

東日本大震災の影響で校舎を間借りしたり、グラウンドに仮設住宅が建設されるなどした沿岸の中学校で12日、体育祭や

運動会が開かれた。生徒たちは各種目で熱戦を繰り広げ、力強い応援にも地域復興への願いを込めた。

### 被災各中学校で体育祭、運動会



趣向を凝らした応援を披露する田老一中生ら

## 応援合戦 地域に力

宮古市の田老一中 地域に響き渡った。

（佐々木力也校長、生 全校生徒が赤、白組 徒1・13人）は同校ク に分かれ綱引きやリレ ラウンドで体育祭を開 1などで熱戦を展開 いた。「頑張り頑張れ 応援合戦では同チーム なく団結してきた 田老！」。伝統の応援 が趣向を凝らした踊り 最高に楽しかった」と 合戦の掛け声が、津波 や掛け声を披露し、保 大満足の様子で話し て甚大な被害を受けた 護者や教職員から盛大 た。

昨年3月の大津波が グラウンドや校舎1階 に浸水した同校。早稲 田大応援部が昨秋に続 いて今年も体育祭を盛 り上げた。



平成 24 年 9 月 28 日 岩手日報



岩手大生（中央）と膝を交えて津波防災を考える田老一中の生徒たち

どに行われる予定で、造成工事は来年1月ごろになる見込みだ。造成工事は14年度末の完了を見込み、災害

岩手大生と津波防災議論 宮古の田老一中（佐々木力也校長、生徒113人）の合同授業は27日、同校で開かれた。同大生12人と全校生徒が津波防災で自らできることについて意見交換した。

同大地域防災研究センターの堺茂樹センター長は「津波のメカニズムと津波防災」と題し、田老の巨大防潮堤の効果や課題を講義した。堺センター長は過去の津波被害を受けて高台に移転した県内30地域のうち、7割の21地域が東日本大震災で被災した事例を挙げ、高台

移転の重要性を説いた。

大学生と中学生が12

班に分かれグループ討論した。生徒たちの津波体験を基に「お年寄りを誘導する」「食料や非常用電源を準備する」「自分自身で避難路を知っておく」など



援で絶な 支しをつ つな 復を魅 た 開してい る。

防災対策を班ごとに発表した。同校3年の加倉信輝君は「防災を学べて、大学生との関わりもでき貴重な体験だった」と有意義な時間を過ごしていた。



# 岩手

盛岡総局  
 Y020-0021  
 盛岡市中央通1-6-20  
 ☎ 019-824-2211  
 fax 019-824-2229  
 北上 019-24-6131  
 一関 019-25-3426  
 宮古 019-22-1130  
 盛岡 019-22-1261  
 岩手マイタウン  
 http://mytown.asahi.com/riate  
 購読 配達のご用は  
 ☎ 0120-33-0243  
 (7:00-21:00)  
 広告のご用は  
 ☎ 019-823-6475

## きょうの天気

6-12時 最高気温 13-18時

0	晴	0	0
0	晴	0	0
0	晴	0	0
0	晴	0	0

盛岡 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 40%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 11度 9度 2.0度  
 12度 9度 5.5度  
 11度 9度 3.4度  
 12度 9度 4.4度

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

北北東 大船渡  
 北北東 大船渡  
 北北東 大船渡

湿度 60%  
 風速 2.5m

最高 最低 最低  
 6.23 16.19 8.41  
 16.19 8.41 18.34

# 守りの 堤せつなく 無常な自然の摂理 波が 波が ささやいた



そろいの支援Tシャツを着て歌う田老一中の生徒たち

## 田老一中 震災体験を合唱曲に

被災した宮古市立田老第一中学の生徒たちが14日、震災を乗り越えてきた思いを込めた歌を、同市で開かれた連合音楽会で合唱した。震災や仮設住宅で暮らす生徒もいるが、消えた街への思いや悲しみを「あの日から」と題して歌い、会場を感動させた。

曲は、10月の文化祭や他校との交流で歌った三つのオリジナル曲を編曲したもの。原曲は「ふるさと田老の過去、現在、未来」をテーマに生徒と教師が一括で作った。

「白い霧立ち込め 故郷を包む/白い雲 晴れるな/もともと/もともと 町包め/(中略)/霧が晴れたら/蘇れ ああの町...」

「...守りの 堤せつなく/無常な自然の摂理/通り抜ける...」

「...試練の津波/幾たむご」とい

風に吹かれて/波が 波が/ささやいた」

ストリートに失われてしまっただ町への思いを表す歌詞。静かに全員が歌うと、会場からは大きな拍手がわいた。

出演したのは、全校の113人。白いシャツの上に青込んだのは背中に「果てなき大海原へ」と書かれた楕圓のデザインだ。0日の東京の医師が、生徒のデザインを元に作って寄贈した。

同校は津波で1階は浸水。校庭に民家が流れ着いた。校門の前はいま、何も無くなった街の跡だけが広がっている。それでも同中は、震災について、音楽

だけではなく、作文でも取り上げるなど避けていない。佐々木力也校長は「震災体験を表現することで自分に負けない力を付けて欲しい」と願う。

校歌は、「防浪堤を仰ぎみよた。15日は小学校の部がある。」

音楽会は地域の小中学校の学習発表の場で、昨年は震災で中止になった。会場も被災しており、市内の別の体育館で、2年ぶりに12中学校が参加して開いた。15日は小学校の部がある。

「...試練の津波/幾たむご」とい

「...守りの 堤せつなく/無常な自然の摂理/通り抜ける...」

「...ふるさと田老の過去、現在、未来」をテーマに生徒と教師が一括で作った。

被災した宮古市立田老第一中学の生徒たちが14日、震災を乗り越えてきた思いを込めた歌を、同市で開かれた連合音楽会で合唱した。

曲は、10月の文化祭や他校との交流で歌った三つのオリジナル曲を編曲したもの。原曲は「ふるさと田老の過去、現在、未来」をテーマに生徒と教師が一括で作った。



平成 24 年 12 月 13 日 岩手日報

第3報新報岩手



富古市の田老一中（佐々木力也校長、生徒113人）の3年生39人は12日、授業の一環で作ったクッキーを同市田老のグリーンピア三陸みやこ仮設住宅の

富古市  
田老一中

住民たちに届けた。田老地区のシンボル「三王岩」をデザインした生徒手作りのクッキーに、受け取った住民たちは笑みを広げた。

# 真心クッキーお届け

## 仮設に手作り2千枚



仮設住宅で暮らす住民に、手作りのクッキーを手渡す田老一中の生徒たち

クッキー作りは震災 かりではなく、自分たち後、全国からたくさんのも役に立ちたい」と企画支援を受けてきた生徒たち。材料は日清製粉（東



田老地区の「三王岩」をデザインした手作りクッキー

## 「三王岩」デザイン

京、いわて生協（盛岡市）などの支援を受け、7日から4日間かけて約2千枚を焼き上げた。12日は寒空の下、生徒たちが仮設住宅の一軒一軒を訪ね、かわいらしくラッピングしたクッキーや、心のこもったメッセージカードを住民に手渡した。仮設で生活する鳥飼トシさん（70）と友人の鳥飼アイ子さん（76）は「寒い中、苦勞さま」「おいしそう、本当にうれしい」と温かい贈り物に感謝。生徒たちは住民とのふれあいを楽しみ、交流を深めた。

影田久保樹君は「一枚枚が多くて大変だったけれど、楽しく力を合わせて完成できた」と語り返り、佐々木優衣さんは「地域の方が笑顔で明るくなってくれるきっかけになれば」と願った。

# 教職員名簿

## 平成 22 年度 教職員名簿

No.	職	氏 名	学年・担任	校務分掌 部活動	教科	本校年数
1	校 長	佐々木 力 也				1 年
2	副校長	高 橋 祐 子		総務・PTA	英語	2 年
3	主任事務主査	南 野 和 生		庶務・会計		3 年
4	教 諭	荒 谷 留里子	2 年主任	研究主任 吹奏楽	音楽 国語	5 年
5	教 諭	八重樫 孝 俊	3 年主任	教務主任 野球	英語 技術	3 年
6	教 諭	嶋 崎 幸 子	1 年主任 1B 担任	生徒指導主事 バレーボール	国語	3 年
7	教 諭	小田島 智 子	3 年副担	進路指導主事 卓球男子	数学 理科	7 年
8	教 諭	生 駒 由紀子	3A 担任	前期生徒会 卓球女子	家庭 社会	3 年
9	教 諭	住 吉 オリエ	すみよし担任	特別支援 バスケットボール	美術	3 年
10	教 諭	小笠原 清	2A 担任	後期生徒会 サッカー	社会	2 年
11	教 諭	藤 村 祥 子	2B 担任	環境・国際理解教育 バレーボール	英語	2 年
12	教 諭	杉 浦 望	3B 担任	地区生徒会・部活動 バスケットボール	数学 保健体育	3 年
13	教 諭	菊 池 永	1A 担任	特別活動 野球	理科	1 年
14	講 師	浅 沼 徹	1 年副担	安全指導 サッカー	保健 体育	1 年
15	講 師	阿 部 一 也	2 年副担	視聴覚教育 野球	数学	1 年
16	養 護 教 諭	木 村 久美子		保健主事		3 年
17	用務員	琴 畑 喜美雄		諸用務		7 年
18	支援員	佐々木 和 枝		特別支援教育支援員		1 年
19	推進員	小 嶋 陽 子		学校生活サポート推進員		1 年
20	S・C	古 舘 菜穂美		スクール カウンセラー		1 年

## 平成 23 年度 教職員名簿

No.	職	氏 名	学年・担任	校務分掌 部活動	教科	本校年数
1	校 長	佐々木 力 也				2 年
2	副校長	甲 谷 清 隆		総務・PTA	英語	1 年
3	教 諭	暮 目 靖 子	1 年主任	研究主任 卓球男子	国語	1 年
4	教 諭	荒 谷 留里子		教育相談 吹奏楽	音楽	6 年
5	教 諭	八重樫 孝 俊	3 年主任	教務主任 野球	英語 技術	4 年
6	教 諭	嶋 崎 幸 子	2 年主任	生徒指導主事 バレーボール	国語	4 年
7	教 諭	安 藤 聖 子	安藤学級担任	特別支援 バスケットボール	社会	1 年
8	教 諭	小田島 智 子	3B 担任	進路指導主事 卓球男子	数学	8 年
9	教 諭	生 駒 由紀子	1B 担任	キャリア教育 卓球女子	家庭	4 年
10	教 諭	小笠原 清	3A 担任	前期生徒会 サッカー	社会	3 年
11	教 諭	藤 村 祥 子	2 年副担	国際理解教育 バレーボール	英語	3 年
12	教 諭	杉 浦 望	1A 担任	地区生徒会・部活動 バスケットボール	数学 保健体育	4 年
13	教 諭	菊 池 永	2A 担任	後期生徒会 野球	理科	2 年
14	養 護 教 諭	木 村 久美子		保健主事		4 年
15	臨時事務 職員	刈 屋 和 人		庶務・会計		1 年
16	講 師	島 野 洋 亮	2 年副担	教育相談 サッカー	保健 体育	1 年
17	用務員	琴 畑 喜美雄		諸用務		8 年
18	非常勤講師	中 館 邦 子		きめ細かな 指導対応 非常勤講師	美術	1 年
19	支援員	盛 合 高 敬		特別支援教育支援員		1 年
20	推進員	小 嶋 陽 子		学校生活 サポート推進員		1 年
21	S・C	古 館 菜穂美		スクール カウンセラー		1 年
22	講 師	齊 藤 実可子	3 年副担	バレーボール	英語	
23	講 師	佐 藤 勝 之	1 年副担	卓球男子	社会	

## 平成 24 年度 教職員名簿

No.	職	氏 名	学年・担任	校務分掌 部活動	教科	本校年数
1	校 長	佐々木 力 也				3 年
2	副校長	甲 谷 清 隆		総務・ PTA 復興教育		2 年
3	事 務 主 査	鈴 木 清 幸		庶務 学校会計		1 年
4	教 諭	臺 目 靖 子	1 年主任	教務主任 吹奏楽	国語	2 年
5	教 諭	柏 村 実		研究主任 吹奏楽	音楽 技術	1 年
6	教 諭	近 藤 成 樹	3 年主任	生徒指導主事 卓球男子	数学 美術	1 年
7	教 諭	嶋 崎 幸 子	3A 担任	進路指導主事 バレーボール	国語	5 年
8	教 諭	安 藤 聖 子	安藤学級担任	特別支援 バスケットボール	英語	2 年
9	教 諭	生 駒 由紀子	2 年主任	教育相談 卓球男子	家庭 社会	5 年
10	教 諭	小笠原 清	1 年副担	視聴覚教育 バスケットボール	社会 保体	4 年
11	教 諭	矢 吹 梨 沙	2A 担任	国際理解教育 卓球	英語	1 年
12	教 諭	藤 村 祥 子	育児休業			
13	教 諭	村 上 雄 基	1A 担任	部活動担当 野球	数学	1 年
14	教 諭	菊 池 永	2B 担任	道徳教育 野球	理科	3 年
15	養 護 教 諭	木 村 久美子		保健主事		5 年
16	講 師	高 橋 宏 彰	2 年 副担任	教育相談 サッカー	保健体育	1 年
17	講 師	松 田 剛	3 年 副担任	地区中体連理事 サッカー	数学	1 年
18	講 師	齊 藤 実可子	1 年 副担任	読書指導 バレーボール	英語	1 年
19	用務員	琴 畑 喜美雄		諸用務		9 年
20	学校 支援員	久 保 一 真				1 年
21	SC	前 川 真由美		スクール カウンセラー		1 年

# おわりに

宮古市立田老第一中学校 教諭 暮目靖子

# おわりに

宮古市立田老第一中学校 教諭 暮目 靖子

教室から見える海は何事もなかったかのように青くゆったりとしています。あの日、たくさんの人達の命と田老の町を根こそぎもっていった同じ海とは思えません。壊れた防浪堤と草だけが生い茂る町跡。その中を歩いて登校する生徒はわずかで、大半は仮設住宅から大型バスで学校に通っています。登下校の様子は震災前とすっかり変わってしまいました。生徒たちは部活動や駅伝練習に汗を流し、体育祭や文化祭の活動に明るく取り組んでいます。その姿に元気をもらい、逆に私たちが励まされているように思います。

この震災作文を書くにあたっては正直心配なことはありません。震災によって抱えている問題や心の有り様が生徒一人ひとり違います。自分の気持ちや現在の生活をあまり表に出すことなく学校生活を送る生徒たちを見て、私たち教職員も言葉を選びながらの授業でした。そんな中、全国からいただいたご支援への返礼活動を通して変化が生まれました。震災当時の自分の状況や現在の田老の様子、そして辛く悲しい経験を少しずつ話したり書いたりするようになったのです。

できれば経験したくなかった震災ですが、だからこそ自分たちの経験したことを伝えたいという思いをもった生徒がたくさんいることを震災作文指導を通して実感しました。そして、「ふるさと田老」の復興を心から願い、もとの田老の姿に戻ることに希望を持っていることも。生徒たちは「書く」ことを通して現実と向き合い、未来に夢をもつことができたのではないのでしょうか。



冬の防浪堤



## い の ち

宮古市立田老第一中学校 津波体験作文集

---

2013（平成25）年3月11日 第一刷発行

発行人 堺 茂樹

編集人 山崎 友子

発行所 岩手大学地域防災研究センター

〒020-8551 岩手県盛岡市上田 4-3-5

TEL・FAX 019-621-6448

編集協力 宮古市立田老第一中学校

題字起毫

工藤由美子（盛岡市立下橋中学校スクールカウンセラー）

カレンダーの額

保存等のアドバイス 佐藤由紀男（岩手大学教授）

製作加工の支援 加賀 亨（岩手大学技術部）

表紙写真撮影

佐々木力也（宮古市立田老第一中学校校長）

印刷 株式会社 五六堂印刷

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通 3-16-15

無断複製複写を禁じます。乱丁本・落丁本はお取替え致します。



岩手大学地域防災研究センター